

発掘調査報告第25集

駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県は場整備事業

(昭和62年度分)埋蔵文化財緊急発掘調査

# 反目南遺跡

1988. 3

上伊那地方事務所

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第25集

駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県ほ場整備事業

(昭和62年度分) 埋蔵文化財緊急発掘調査

## 反 目 南 遺 跡

1988. 3

上伊那地方事務所

駒ヶ根市教育委員会



上段 1 号住，中段 7 号住，下段 10 号住

## 序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根市東部土地改良区東部地の県営は揚整備事業に伴い、昭和62年度に実施しました反目南遺跡の緊急発掘調査の報告書であります。

反目南遺跡付近一帯は、東伊那地区において遺跡が最も濃密にある所であります。今回の調査によって多くの遺構、遺物が確認されておりこのことを物語っております。

市内では初めての方形周溝墓、礎石を持った住居址、朱で彩色された土師器の一群、さらに縄文時代早期の土器群など、その成果は目を見はらせるものがあり、今後の研究上重要な役割を果たすものと確信いたしております。

炎天下の中、発掘調査にあたられた友野良一団長を始めとする調査団の皆さん、快く発掘作業に参加して下さった地元の方々、事業に対し深いご理解をいただきいた東部土地改良区並びに上伊那地方事務所関係者の方々、地主の皆さん方等、多くの方々のご協力、ご厚志によって、無事初期の目的を果たすことができました。

ここに関係者の皆さん方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が地域史研究の一助にならんことを念願する次第であります。

昭和63年 3月15日

駒ヶ根市教育長 木 下 衛

## 例　　言

- 1 この報告書は、昭和62年度駒ヶ根東部地区県営は揚整備事業に伴うもので、文化庁補助事業と上伊那地方事務所の委託を受けて実施したものである。
- 2 本報告書は契約期間内にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、資料の再検討は後日の機会に譲ることとした。
- 3 焼土はドットで表わし、柱穴の深さは床面からの深さをcmで示している。層位、縮尺は各図に示してある。
- 4 遺構の製図、土器・石器の実測、製図は氣賀沢進があたった。
- 5 縄文時代早期の土器の採拓・図版編成には会田進・亀割均両氏があたった。
- 6 写真撮影は遺構については、友野・気賀沢が行い、遺物については編集を含め木下平八郎が行った。
- 7 本報告の編集は気賀沢が行い、第三章第9節土器の項を除いて全て気賀沢が執筆した。  
第三章第9節土器の項は会田進氏の寄稿である。
- 8 本報告をまとめるに当たり、多くの方々からご助言、ご指導ご協力をいただいた。特に会田進・亀割均の両氏には忙しい中縄文時代早期土器の採拓、図版編成にあたっていただき、とりわけ会田進氏には原稿執筆までお願いし快くお引き受けいただき感謝にたえない。また県埋文センターの樋口昇一・伊藤友久の両氏よりは礎石を持った住居址についてご指導を賜った。ここに誌して謝意としたい。
- 9 遺物及び実測図並びに調査に伴う関係資料は駒ヶ根市立博物館に保管してある。

## 目 次

巻頭図版

序 文

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

### 第Ⅰ章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形・地質.....1

第2節 歴史的環境.....1

### 第Ⅱ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過及び保護措置.....5

第2節 発掘調査経過.....7

### 第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査概要.....13

第2節 住居址と遺物.....13

第3節 方形周溝墓と遺物.....43

第4節 土壙と遺物.....48

第5節 焼土址と遺物.....52

第6節 溝状造構と遺物.....54

第7節 柱穴址.....66

第8節 壺棺墓.....67

第9節 縄文時代早期遺物集中地点.....67

第Ⅳ章 まとめ.....77

## 挿 図 目 次

第1図 反目南遺跡位置図.....	2
第2図 反目南遺跡概要図.....	3
第3図 反目南遺跡周辺遺跡位置図.....	4
第4図 反目南遺跡遺構概略図（折り込み）.....	9, 10
第5図 反目南遺跡遺構全測図（折り込み）.....	11, 12
第6図 第1号住居址実測図.....	14
第7図 第1号住居址カマド実測図.....	14
第8図 第1号住居址出土遺物.....	15
第9図 第1号住居址出土遺物.....	16
第10図 第2号住居址実測図.....	17
第11図 第2号住居址断面図.....	18
第12図 第2号住居址出土遺物.....	20
第13図 第2号住居址出土遺物.....	21
第14図 第3号住居址実測図.....	22
第15図 第3号住居址出土遺物.....	22
第16図 第3号住居址出土遺物.....	23
第17図 第4号住居址実測図.....	24
第18図 第4号住居址出土遺物.....	25
第19図 第5号住居址実測図.....	26
第20図 第5号住居址出土遺物.....	26
第21図 第6号住居址実測図.....	27
第22図 第6号住居址出土遺物.....	27
第23図 第7号住居址実測図.....	28
第24図 第7号住居址出土遺物.....	29
第25図 第7号住居址出土遺物.....	30
第26図 第8号住居址実測図.....	31
第27図 第8号住居址断面図.....	32
第28図 第8号住居址出土遺物.....	33
第29図 第8号住居址出土遺物.....	34
第30図 第9号住居址実測図.....	35
第31図 第9号住居址出土遺物.....	36
第32図 第10号住居址実測図.....	37
第33図 第10号住居址カマド実測図.....	38

第34図	第10号住居址出土遺物	39
第35図	第10号住居址出土遺物	40
第36図	第11号住居址実測図	41
第37図	第12号住居址実測図	42
第38図	第12号住居址出土遺物	43
第39図	第1号方形周溝墓実測図	44
第40図	第2号方形周溝墓実測図	45
第41図	第2号方形周溝墓出土遺物	46
第42図	第3号方形周溝墓実測図	46
第43図	土壤実測図	47
第44図	土壤実測図	48
第45図	土壤出土土器	49
第46図	土壤出土土器	51
第47図	焼土址実測図	53
第48図	第4号焼土址出土遺物	53
第49図	第1号溝状遺構実測図（折り込み）	55, 56
第50図	第1号溝状遺構断面図（折り込み）	57, 58
第51図	第1号溝状遺構出土遺物	65
第52図	第2号溝状遺構実測図	59, 60
第53図	第2号溝状遺構実測図	61, 62
第54図	第2号溝状遺構出土遺物	65
第55図	柱穴址実測図	63, 64
第56図	壺棺墓出土遺物	66
第57図	縄文時代早期遺物出土状況	67
第58図	縄文時代早期土器拓影図1	69
第59図	縄文時代早期土器拓影図2	71
第60図	縄文時代早期土器拓影図3	72
第61図	縄文時代早期石器実測図1	75
第62図	縄文時代早期石器実測図2	76

## 図版目次

- 図版1 遺跡遺景
- 図版2 第1号住居址
- 図版3 第1号・2号住居址と第1号方形周溝墓
- 図版4 第2号住居址
- 図版5 第4号住居址
- 図版6 第4号住居址
- 図版7 第5号住居址
- 図版8 第7号住居址
- 図版9 第8号住居址
- 図版10 第8号住居址
- 図版11 第8号住居址
- 図版12 第8号住居址
- 図版13 第9号・10号住居址
- 図版14 第12号住居址と第2号方形周溝墓
- 図版15 4号、6～8号土壤
- 図版16 9号、10号土壤
- 図版17 焼土址と第2号溝状遺構
- 図版18 第1号溝状遺構
- 図版19 第1号溝状遺構
- 図版20 第1号住居址出土遺物
- 図版21 第2号住居址出土遺物
- 図版22 第4号・5号・8号9号・12号住居址出土遺物
- 図版23 第7号住居址出土遺物
- 図版24 第10号住居址出土遺物
- 図版25 第10号住居址、4号土壤出土遺物
- 図版26 土壤・焼土址出土遺物
- 図版27 繩文時代早期土器（押型文）
- 図版28 繩文時代早期土器（縄文）
- 図版29 繩文時代早期土器（その他の縄文）

# 第1章 遺跡の環境

## 第1節 位置及び地形・地質 (第1・2図 図版1)

当遺跡は駒ヶ根市東伊那栗林に所在する。JR飯田線大田切駅より東へ約3kmに位置し、標高は、600m前後である。反目南遺跡は栗林地区の曾利目に位置しており、遺跡名も曾利目南遺跡となるのが妥当との考えもあるが、江戸時代の検地帳に反目の記載もあり、登録名も反目南遺跡となっているため、あえて変更してないことを了知いただきたい。

西の木曾山脈、東の赤石山脈その前山の伊那山脈の間を流れる天竜川によって形成された河岸段丘は、天竜川に注ぐ多くの支流によって開析され、田切地形が造られている。当遺跡は天竜川の第1段丘突端にあり、その比高は30mを測ることができ、北には塩田川、南には天王川が天竜川に注ぎ開析されている。東側は、反目(第3図16)・遊光(第3図17)遺跡のある第2段丘がある。その段丘下、遺跡の東側は天王川の小支流によって湿地帯を形成し、突端部では開析している。遺跡のすぐ西は急な段丘崖となり今までに何回となく崩落があったと思われ、第3号方形周溝墓や第6号住居址は大半が失われている。この状態からすると台地は現況より10m位はまだ伸びていたものと思われる。

地質基盤は疊層から成り、その上に新期ローム層が堆積する。東側は天王川の小支流により、ローム層が削られ砂層・砂利層となり、新期ローム層面は現地形からみるよりも南東に傾斜しており、その上に黒色土がのっている。遺構は第2号溝状遺構をのぞき、このローム層を掘り込んで造られており、占地条件は意外と狭いものである。

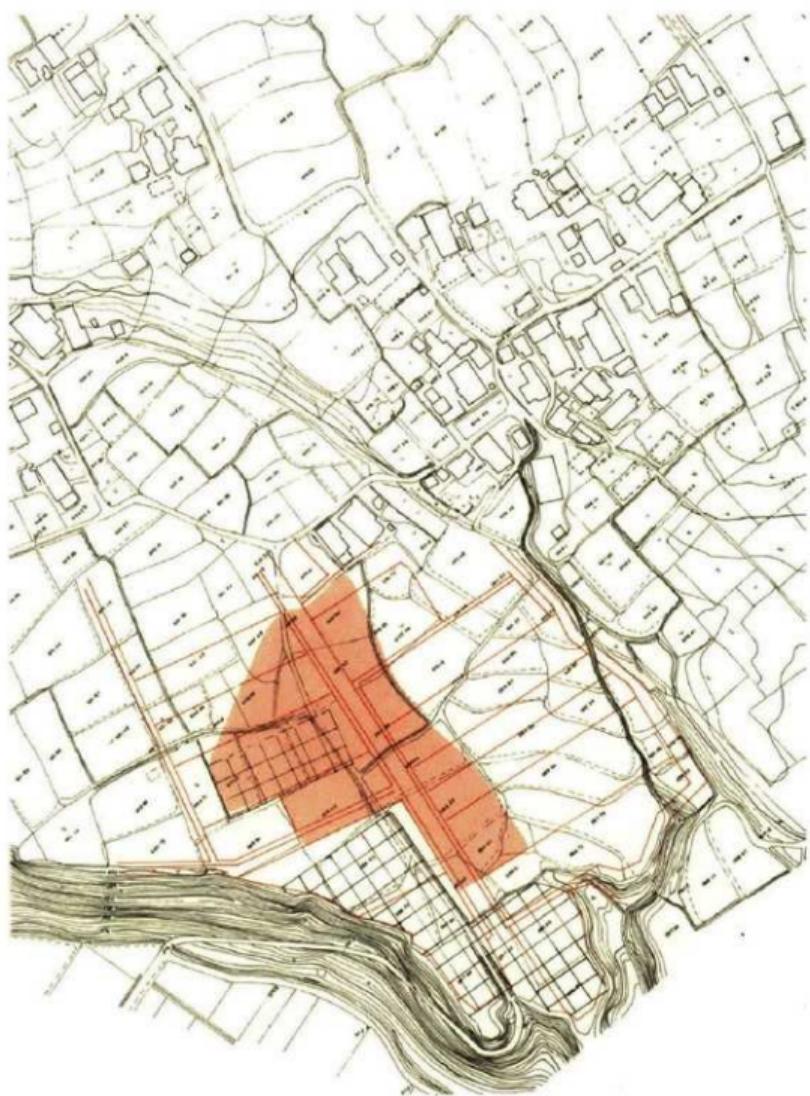
## 第2節 歴史的環境 (第3図)

天竜川の河岸段丘の発達した東伊那地区は小支流が開析して丘陵上地形が発達するとともに、遺跡の宝庫でもある。大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」に多くの遺跡が確認されている。昭和24~26年に発掘調査された東伊那遺跡は有名である。山麓扇状地に縄文時代の山田遺跡、下った第2段丘面上に縄文と弥生時代の複合遺跡である丸山遺跡、弥生時代の集落址である狐くぼ遺跡(22)、第1段丘面上に古墳時代から平安時代の殿村遺跡(21)があり、遺跡の立地面から注目される。

縄文時代の遺跡は中期の大久保(4)、上塩田(9)、反目(16)、後期の青木北(11)が知られる。弥生時代は多くの遺跡が知られ、垣外上(6)、善込(7)、栗林神社東(8)、反目(16)、遊光(17)、狐くぼ(22)がある。古墳時代から平安時代のものとしては、箱塚(5)、上塩田(9)、反目(16)、遊光(17)、殿村(21)がある。



第1図 反目南遺跡位置図 ( $S=1:200,000$ )



第2図 反目南遺跡概要図 ( $S=1:3000$ )

(赤線は、ほ場整備計画線 ●は埋立保存部分)



- 1 反目南 2 高田城 3 大久保城 4 大久保 5 箱體 6 墙外上 7 善込  
 8 栗林神社東 9 上塙田 10 塙田城 11 青木北 12 青木 13 青木城 14 城村城  
 15 城村古城 16 反目 17 遊光 18 遊光城 19 稲村城 20 稲村古城 21 殿村  
 22 孤くば 23 原城

第3図 反目南遺跡周辺遺跡位置図 (S=1:20,000)

これらの遺跡とともに、天竜川左岸はその立地条件を生かした中世城館址の多いことでも知られ、東伊那においても、大久保城（3）、高田城（2）、青木城（13）、塩田城（10）、城村城（14）、城村古城（15）、遊光城（18）、稻村城（19）、稻村古城（20）があり、隣接する中沢地区原には原の元城（23）が多い。このうち発掘調査されたものは青木城のみであり、その性格は不明である。青木遺跡（12）は発掘調査が行われ青木城に関連するもの、また上塩田遺跡も中世の遺物を出土しており、塩田城あるいは、青木城との関連が考えられる。

当遺跡の東北約600m山麓に展開する箱型遺跡は中世の遺物が出土しており、付近には平安末～鎌倉初期と考えられる五輪塔、応永年間の宝鏡印塔、中世様式を残す六地蔵石幢など中世石造物も多く残り注目すべき所である。当遺跡の東側段丘上には反目・遊光の大遺跡が展開している。さらに天王川小支流をはさんだ対岸には、堀状遺構が今回現地確認され今後の研究が必要であるが、相当大規模な城館址を想定でき一応遊光城と呼ぶこととした。

## 第II章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過及び保護措置

県営ほ場整備事業駒ヶ根市東部地区の昭和62年度施工区域内に反目南遺跡が含まれることとなり、昭和61年9月11日に県教委・上伊那地方事務所・地元関係者・市教育委員会並びに専門家林茂樹・友野良一氏出席のもと事前保護協議を行った。

その結果、調査費用330万円（国庫補助事業分907,500円、農政部局側2,392,500円）、調査面積490m<sup>2</sup>以上の事業計画を策定した。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、反目南遺跡発掘調査団を組織し、团长には、友野良一氏をお願いして昭和62年7月29日より調査に入った。埋立保存可能地については極力協力いただき第2図に示すとおりである。

事務手続きは以下の通りである。

昭和62年4月27日 文化財関係国庫補助事業内定通知（4月3日内定）5月6日申請 7月20日交付決定通知

6月8日 埋蔵文化財発掘調査の通知

6月30日 県費補助事業内示 7月3日申請 8月5日交付決定通知

7月25日 上伊那地方事務所長と駒ヶ根市長との委託契約

7月27日 市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との再委託契約

7月29日 発掘調査開始

○駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧問 小平 善信 (駒ヶ根市文化財保存会会长)  
〃 鈴木 義昭 (駒ヶ根市教育委員長) (昭和62年9月30日まで)  
〃 中山 敬及 (〃〃) (昭和62年10月1日より)

会長 木下 衛 (駒ヶ根市教育長)

理事 中村 平一 (駒ヶ根市教育次長)  
友野 良一 (駒ヶ根市文化財審議会会长)  
松村 義也 (〃〃 副会長)  
竹村 進 (〃〃 委員)  
中山 敬及 (〃〃〃) (昭和62年9月30日まで)  
林 趟 (〃〃〃)  
福沢 正陽 (駒ヶ根市立博物館長)

監事 宮下 恒男 (駒ヶ根市役所)  
北沢 晋六 (駒ヶ根市郷土研究会会长)

幹事 堀 勝福 (駒ヶ根市教育委員会社会教育係長)  
滝沢 修身 (〃〃 社会教育係)  
気賀沢 進 (駒ヶ根市立博物館)  
白沢 由美 (〃〃 嘴託)

○反目南遺跡発掘調査団

団長 友野 良一 (日本考古学協会会員) <発掘担当者>  
調査主任 気賀沢 進 (〃〃) <〃>  
調査員 木下 平八郎 (長野県考古学会会員)  
小町谷 元 (上伊那考古学会会員)  
小松原 義人 (長野県考古学会会員)  
下平 博行 (国学院大学学生)  
和田 武夫 (長野県考古学会会員)  
特別調査員 会田 進 (日本考古学協会会員)  
亀割 均 (長野県考古学会会員)

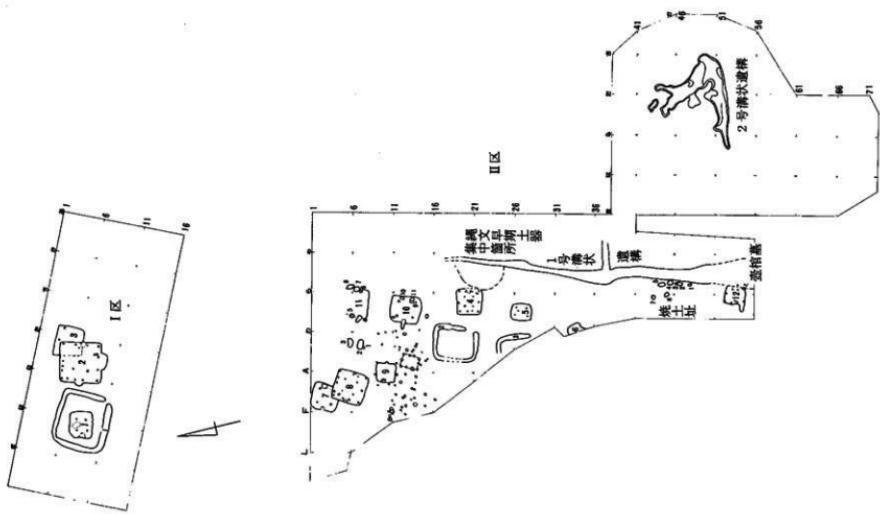
(50音順)

駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会事務所 駒ヶ根市上穂栄町23番1号  
駒ヶ根市立博物館内

## 第2節 発掘調査経過

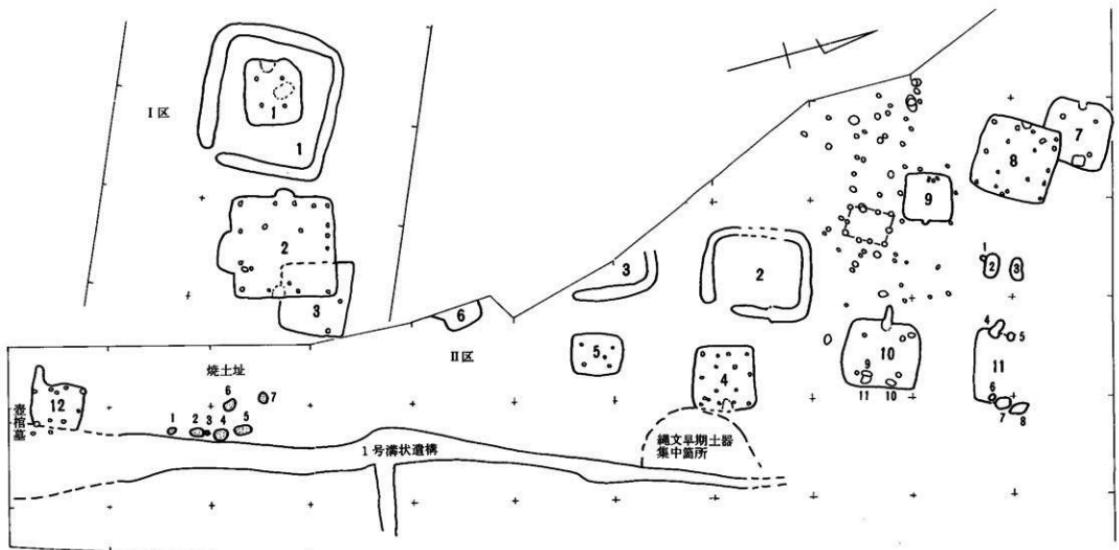
- 7月28日（火） 古城南遺跡より器材運搬
- 7月29日（水） 団長出席のもと発掘調査開始式。器材点検及び道具の手入れ、テント設営、草刈りを行う。午後第I区1~12一か~まグリッド設定。5~11一ぬ~ほに幅1mぐらいの方形に周る溝状造構確認。
- 7月30日（木） 溝状造構8区に分け掘り始める。周溝南東部にブリッジがみられ、方形周溝墓（1号）とする。内部に自然石を伴う落ち込みある。
- 7月31日（金） 1号方形周溝墓の堀完掘。内部の落ち込み精査タタキあり第1号住居址とする。早実中等部学生現地研修1~11一あ~かのIII層面削平。
- 8月1日（土） 第1号住居址精査西壁カマド付近に遺物集中。1号方形周溝墓東に大きな落ち込み確認一部掘り下げる。2号住居址とする。その北東に重複する住居址3号を確認。
- 8月2日（月） 1号住居址、1号方形周溝墓清掃。2号・3号住居址掘り下げる。2号住居址は3号住居址に貼り床しており、10m方形の大形住居址で床面上に直線上に並ぶ土石台がある。縁軸2点が出土する。
- 8月4日（火） 2号住居址は南と西に張り出し部を持つ。床面上には自然石が直線上に配置されており特殊な構造の住居址である。3号住居址南西部の2号住居址の貼り床については、保存のため掘らないこととする。第I区からは方形周溝墓と特殊な2号住居址が確認されたが、水田下に埋没保存のこととなつた。第II地区道路東側の水田の草刈を行い、グリッド設定後63一す・ち、67一す・ち、69一そ・て、71一ちを試掘。
- 8月5日（水） 2号住居址精査清掃。3号住居址精査。第II地区50一ち、52一てより礎層を掘り込む落ち込み確認全面発掘に切り換える。2時30分雨のため作業中止。
- 8月6日（木） 41~56一か~などの表土重機により剝ぐ。地場削り遣構検出に努める。3号住居址精査。1号住居址実測
- 8月7日（金） 41~56一か~な地場削り陶器片出土。砂疊層を掘り込んで黒色砂質上の落ち込みあり。3号住居址精査。1号方形周溝墓・3号住居址実測。
- 8月8日（土） 昨日に続き落ち込み精査、複雑な溝状造構となる。午後作業休
- 8月10日（月） 溝状造構精査。第I地区埋め戻し。18~36一む~わ水田耕土重機による排土。つづいて地場削り遣構確認を行う。
- 8月11日（火） 37~58一に~ほ水田耕土重機にて剝ぐ。下部精査砂疊層落ち込は見当たらぬ。旧水田境18~21一む~もに溝状造構あり、水田による段差あるも南東部開口部あり方形周溝墓と考えられる。その南にL字形の溝状造構、東側4号とその南側に5号住居址を確認する。

- 8月12日（水） 2号・3号方形周溝墓、3号・4号住居址精査。4号住の南東部黒色土の大きな落ち込みある。さらにその東土手下部に土手に沿った溝状造構確認される。
- 8月17日（月） 4号・5号・6号住居址精査。5号住居址南に住居址らしき落ち込みあり、精査するも住居址確認できない。4号住居址東黒色土落ち込み精査
- 8月18日（火） 4号・5号住居址精査。4号住居址は小形ながら2号住居址同様礎石を持つ住居址である。4号住居址東側黒色土は深く、縄文土器が出土する。5号住居址南側の精査行うも造構確認できない。
- 8月19日（水） 5号住居址精査・北寄り埋甕炉確認。4号住居址東黒色土深く下部より押型文土器と表裏縄文が共伴して出土する。住居址の可能性もあり注意が必要である。土手下に確認された溝状造構精査舟底状を呈し浅く砂が流入している。41~56—や～わ草刈後グリット設定。
- 8月20日（木） 4号住居址縄文早期包含層精査。40~43—や～ら重機にて表土はぎ。53~55—や～ら第III層まで掘り下げ。
- 8月21日（金） 1~14—や～Jまで重機による表土はぎ行う。39~45—や～る造構検出に努める。縄文時代早期包含層遺物を探り上げローム面まで下げるも造構は検出できなかった。
- 8月24日（月） 1~14—や～J造構検出行う。7・8・9・10・11号住居址と土壤らしき落ち込み、柱穴址確認される。7~10号住居址掘り下げ。
- 8月25日（火） 7~10号住居址精査
- 8月26日（水） 午前中39~45—や～るローム面まで掘り下げ。午後7~10号住居址精査。7号住居址西側カマド付近に遺物集中。8号住居址は7号住居址の南東部を切っており壁ぎわにと中央に礎石を持っている。10号住居址も西カマド付近に遺物集中している。
- 8月27日（木） 7~10号住居址清掃。1~8号土壤及び住居址南西部の柱穴址精査。
- 8月28日（金） 柱穴址精査。10号住居址東壁ぎわに貼り床された9~11号土壤検出精査。41~43—や～わ表土はぎ行う。地場中に遺物みられる。11号住居址精査。
- 8月29日（土） 9~11号土壤精査。9号・10号とも土壤内に礎が埋め込まれ、9号よりは高塙が出土。1号溝状造構南に行くに従い幅広くなり段丘崖に続くものと思われる。一部精査。12号住居址精査東は溝状造構によって切られている。
- 8月31日（月） 1号溝状造構段丘深くなり全面発掘は無理なため、トレンチ方式とする。雨のため午後作業中止。
- 9月1日（火） 1号溝状造構精査。1~7号焼土址精査。器材片付けテント撤収して現場作業は今日にて終了。
- 9月2~5日 測量及び器材運搬。



第4図 反日南遺跡遺構概略図 ( $S^{-}=1:1000$ )





第5図 反目南遺跡遺構全測図 ( $S = 1:400$ )



## 第III章 発掘調査

### 第1節 調査概要 (第2・4・5図)

反目南遺跡一帯は、古くからの水田地帯で、かつて南西突端部に遺物が散布していたことから、主体を第II区南西部に置くこととした。北側部分は第I区は造成段階において立ち会い確認することとした。幸い北側は造成が遺構面まで及ぶ所がなく、一枚の土場において遺構面ぎりぎりに達したため調査を行うこととなり、地続きの南側部分は埋立保存が可能となった。また第I区検出の遺構も水田下に埋立保存できた。

第I区は新ほ場に沿って西方向に50音順、南方向に算用数字を用いた。第II区は遺跡の中央を通る旧道に主軸をとり第I区と同様とした。

調査方法はグリッド ( $2 \times 2$  m) 試掘ののち、遺構確認によって全面発掘に切り換えることとしたが、遺構が全面にわたったため、重機を用いて表土はぎをほぼ全面に行った。

遺構番号は第I・II区通し番号としてある。

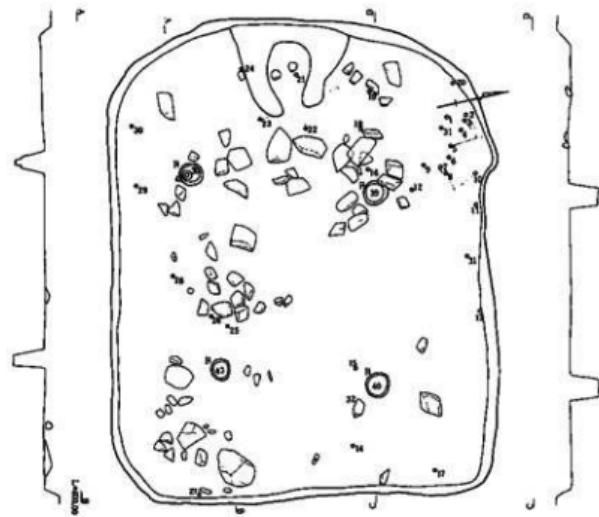
### 第2節 住居址と遺物

#### 1) 第1号住居址 (第6~9図 口絵 図版2・3・20)

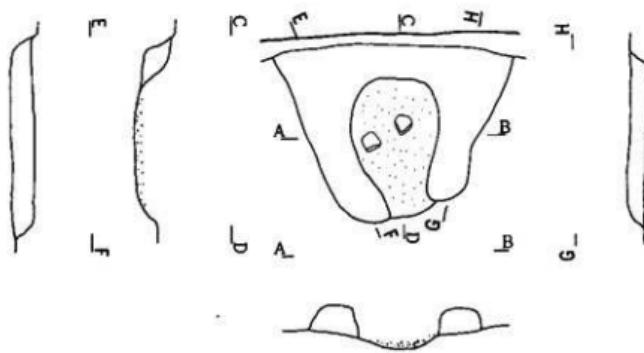
##### 遺構 (第6・7図 図版2・3)

本住居址は第I区第1号方形周溝墓内部に確認されたもので、カマドのある西側が張り出しが東西6.5m、南北5.3mの隅丸長方形を呈す。壁はなだらかで現存壁高は30cm前後である。床面は非常に固く西側カマド周囲がやや下がる。主軸方向はN-78°-Wで東側が入口と思われる。カマドは西壁やや南寄りにあり粘質ロームを用いたもので抽石はまったくみられない。内部はわずかに掘りくぼめられ焼土と灰が薄く堆積していた。柱穴はP1~P4の4本である。

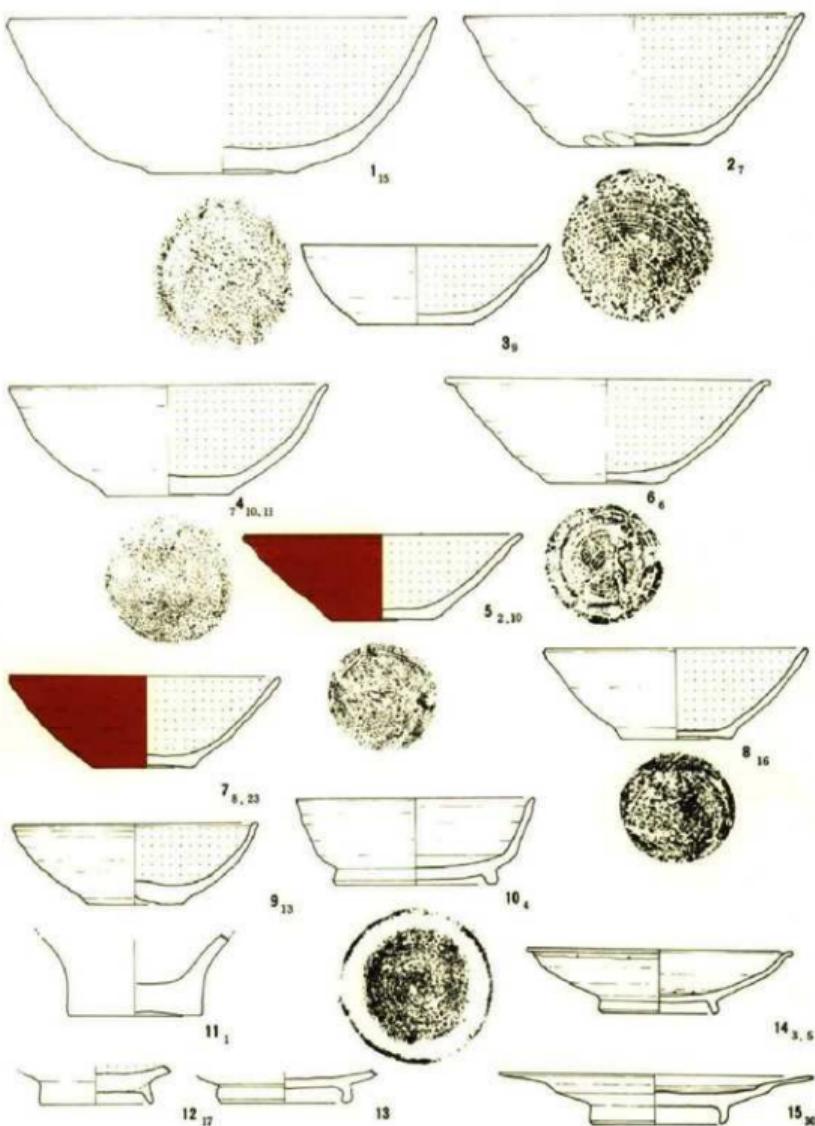
カマドの手前及び住居址南側床面上に河原石が多数みられた。中には床面を若干掘り込んでいたものもあり、何らかの意図を持ったものと考えられる。顕著な使用痕などを示すものはみられなかった。遺物は豊富で、完形品も多い。北西壁ぎわに特に集中してみられ灰釉高台付壺(第8図14)、壺(2)、壺(3~8)とともに、編物用錐石こもで石が5点(第6図5)が出土している。こもで石は31よりも1点出土している。P4内部より灰釉段皿(15)と長頸瓶の口縁の一部が出土している。32・31は砥石である。第8、9図に図化できなかった18~21、24~27は土師器の壺ないし壺の破片である。



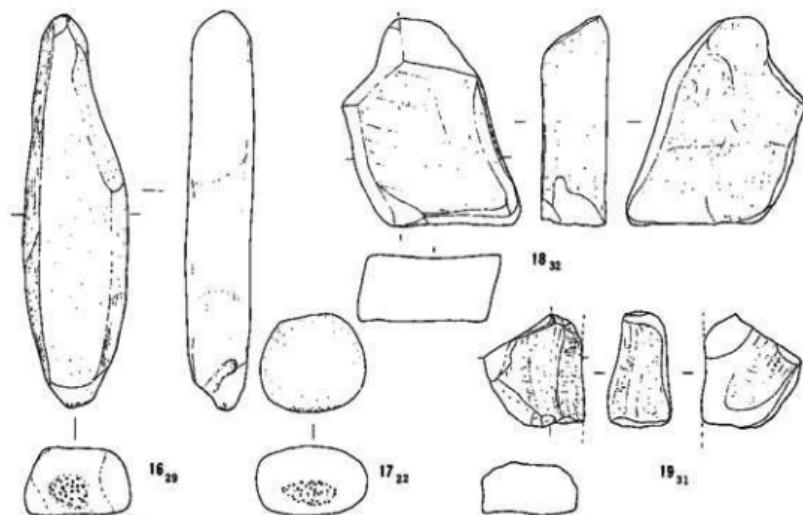
第6図 第1号住居址実測図 ( $S=1:80$ )



第7図 第1号住居址カマド実測図 ( $S=1:40$ )



第8図 第1号住居址出土遺物 (S=1/3 小数字は出土位置を示す。以下同じ)



第9図 第1号住居址出土遺物 (16、17は1/3、18、19は1/6)

#### 遺物 (第8・9図 口絵 図版20)

前述したとおり遺物は多く完形に近いものが数多くみられる。1・2は土師器の鉢で内面黒色土器である。3～9は土師器の壺すべて内面黒色土器である。5・7外面には朱が施され5は底部まで認められる。7はわずかに朱の痕跡をとどめている。6は高台痕が認められもとは高台を有していたものと思われる。11は土師器の壺の底部、10・12は高台付壺で10は須恵器、12は土師器である。13～15は灰釉陶器で13・14は高台付皿、15は高台付段皿である。

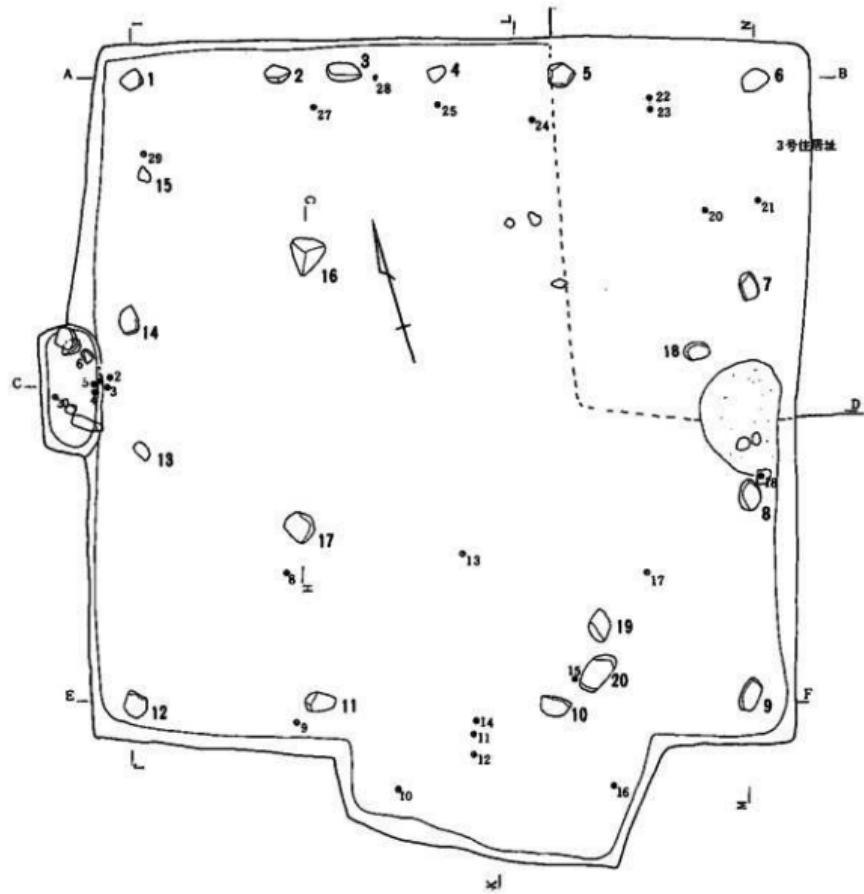
須恵器は10の外には壺の破片が出土しているのみである。図化でき得なかった土師器の壺の内にも内黒のものがみられ一つの特色である。時期は平安時代後期である。

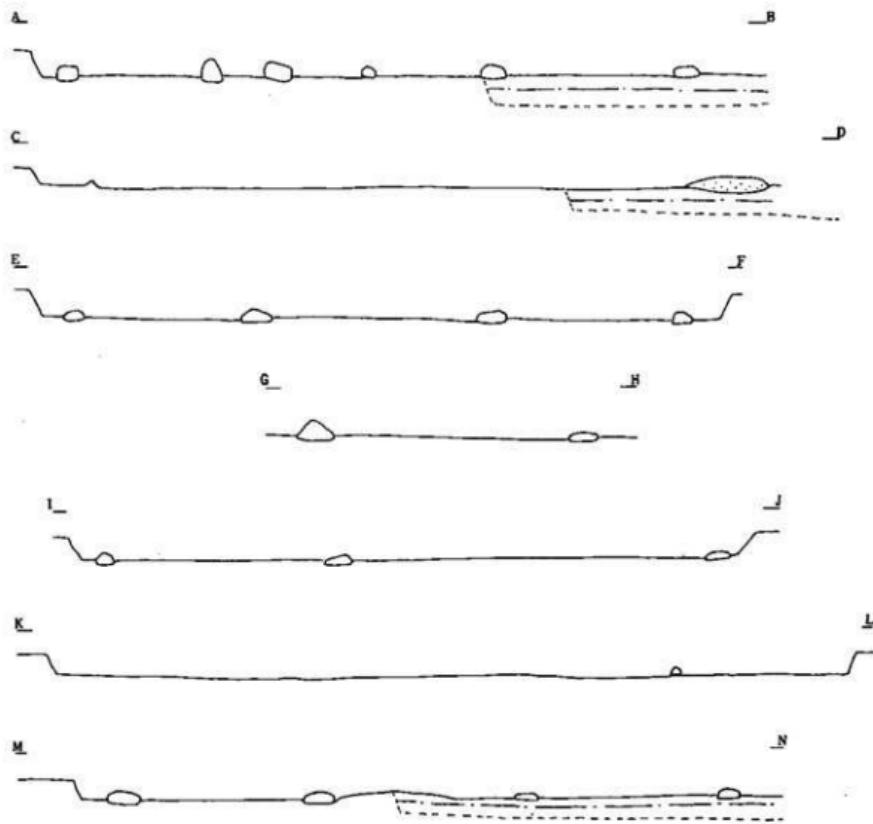
石器は敲打器2点 (9図-16・17) と砥石 (18・19)、こもで石6点が出土している。16は細長い緑色岩の一端を、17は丸い硬砂岩の一部に敲打痕を残すものである。砥石は花崗岩製でともに3面を使用している。

他に鉄寧2点 (105g、104g) が出土している。羽口はみられなかつた。

地点	大きさ 長×幅×厚 cm	重量 g
5	7.0×3.5×1.8	62
5	10.8×3.7×2.2	105
5	9.2×3.3×2.2	115
5	10.3×3.9×2.4	182
5	10.8×4.3×1.7	105
31	8.5×3.1×1.8	88

こもで石計測表





第11図 第2号住居址断面図 (S=1:80)

## 2) 第2号住居址 (第10~13図 図版3・4・21)

### 遺構 (第10・11図 図版3・4)

本住居址は、第I区第1号方形周溝墓の東に位置する大形住居址である。北東部は第3号住居址に貼り床している。9.7mのほぼ方形プランを呈し、西側部分中央と南壁東寄りに張り出し部を持つ。

壁はなだらかで、壁高は現況25cm前後である。3号住居址との床面積は30cm前後で、ロームを固くタタキしめてある。カマドが東壁にありその反対を入口とすれば主軸方向は、S-73°-Eとなる。西壁張り出し部はこもで石など遺物が集中しており入口とするのは若干問題があり、南壁張り出し部が入口とも考えられるが、これだけでは定かでない。

床面はほぼ水平で固くタタキしめられている。カマドは東壁中央部にあり、一部は貼り床上に焼土と灰の混合土の堆積がみとめられた程度で、袖石などはまったくない。

柱穴はまったく存在せず、四方の壁ぎわと内部に礎石状の石が配列される。北壁は壁から約20cmの所に1~6の6個の自然石が直線に配される。対応する南側はやはり壁から20~30cmほど入った所に9~12の石が直列している。南側に対応させれば、北側は1・3・5・6が主となるものであろう。東壁には両隅の石の間に等間隔で7・8が、西壁では張り出し部の前に13、14が北に寄って15があり、東とは対応してこない。さらに西壁から28m入った所に3.6mの間隔を持って16・17の2個の石が配され、北壁・南壁との距離はともに2.8m・2.9mである。東側にはこれに対応するものはみられず、抜きとられた痕跡も全くない。

石の上面は2・11・16を除きほぼ平坦であるが、とりわけ作造を施した跡は認められなかった。また石は床をわずかに掘りくぼめて埋め込んでいる。使用されている石は花崗岩ないし緑色岩類・硬砂岩である。

石の間隔は、次のとおりである。

北壁	東壁	南壁	西壁
1-3 300cm	6-7 280cm	12-11 260cm	1-14 330cm
3-5 300cm	7-8 280cm	11-10 330cm	14-13 180cm
5-6 280cm	8-9 280cm	10-9 270cm	13-12 350cm
1-2 200cm 2-3 90cm 3-4 80cm 4-5 180cm			1-15 120cm 15-14 190cm
全長 880cm	840cm	860cm	860cm

柱を直接建てた土台石と考えるのが妥当で、県下でも数例確認されているのみである。当遺跡では第4号・8号住居址と3例検出されており、特殊な建物址である。

遺物は15の綠釉と西側張り出し部を除いては、浮いた状態で出土している。

西側張り出し部からは30の灰釉皿(第12図-9)と1の綠釉破片、4の羽口(17)、5の須恵器の

高台付壺、6からこもで石8個が出土している。

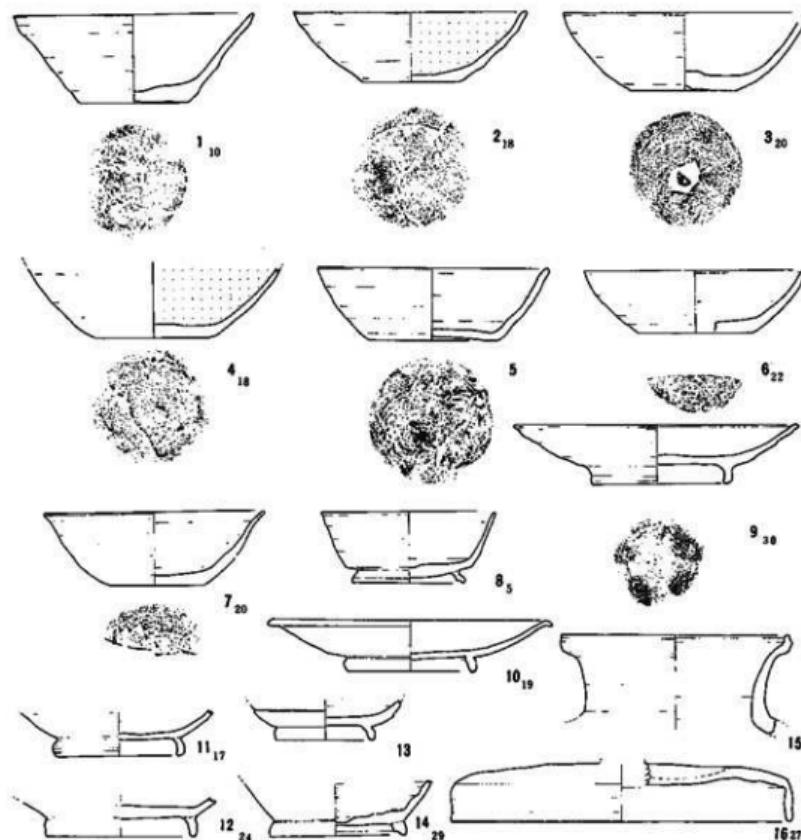
遺物 (第12・13図 図版21)

1～4は土器の壺である。1のみ完形に近いものである。2・4は内黒である。

5～8は須恵器の壺で8は高台を有するものである。

9～13は灰釉陶器の皿、14・15は短頸壺、16は蓋である。

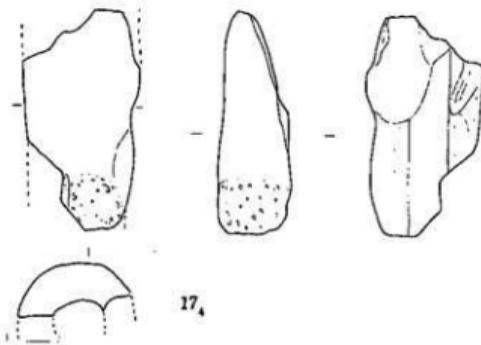
16の灰釉陶器の蓋は出土例が珍しく宝珠形のつまみを有すと思われ、伝世品であるのか、他に比べてやや古い時期のものと思われる。



第12図 第2号住居址出土遺物 (S=1/3)

地点	大きさ 長×幅×厚 cm	重量 g
6	8.8×3.5×2.6	142
6	9.1×3.5×2.5	105
6	12.3×4.2×2.1	238
6	11.8×4.3×2.9	245
6	10.6×4.2×2.4	150
6	9.8×3.8×3.5	198
6	8.7×2.5×2.2	124
6	8.0×3.3×2.6	98

こもで石計測表



第13図 第2号住居址出土遺物 (S=1/3)

図化してないものでは、土師器の甕・須恵器の甕などがみられる。3・15より出土した綠釉焼の破片2点(口絵)は特筆されるものである。16の灰釉蓋同様他より古い時期のものである。

住居址の時期は、おおむね第1号住居址と同時期と考えられ、平安時代後期に属するであろう。17は西側張り出し部4から出土した羽口の破片である。覆土中より鉄斧が2点出土している。

### 3) 第3号住居址(第14~16図)

#### 造構(第14図)

当住居址は第1区にあり、第2号住居址北東部にて重複し、貼り床されている。その床面差は30cmで貼り床は、ロームを固くタタキしめている。西半部は第2号住居址を埋立保存を図ることとしたため、調査は行っていない。

大きさはその貼り床状態からして、東西7.3m、南北は西壁で7.1m、東壁で6.1mを測り、プランはやや台形を呈する。

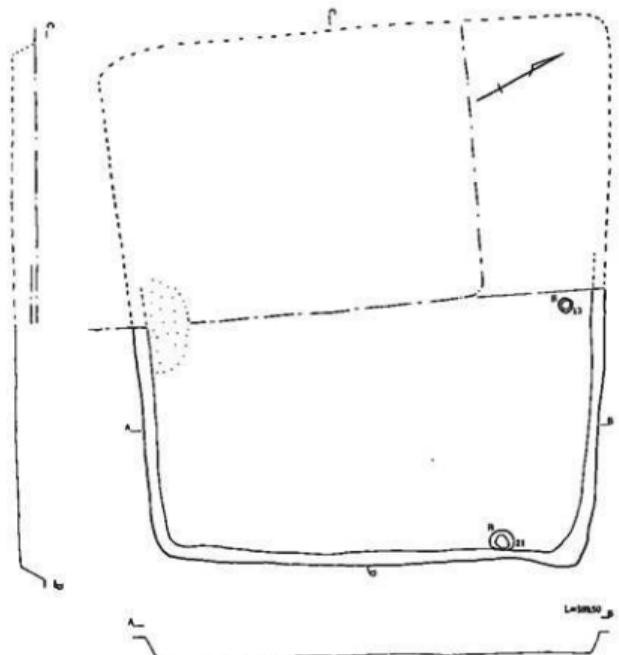
壁はなだらかでローム層を掘り込むが床面は礫層に達している。当住居址から東側にかけてはローム層がわずかしかみられず礫層となっている。壁高は40cm前後である。

柱穴はP<sub>2</sub>が考えられるが南東部には検出されていない。発掘部分からは埋甕炉が検出されていない。遺物は少なく覆土から出土しているのみである。

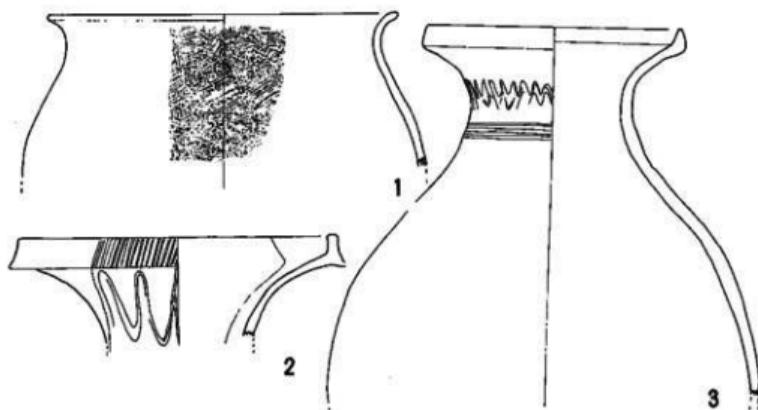
#### 遺物(第15・16図)

1は変形土器で図上復元である。口縁はく字に外反し、最大径を胴上半部に持つと思われる。頸部に櫛描波状文を配しその下部左上方向から櫛描文を斜走させた後、右上方向が櫛描短線文を重ねている。口頸部内外はヨコナデ、胴部内外は縱方向のナデがみられる。長石を含み、黒褐色に固く焼かれている。

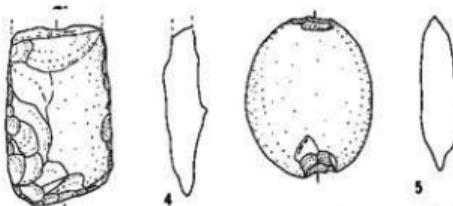
2は変形土器の口縁部破片である。口縁折立部は短かくやや内傾し、上面は平坦となる。



第14図 第3号住居址実測図 ( $S=1:80$ )



第15図 第3号住居址出土遺物 ( $S=1/4$ )



第16図 第3号住居址出土遺物 (S=1/3)

文様はヘラ描波状文を頭部に折立部には縦位のヘラ描文が施される。雲丹・長石を含み赤褐色に固く焼かれている。

3は大形の壺形土器で、胴下半部まで出土しているが、焼成悪く復元できなかった。口縁折立部は短くやや内傾しそぎ状を呈す。最大径は胴央部に持つと思われる。

表面はすべて文様は明確でない。頭部に櫛描波状文をその下部に櫛描文が横走する。折立部の文様は不明である。大きな長石を含み白黄褐色を呈すが、焼成は良くない。

時期は弥生時代後期である。

石器2点がやはり覆土より出土している。4は硬砂岩製の打製石斧、5は硬砂岩製の石錘である。当住居址に属するものかは不明である。

#### 4) 第4号住居址 (第17・18図 図版5・6・22)

##### 遺構 (第17図 図版5・6)

本住居址は第II区のはば中央部、第5号住居址の北北東7mほどに位置する。東壁は黒色土、縄文時代早期土器包含層を掘り込んでおり、はっきりしなかった。カマドと思われる焼土と灰層のまとまりが黒色土の上にある。

プランは東側がやや広くなる台形を呈し、大きさは東西推定6.3m、南北西壁で5.7m、東壁で6.5mを測る。主軸はS-75°-Eである。

壁はなだらかで東壁を除きローム層を掘り込み、壁高は30~35cmである。床面はロームをタタキしめており固くやや凹凸がある。東側は黒色土をタタいて床面を造っている。

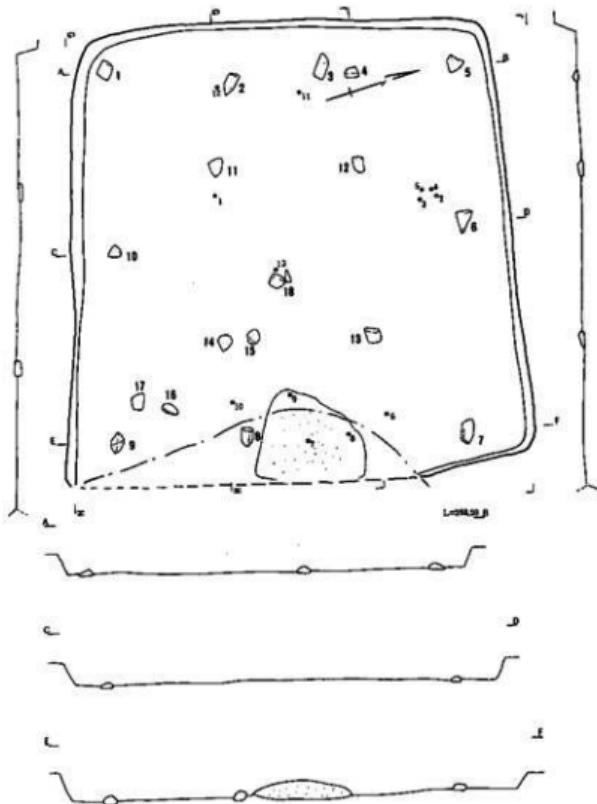
カマドは東壁中央に位置し、焼土と灰の混合土が30cmほど堆積がみとめられるのみで袖石などはまったくみられなかった。

第2号・8号住居址同様、壁に沿って土台石を持つもので柱穴施設はみられない。第2号住居址と違い、中央部に4個の石が方形状に配されている。南・北壁と石との間隔は、東へ行くほど広くなり、窓穴と違って石の配置はほぼ5m四方となる。

北壁と南壁に3個ずつ配し、西壁はその間に2個、東壁はカマドの南側に1個ある。抜きとられた痕跡のないことからもともと一つであったものであろう。中央には南210cm、東西240cm、のやや長方形状に4個の石が規則的に配される。他に4・16・17・18がみられ補助的なものと考えたい。床面をわずかに掘りくぼめて据えている。石の上面に特に工作の痕跡はみとめられなかった。

石の間隔は次のとおりである。

西 壁	北 壁	東 壁	南 壁	中 央
1—2 180cm	5—6 210cm	8—9 180cm	1—10 250cm	11—12 200cm
2—3 120cm	6—7 300cm		10—9 260cm	14—13 210cm
3—5 180cm		8—7 310cm		12—13 240cm
(3—4) 40cm				11—14 240cm
(4—5) 140cm				
全長	480cm	510cm	490cm	510cm



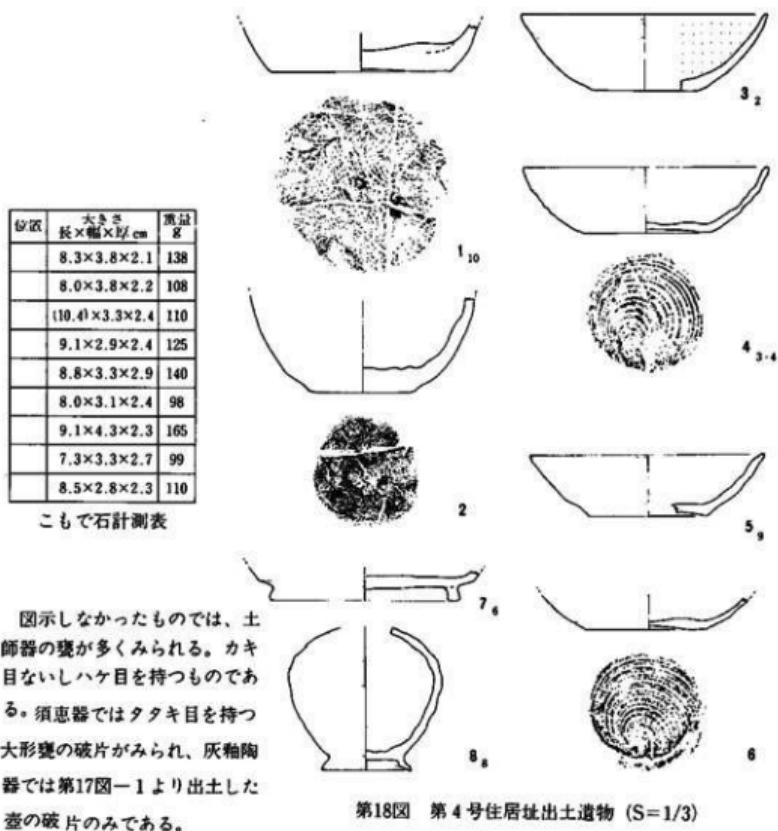
第17図 第4号住居址実測図 (S=1:80)

遺物はカマド上から出た8の須恵器の小形壺と4の杯以外は完形に近いものはない。出土状況は散在的である。カマドの手前右に焼土と灰のつまつた浅い舟底状遺構があり、第18図—2の土師器の壺と6の須恵器の杯、こもで石9点が出土した。

#### 遺物（第18図 図版22）

1～3は土師器、4～8は須恵器である。1・2は菱形土器の底部でいずれも木の葉底である。3は环である。

4～7は环、8は菱形土器である。口頭部はなく打ち欠いた痕がみられるが、故意なのか、転用によるものかは不明である。



第18図 第4号住居址出土遺物 (S=1/3)

第1号、2号住居址に比べて須恵器の卓越がみられる。時代は奈良時代後半から平安時代初期である。

石器は、こもで石9個のみである。

### 5) 第5号住居址

(第19・20図 図版7・22)

#### 造構 (第19図 図版7)

当住居址は、第4号住居址の南西、第3号方形周溝墓の東に位置している。プランは西側がやや広くなる台形を呈す。大きさは東西3.8m、南北は西壁4.7m、東壁で4.2mを測る。主軸はN-15°-Wである。

ローム層を30~40cm掘り込んで造られ、南東壁が深くなっている。床面は、ほぼ平坦で固く堅緻である。

柱穴は4本でP<sub>2</sub>が他より深くなっている。東壁ぎわ中央に大小2個の自然石がおかれている。

中央北寄りに甕の胴上半部(第20図-1)を逆位に埋め込んで埋甕炉としている。上部に焼土がわずかに認められた。

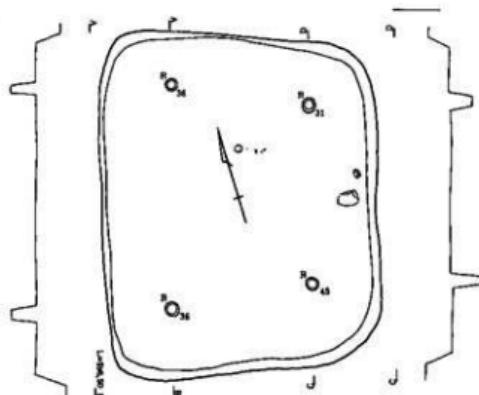
遺物は第20図に示したもののみで非常に少ない。

#### 遺物 (第20図 図版22)

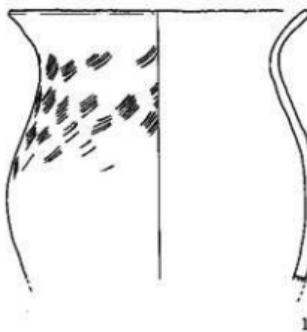
1・2はともに甕である。1は埋甕炉に用いられたもので、胴下半部を欠く。胴央部に最大径を持ち、口唇上端は外傾し、わずかながらヘラによる刻みがみられる。

長石を含み白黄褐色に焼かれるが、焼成は良くなくザラザラして文様ははっきりしない。文様は頸部から胴央部にかけて櫛描短線文が右上から施される。

2は赤褐色に焼かれるが1同様焼成は良くない。文様はやはりすれはっきりしないが、頸部櫛描波状文が施される。胴部文様は不明である。



第19図 第5号住居址実測図 (S=1:80)



第20図 第5号住居址出土遺物 (S=1/3)

石器は覆土中より打製石斧の破片が1点出土している。

#### 6) 第6号住居址 (第21・22図)

##### 遺構 (第21図)

本住居址は、第3号方形周溝墓の南にあり、西側は段丘崖となり、東部分わずかを残してほとんどが消滅している。自然崩落によるものと思われる。下部礫層からは湧水がふき出しており、何箇所か崩落の後が今も残っている。

南壁が広がるものと思われるがはっきりしない。西側で4.9m、東壁4mを測る。ローム層を40cm前後掘り込んでおり、床面は固い。

カマドは東壁中央に焼土が残っているのみである。

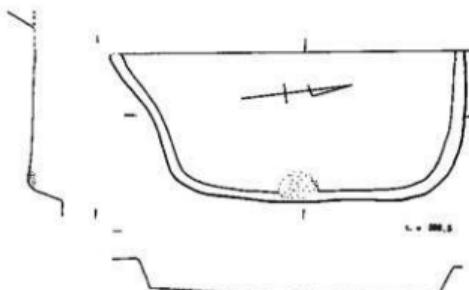
遺物は調査面積のわりには多く、カマド付近より出土している。

##### 遺物 (第22図)

第22図は須恵器の蓋である。

他にはカキ目を持つ土師器の甕と須恵器の甕の胴部破片が2個体分、壺が出土している。灰釉陶器は出土していない。

覆土中より小ぶりな鉄率が10個出土している。



第21図 第6号住居址実測図 (S=1:80)



第22図 第6号住居址出土遺物 (S=1/3)

7) 第7号住居址 (第23~25図 口絵 図版8・23)

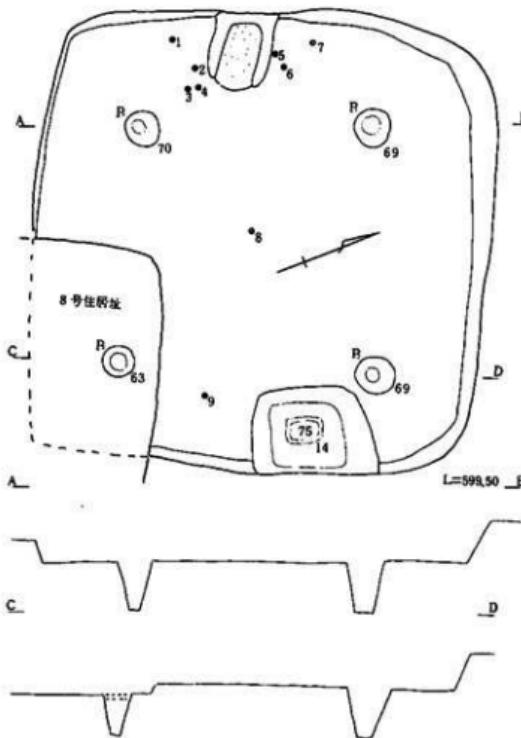
造構 (第23図 図版8)

当住居址は、第11区の北西に位置し、南東部は第8号住居址によって切られている。旧水田2枚にわたっており、南側は水田造成時に壁を削られており段差がある。

プランは隅九方形を呈し、南北6.4mを測る。主軸はN-67-Wを示す。

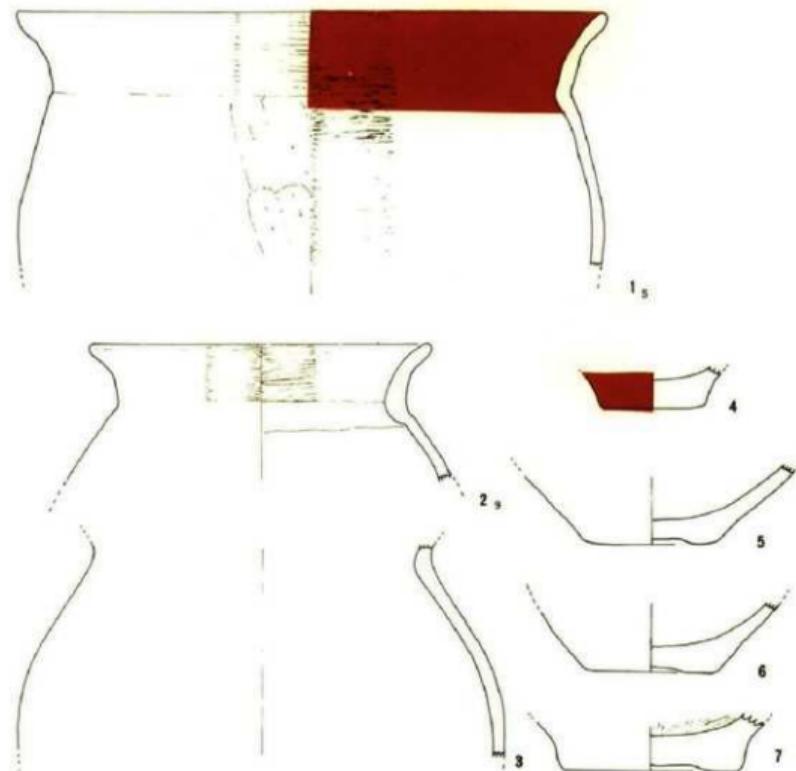
先述したとおり、壁は南部分が削られており、壁高は北側未削平部分で60cmと深く、南側は現況30cm前後である。第8号住居址との床面差は10cm強である。

カマドは西壁やや南寄りにあり、粘質ロームによって造られ、抽石はまったくない。基底部は床面をわずかに掘りくぼめている。

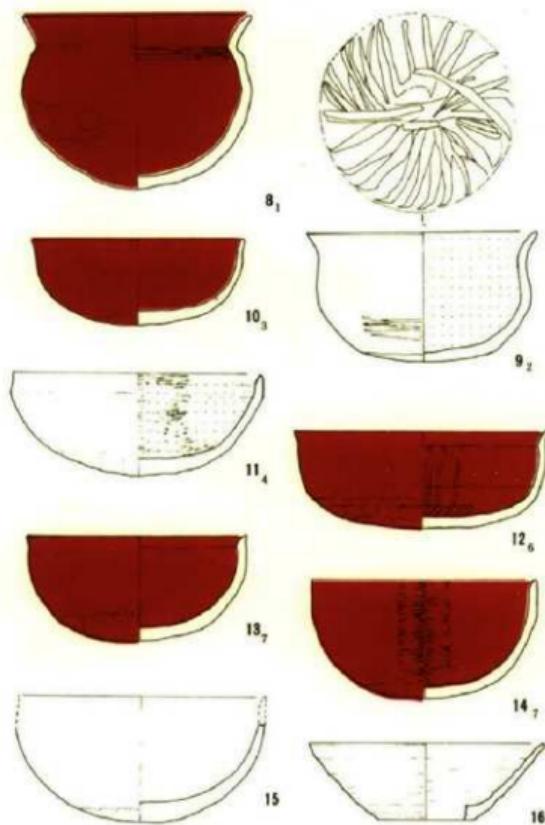


第23図 第7号住居址実測図 (S=1:80)

柱穴は4本で63~70cmと4本とも深い。P<sub>3</sub>は第8号住居址によって貼り床されている。東壁やや北寄りに1.7×1.2mの長方形の浅い堅穴があり、中央部には50×30cmの深いピットを持っている。内部からは何も出土していない。当住居址に伴うものかははっきりしない。カマドの左わきから壙(第25図-8・9)、壙(10・11)右わきからは甕(1)と壙(12・13・14)が出土している。これらは床面との間にわずかの間層を持ち、なだれ込んだような状態で出土しており、住居廃絶時に壁外から落ち込んだものと考えられる。それ以外はカマドの右奥を中心とし土師器の甕ないし壙が出土している。



第24図 第7号住居址出土遺物 (S=1/3)



第25図 第7号住居址出土遺物 (S=1/3)

遺物 (第24・25図 口絵 図版23)

1～7はすべて土師器の甕である。底部から強く外反し、胴尖部に最大径を持つと思われる。1は内面口頸部に朱が塗られている。5・6の底部には3cmほどの円形凹みがみられ特徴的である。8・9は土師器の鉢、10～15は土師の坏ですべて丸底である。9・11は内黒で9は放射状暗文を持つ。8・10・12・13・14は一部剥落するものもあるが、内外面とも朱が施されている。祭祀的性格を持つと思われる。

16は須恵器の坏で、覆土中からの出土である。須恵器は他に甕の破片がやはり覆土中より出土しているのみである。時期は古墳時代中期に属する。須恵器は後出するもので混入であろう。

8) 第8号住居址 (第26・27・28・29図 図版9~12・22)

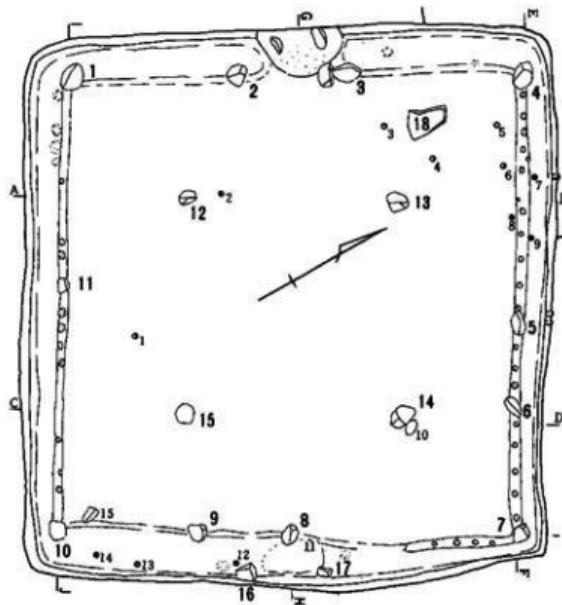
遺構 (第26・27図 図版9~12)

当住居址は北西部にて、第7号住居址を切っている。やや大型な住居址で、東西7.6m、南北7.4mの方形プランである。壁は直に近く壁高30cmを測る。ロームの床面はほぼ平坦で非常に固くタキシメられている。主軸はN-61°-Wである。

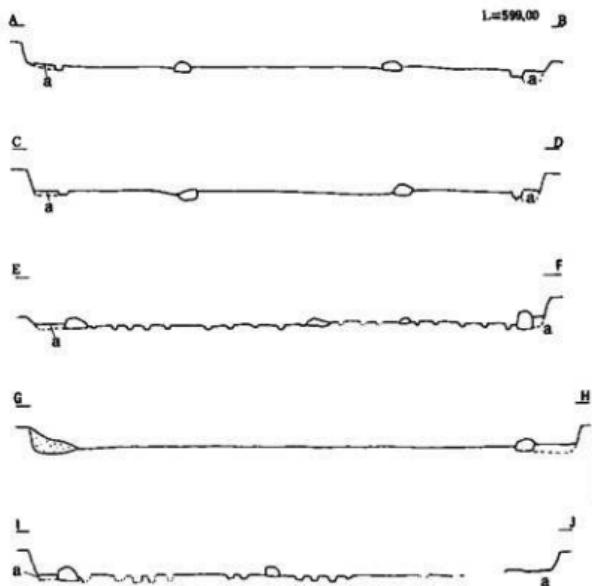
カマドは西壁中央にあり、床面をわずかに掘りくぼめて火床を設け、焼土と灰の混合土が堆積しているのみの簡単なものである。

柱穴はなく、第2号・4号住居址同様、礎石を壁ぎわと内部に配置している。内側が4個からの方形となる点は第4号住居址と同形式であるが、入口と思われる東壁中央直下に2個の礎石を持つ点は他の2例にはみられないものである。さらに他に比べると壁ぎわの石に規則性がはっきりしていない。上屋構造上の違いと考えられる。北壁は4個、南壁は3個である。西壁・東壁は間に2個の石を持つが、東壁は南に片寄っている。石の抜かれた痕はまったくない。

本住居址では他の2住居址と違った構造が見られる。北壁と南壁ぎわの礎石と礎石の間は幅15



第26図 第8号住居址実測図 (S=1:80)



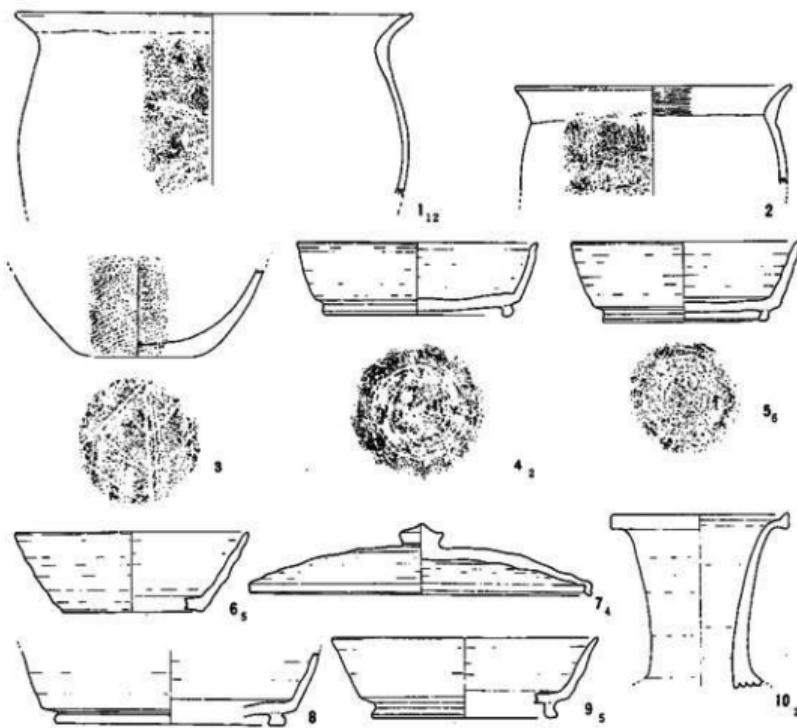
第27図 第8号住居址断面図 (S=1:80)

cmほどの黒色土の帯がみられ、それを掘り上げると、深さ10cmの箱型の溝となる。この溝は東壁にも北壁より続いて1.5mほどみられる。溝の底は平らで径5~8cm、深さ5cm前後的小ピットが検出された。北側は30cm前後のほぼ等間隔に南側は中央部に集中している。溝は石を掘えた後その間に設けられたもので石は溝より深くすえられている。さらに溝の外側、壁との間はロームブロック(a)の貼り床となっており、カマドを除いて幅広い周溝状造構となる。北側は溝と明らかな段差を持って深くなるが、他の3面ははっきりした段差はない。底は平坦でなく不整形なピットも一部みられる。

壁との間を幅広く掘り込み、石と石との間に壁的機能を持つものを施した後その外側を埋め込んだものと考えられる。県内でも礎石を持つ堅穴住居は何例か知られているが、このような施設は今の所知られていない。別の項でふれることとしたい。

遺物は多く出土している。第26図-2からは須恵器の壺(第28-4)と水瓶の口頭部(10)が4からは須恵器の蓋(7)、5からは壺(6・9)、6からは壺(5)、12からは土師器の甕が出土している。

土師器・須恵器以外では、7・13・14から鉄斧が、15からは砥石が床面にすわった状態で出土している。さらに東壁中央貼り床上(11)より36個、礎石14のわき(10)より6個の編物用



第28図 第8号住居址出土遺物 (S=1/3)

鍤石こもで石が集積状態で出土している。カマドの反対側入口と思われる所よりこのように集積状態でこもで石が出土した例は第2号住居址にもみられ、当遺跡と同じ年に調査を行った中沢の古城南遺跡にも同様な例がみられた。当時の生業を知る好資料である。

鍤石の間隔は次のとおりである。

西壁	北壁	東壁	南壁	中央
1—2 240cm	4—5 350cm	10—9 200cm	1—11 290cm	12—13 300cm
2—3 150cm	5—6 120cm	9—8 130cm	11—10 340cm	15—14 300cm
3—4 240cm	6—7 170cm	8—7 320cm		13—14 300cm
				12—15 300cm
全長 630cm	640cm	650cm	630cm	

### 遺物 (第28・29図 図版 22)

先述したとおり遺物は多いが灰陶  
陶器はまったく出土していない。

1～3は土師器の壺で、2・3は  
小形のものである。ともにカキ目調  
整である。

4～10は須恵器である。完形に近  
いもの4・5のみである。4・5・  
6・8・9は壺で6を除いて高台付  
で付け高台である。

7は蓋で宝珠形のつまみを持つ。

10は水瓶の口縁部である。

外には須恵器の壺の破片・土師器  
の壺の壺の破片がみられる。

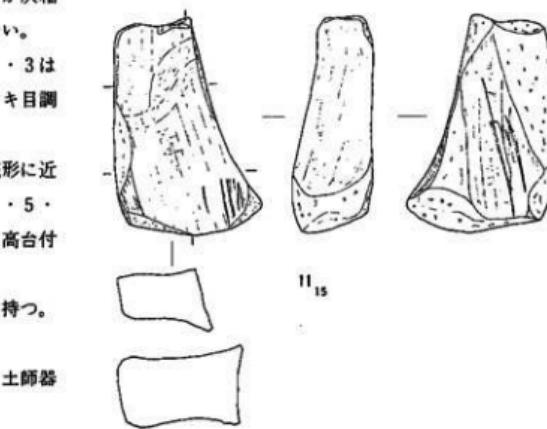
時期は平安時代前期である。

15は砥石で細粒花崗岩を用いてい  
る。3面を良く使用してあり、1面に

は数条の線条痕がみられる。

こもで石は全部で42個出  
土している。

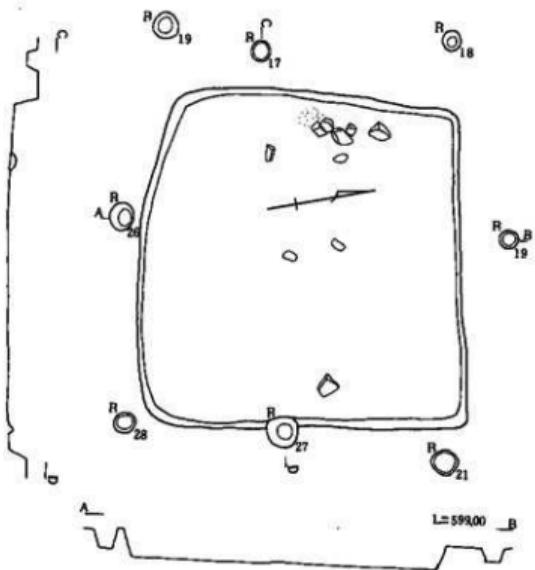
鉄宰が7・13・14から3  
点出土しており重量は302、  
440、710gである。羽口な  
どは出土していない。



第29図 第8号住居址出土遺物 (S=1/6)

地点	大きさ 長×幅×厚 cm	重量 g	地点	大きさ 長×幅×厚 cm	重量 g	地点	大きさ 長×幅×厚 cm	重量 g
10	9.2×3.3×2.2	142	11	9.3×3.3×2.2	110	11	7.5×3.4×2.7	105
#	10.1×3.5×2.3	150	#	8.4×2.8×2.2	75	#	10.5×4.2×2.5	202
#	9.5×3.9×1.7	147	#	8.8×3.7×1.8	145	#	10.3×3.5×3.1	198
#	6.9×2.7×1.9	62	#	10.7×3.1×1.8	100	#	12.2×4.4×2.5	259
#	7.9×4.4×2.1	128	#	11.1×4.2×2.7	205	#	8.3×3.3×2.2	82
#	10.7×3.7×2.7	102	#	10.3×3.8×2.2	151	#	10.7×3.9×1.7	132
11	12.7×4.7×3.1	324	#	10.4×4.3×2.7	209	#	8.7×4.5×2.4	169
#	8.2×2.9×2.7	88	#	7.2×2.8×2.9	239	#	9.4×4.2×1.4	128
#	9.2×3.8×3.0	188	#	10.4×3.8×1.7	135	#	9.2×2.9×1.7	88
#	8.5×3.1×1.7	95	#	9.3×4.4×1.4	121	#	10.4×4.1×2.7	190
#	9.7×3.8×1.7	119	#	10.4×3.9×2.7	160	#	8.8×3.3×1.6	101
#	10.7×2.6×1.7	93	#	9.9×3.7×2.7	155	#	10.4×3.8×2.8	200
#	7.3×3.7×2.2	105	#	12.7×4.2×2.2	169	#	10.1×4.0×2.7	105
#	8.3×3.1×2.2	101	#	11.7×4.4×2.4	224	#	12.0×4.3×2.0	195

こもで石計測表



第30図 第9号住居址実測図 ( $S=1:80$ )

### 9) 第9号住居址 (第30・31図 図版13・22)

造構 (第30図 図版13)

本住居址は、第8号住居址の東南、第10号住居址の西に位置している。南壁が張る変形の方形プランで東西4.6m、南北4.5mを測る。主軸はN-79°-Wである。

ローム層を35cmほど掘り込んでおり、床面は平坦であるがあまり堅緻でない。

カマドは西壁ぎわ中央に焼土の堆積がわずかに認められるのみである。壊されたものかもともと簡単なものであったかは、不明である。床面上に自然石がみられる。特に加工した様なものもみられない。

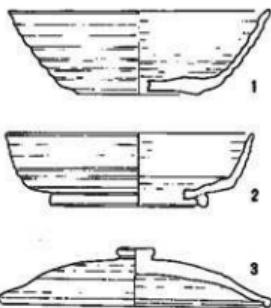
柱穴は内部ではなく、外側に検出されたP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>の8本と思われる。P<sub>2</sub>、P<sub>6</sub>は棟木柱の可能性が大きいが、中軸線よりやや西にずれている。

遺物は少なく3の須恵器の蓋が完形に近いもので、他は破片である。

遺物 (第31図 図版22)

1～3はともに須恵器で、1はロクロ痕を強く残す壊、2は高台付の壊、3は蓋である。蓋のつまみ部は平坦で中央部がわずかに突出している。

遺物は少なく図示できたもの以外では、土師器の甕の須恵器の甕の一部破片と高壊の脚部の一



部のみである。

鉄製品・石器はまったく出土していない。

時期は平安時代前期と思われる。

第31図 第9号住居出土遺物 (S=1/3)

#### 10) 第10号住居址 (第32・33・34・35図 口絵 図版13・24・25)

造構 (第32・33図 図版13)

当住居址は、第9号住居址の東にあり、7m四方の隅丸方形でプランを持つ。ローム層を西側で50cm、東側で35cmほど掘り込んでおり、西壁や北壁は直に近く、南側はゆるやかである。

床面はロームを固くタタキしめ堅緻でやや中央が高くなっている。

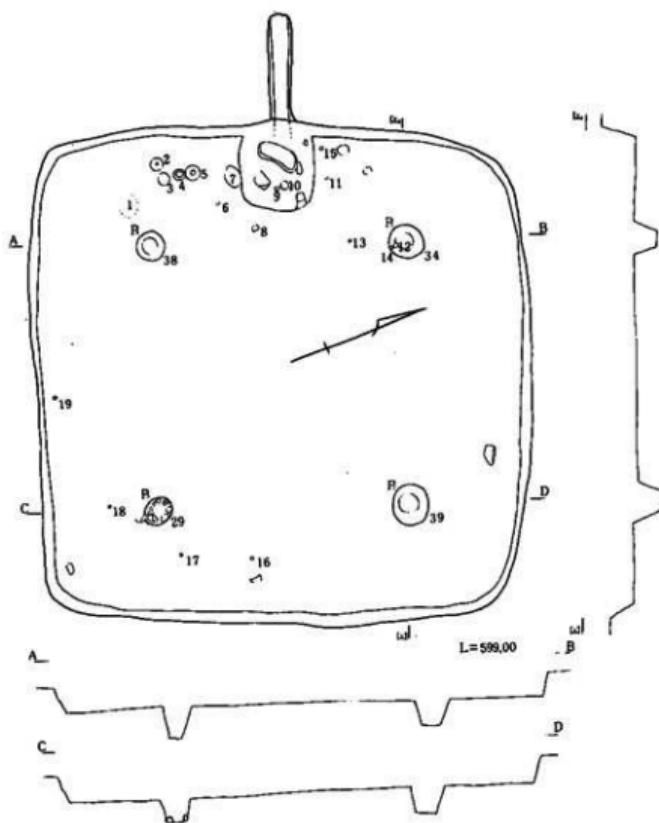
主軸はN-68°-Wである。カマドは西壁中央にあり、粘質ロームによっており天井石を残し残存状態は良好である。壁外には長さ1.5m、幅30cmの煙道がある。床面を舟底状に掘りくぼめ火床としている。

柱穴は4本でP<sub>3</sub>を除き35cm前後の深さを持つ。P<sub>3</sub>は底のまわりに5個の小さな石を配し、根固めとしている。

遺物はカマドの両わきに集中してみら完形品も多い。第7号住居址と同様である。

左手には、P<sub>4</sub>の西の高坏 (第35図-17) がつぶれて出土し、壁にそって甕 (2) と堆 (16)、坏 (6.7)、高坏 (15)、甕 (1) が出土している。これらはすべての床面に密着しており、甕はともに伏った状態で出土し2の内部にはまったく入っておらず空洞であった。1は胴下半部が壊われ内側に落ち込んでいる。16・6の堆と坏は口縁が上にやや傾いて出土、坏は6の中に7を重ねた入子状となっていた。さらに15の高坏の中には13の坏がさらにその中に8の坏が重なった入子となつて伏った状態で出土している。

カマドからは、3・4の甕と14の高坏が、さらにカマド右わきから11の坏と甕の破片が出土し



第32図 第10号住居址実測図 ( $S = 1 : 80$ )

ている。

P<sub>1</sub>の中より9の壺がほぼ中間の位置から出土している。東壁ぎわ中央(16)より10の壺が発見された。他は壺ないし壺の破片である。

このような出土状況は第7号住居址に似ているが、床面との間に間層を持たず、また入子状態、壺の内部が空洞になっていることなどからして、廃絶に伴ってなだれ込んだのではなく、生活時そのままの状態と考えられる。安定性からしても使用しない時は伏せた状態であったと思われる。

なお、P<sub>3</sub>の東に土壙9・11が、P<sub>2</sub>の東に土壙10が検出されており、いずれも当住居址よりも古く構築時に厚く貼り床をしている。

#### 遺物（第34・35図 口絵 図版24・25）

1～17はすべて土師器で、他にも須恵器はまったく出土していない。また石器、鉄器等の出土もない。

1～5は壺で、最大径を胴央部に持ち球状を呈するものである。

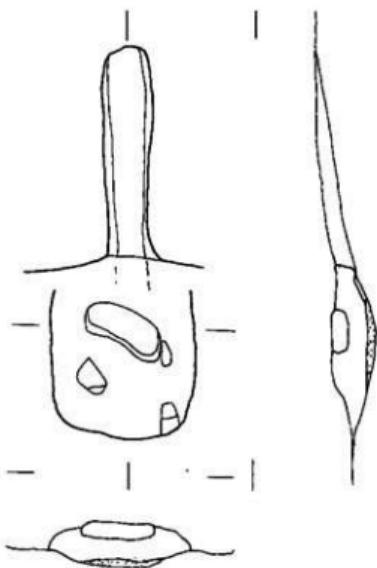
6・7・9・10・11は壺でふ厚く粗いヘラ削りを施し、ヘラ磨きを行うのが普通である。8・12・13は鉢で手法は壺と同様である。

14・15・17は高壺で、脚部まであるのは15のみである。いずれもはめ込み式である。壺同様、壺部は粗いヘラ削りを行いヘラ磨きを行っている。

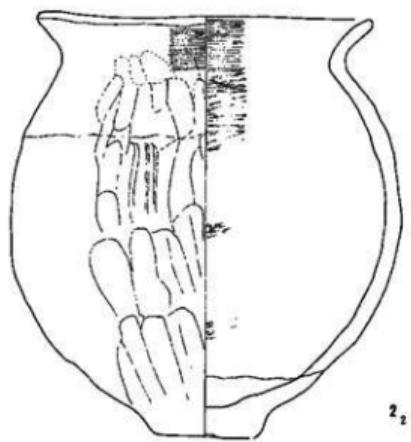
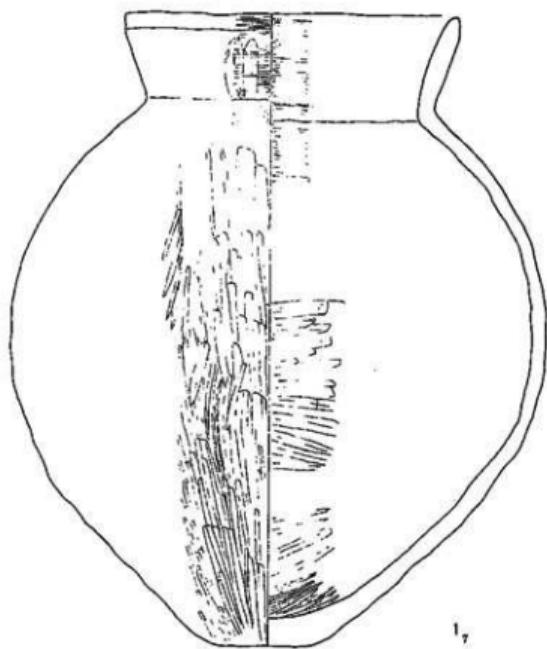
16は壺で口頭部を欠く。胴部球球状を呈す。

7・8・11・13・14・15・17は内外ともに、5・16は外面を、9は内面が朱彩されている。住居址出土遺物の大半がこのような朱彩されることは、珍しいことである。第7号住居址同様祭祀的性格をもつものと考えるのが妥当で、それ故に良好な一括資料として残存したものであろう。

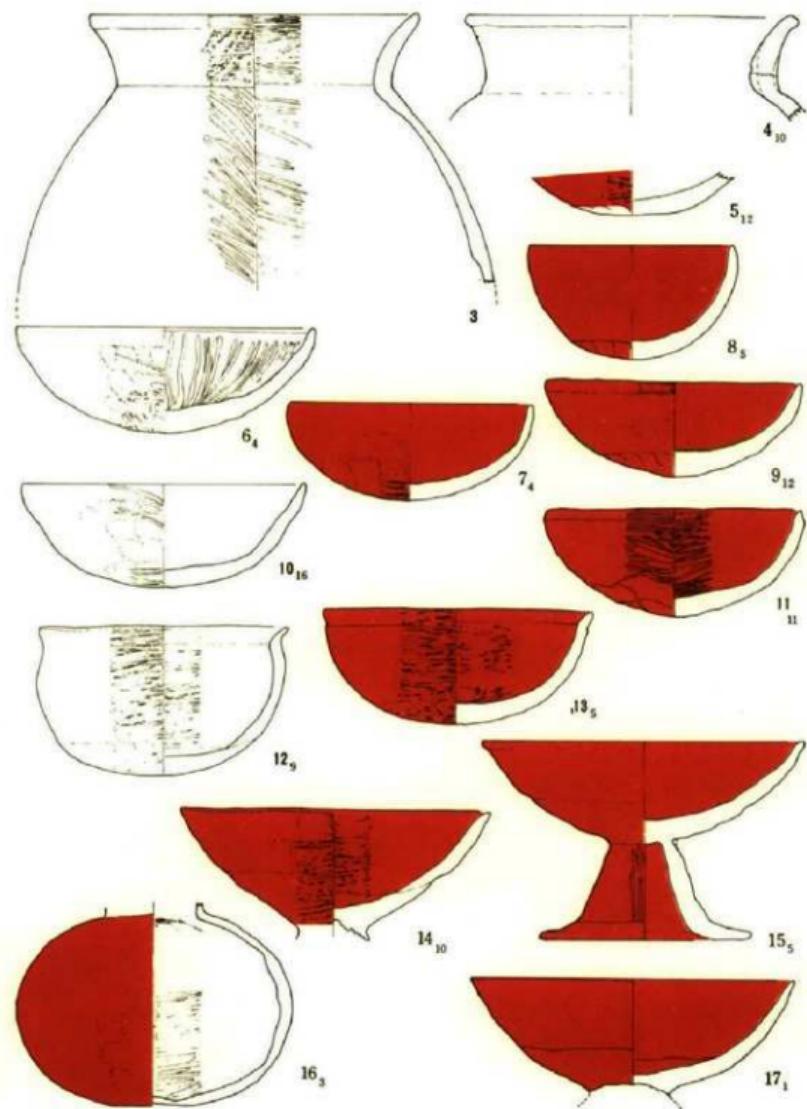
時期は古墳時代中期6世紀前後である。



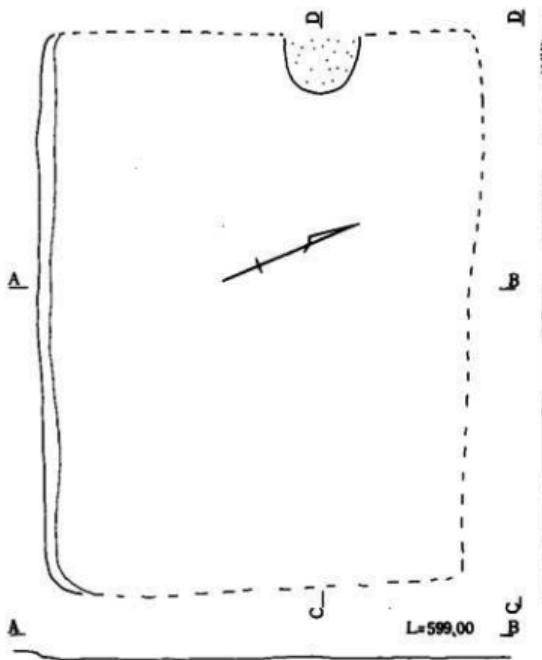
第33図 第10号住居址カマド実測図 (S = 1 : 40)



第34図 第10号住居址出土遺物 ( $S=1/3$ )



第35图 第10号住居址出土遗物 ( $S=1/3$ )



第36図 第11号住居址実測図 ( $S=1:80$ )

### 11) 第11号住居址（第36図）

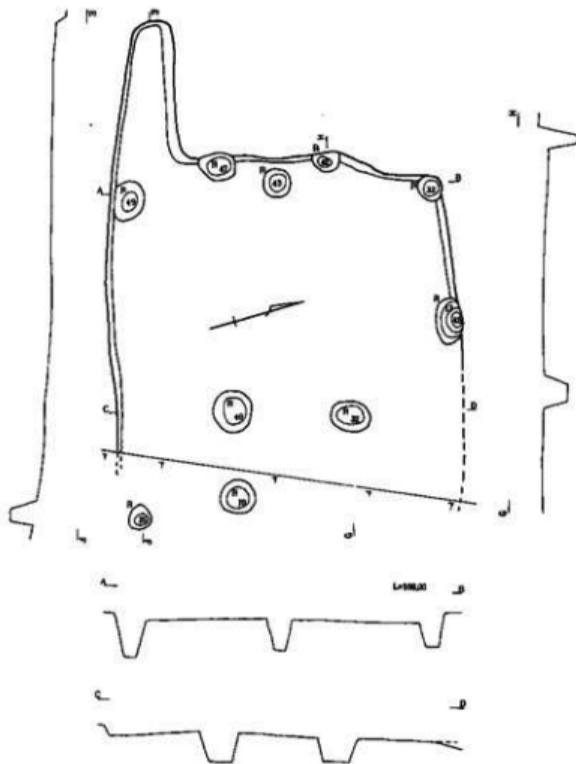
本住居址は第10号住居址の北東にあり、南壁と床面の一部、カマドと思われる焼土が確認されただけである。

ローム層をわずかに掘り込んで南壁がある。南壁の長さは7.8mを測る。床面は南壁から5mほどは圓い面がみられたが北側ははっきりしない。西壁と思われる所に厚さ10cmほどの焼土と灰の堆積があり、位置からしてカマドとした。

遺物は土師器の甕・壺の破片がわずかに出土したのみである。

西側と東側には土塙がみられる。

時期は不明である。



第37図 第12号住居址実測図 ( $S=1:80$ )

#### 12) 第12号住居址 (第37・38図 図版14・22)

##### 遺構 (第37図 図版14)

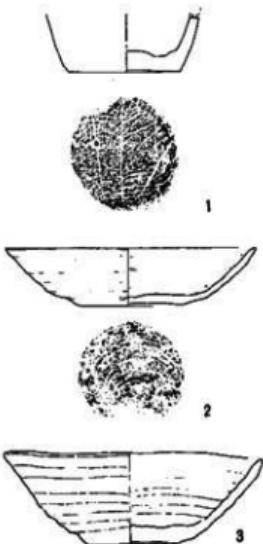
本住居址は第II区最南端に位置し、東側は第1号溝状遺構によって壊されている。また南側は同一床面で長さ1.8m幅70cm前後で伸びている。別の遺構があったとも考えられる。

プランは不整ながら方形を呈すと思われ、南北4.8mを測る。北壁東側は壊されている。

開田時に削られ、現在する壁高は15cmと低い。床面は東にやや傾くが、ほぼ平坦で固くロームをタタキしめている。

カマドは確認されておらず、東壁にあったものと思われる。

柱痕は多く確認されているが、主柱穴はさだかでない。



遺物は少ない。図示したもの以外では、土師器の甕がある。

遺物（第38図 図版22）

1は土師器の小形甕で木ノ葉底である。  
2・3はともに須恵器の甕で顕著なロクロ痕を持つ。3は生焼き状でゆがみもひどい。

時期は平安時代前期である。

第38図 第12号住居址出土遺物  
(S=1/3)

### 第3節 方形周溝墓と遺物

#### 1) 第1号方形周溝墓（第39図 図版3）

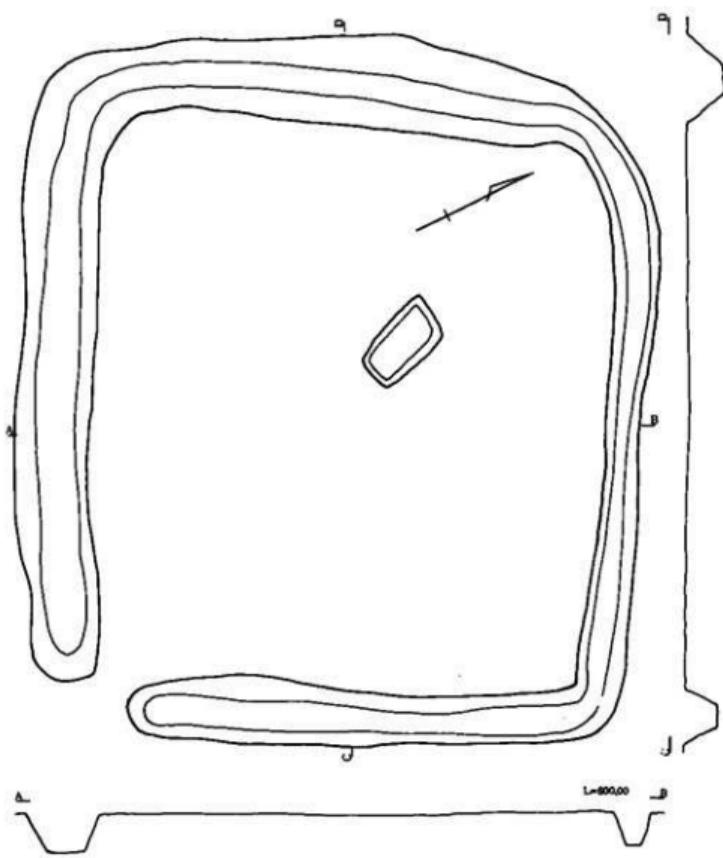
当造構は、第I区の西にあり、内部テラス部に後から第1号住居址が造られている。周溝外縁で14.7×13.1mの方形に近い大形のものである。長軸方向はN-64°-Wである。開口部は1箇所で南東コーナーにある。テラス面は11.6×10.8mを測る。

正確な方位とは異なるが溝を呼ぶのに、便宜上Aを南溝、Bを北溝、Cを東溝、Dを西溝と呼ぶこととする。

溝の断面は全体的に底は平らなU字溝となる。北溝と東溝は他に比べて狭く、上幅0.8~1.0m、下幅30~60cmである。南溝・西溝は上幅1.5m前後、部分的には2m近くと広くなり、下幅もそれに応じて50~80cmを測る。溝の深さは70~90cmで溝がやや深くなっている。溝には段はみられない。開口部への立ち上がりはせり上がり状である。

溝内部の堆積土はいわゆるレンズを示しており、内部テラス面の封土が流れ込んだという状態は認められなかった。

内部テラス部に振り込まれた第1号住居址の床面下に貼り床された浅い土壤が発見されている。

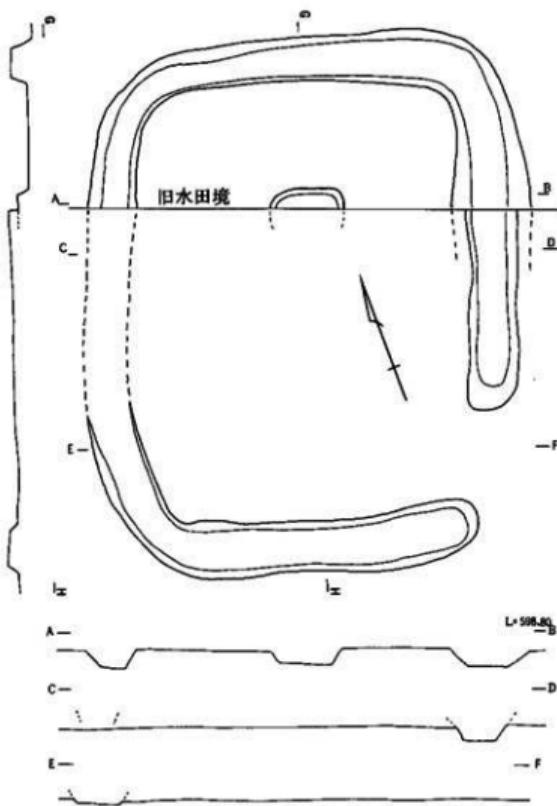


第39図 第1号方形周溝墓実測図 (S=1:120)

周溝墓のプランとは向きを45°変えるが開口部とは直線状となる。周溝墓に伴う土壙と考えたい。1.8×1.1mの長方形プランで床面下からの深さは10cm、テラス面から50cmを測る。内部からは何も検出されていない。

遺物は北溝の北コーナー一溝の覆土上層より弥生時代後期の壺の破片がわずかに出土しているのみである。

時期もこれに対応するものと思われる。



第40図 第2号方形周溝墓実測図 (S=1:120)

## 2) 第2号方形周溝墓 (第40・41図 図版14)

造構 (第40図 図版14)

本造構は第4号住居址の西にあり、南側には第3号方形周溝墓がある。南側3分の2は開田時の折り、削られており西側では一部溝がなくなっている。

長軸11.0m、短軸は削られており、定かでないが9.5mを測るものと思われる。第1号址同様、南東部に開口部を持つ。主軸はN-20°-Wである。

上の田と下の田のローム面は20cmの比高差があり、東溝は現況40cmの深さがある所からすると、北側部分も開田時に削られたことが考えられる。

溝の底は平らで立ち上がりもゆるやかである。下幅は、北溝で60cm、西溝60~70cm、南溝80cm、東溝60cmほどである。

開口部への立ち上がりは、せり上がり状となっている。

土壤はテラス中央北寄りにあり、南側は削りとられてなくなっている。長軸1.6m短軸は不明である。深さは30cmを測る、内部からは何も検出されていない。

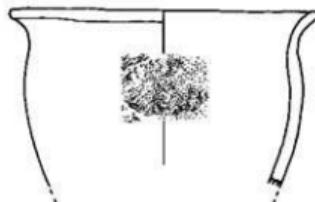
溝の堆積土は単一層で封土などの流れ込みを思わせる状態はみとめられなかった。

遺物は北東コーナー溝堆積土中より弥生時代後期の甕の一部が出土されている。

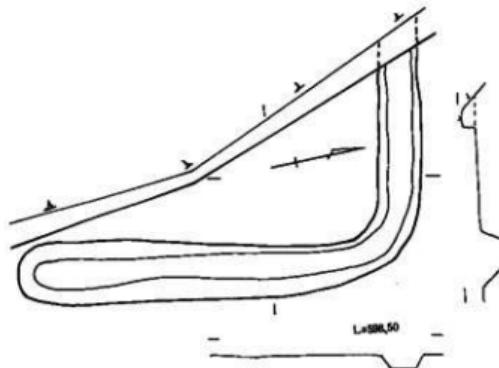
#### 遺物（第41図）

胴下半部を欠いた甕の一部である。口縁はく字に外反し最大径となり、胴部はなく肩状に底部に至る。

砂を含み茶褐色に焼かれている。外面はすれており文様ははっきりしない。頸部下に櫛描文の短線文が施されるのがみとめられる。弥生時代後期のものである。



第41図 第2号方形周溝墓出土遺物  
(S=1/3)



第42図 第3号方形周溝墓実測図 (S=1:120)

3) 第3号方形周溝墓（第42図）  
造構（第42図）

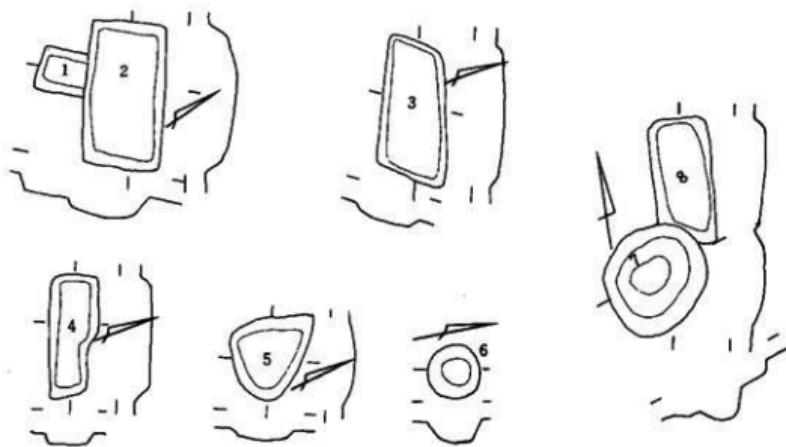
当周溝墓は第2号周溝墓の南、第5号住居址の西にあり、西側は段丘崖となっており、第6号住居址同様、大半部が消滅している。検出されたのは北溝ほぼ半分と東溝だけである。

大きさは不明であるが、南北10m前後と思われる。第1号・2号周溝墓と同じく南東部コーナーに開口部を持っている。

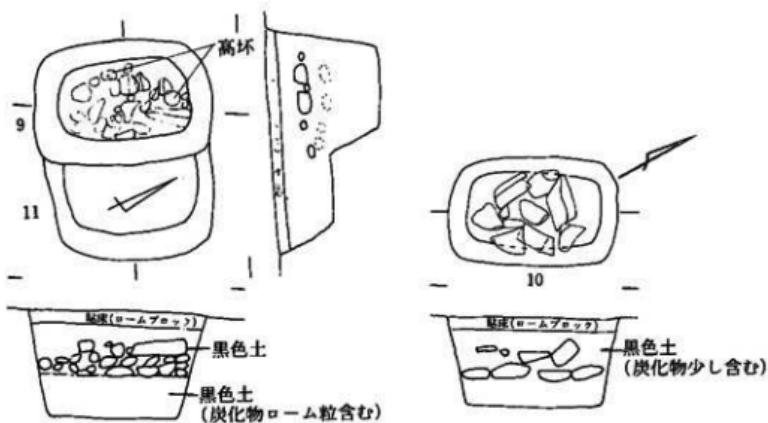
溝の上幅は北で1m、東ではやや広くなり1.2mほどである。底は他と同じく平らで立ち上がりはゆるやかである。下幅は40~50cmほどを測る。深さは北は浅く30cm、南に行くに従い深くなり50cmを測る。開口部の立ち上がりはせり上がり状となっている。

土壌は検出できなかった。消滅部分にあったものと思われる。溝内部の堆積土は第1号同様、レンズ状の自然堆積を示している。

遺物は溝内より弥生時代後期の甕の破片がわずかに出土しているのみである。



第43図 土壌実測図 ( $S = 1 : 80$ )



第44図 土壌実測図 ( $S = 1 : 40$ )

#### 第4節 土壌と遺物

土壌と考えられるものが第II区より11基確認されている。第9号住居址と北東に3基(1~3)、第11号住居址の西側に2基(4・5)、東側に3基(6~8)、さらに第10号住居址内東側に貼り床された3基(9~11)がある。以下順を追って詳述することとする。

##### 1) 1号土壌 (第43・45図)

北側を2号土壌によって切られている。短軸60cmの長方形のプランを持つと思われる。壁の立ち上がりはゆるやかで、底は平らである。深さは25cmを測る。内部より須恵器の壺(第45図-1)が出土している。壺の壺部は一部しかないのである。高台にカマ印なのかヘラ切りがみられる。

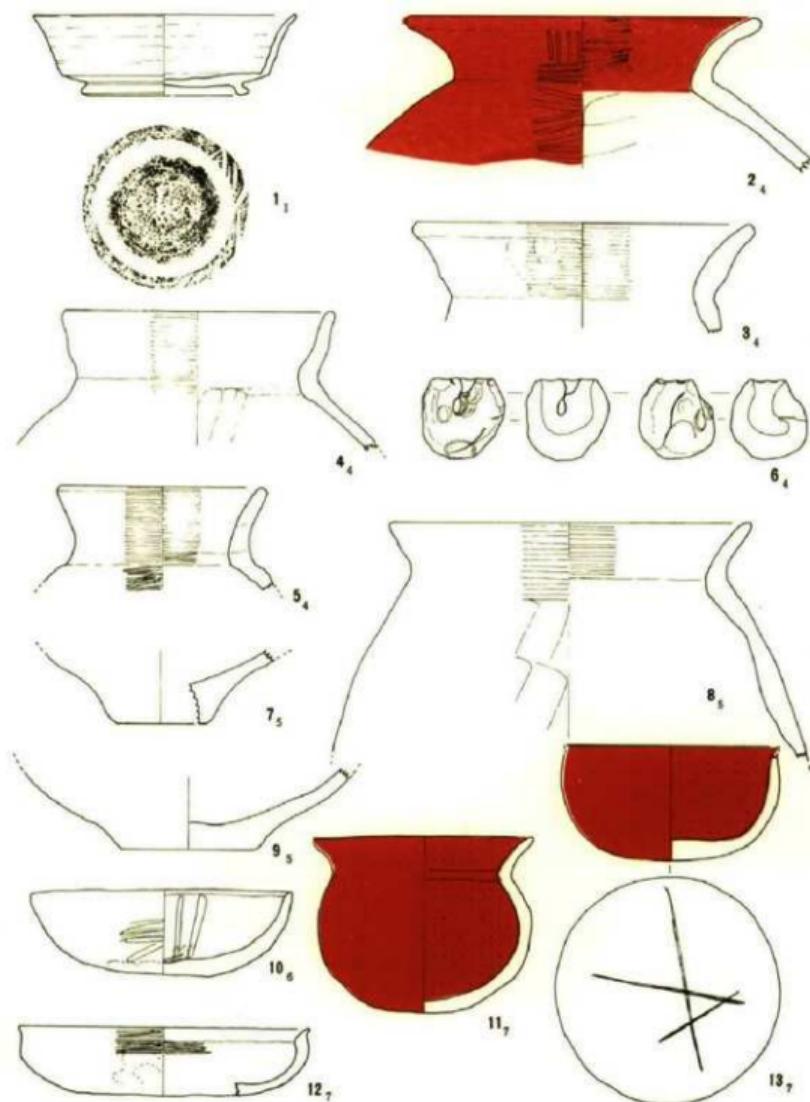
時代は奈良時代後半から平安時代初頭と思われる。

##### 2) 2号土壌 (第43図)

1号土壌を切った長方形の土壌である。大きさ $1.1 \times 2.0$ mを測る。底は舟底状で深さ40cmである。遺物は土師器の破片が出土しているのみである。

##### 3) 3号土壌 (第43図)

2号土壌の北に確認されたものでプランは変長方形である。大きさは $1.9 \times 0.9$ mで東側がやや広くなる。底は舟底状に近く20cmほどの浅いものである。遺物は出土していない。



第45図 土壤出土土器 ( $S = \frac{1}{3}$ , 小数字は出土土壤を示す)

#### 4) 4号土壙 (第43・45図 図版15・25)

本址は5号とともに、第11号住居址の西壁に検出されたものである。プランは北壁がかぎ手状となる長方形である。長軸1.7m、短軸広い所で70cm、狭い所で50cmとなる。壁の立ち上がりはゆるやかで、底は平らである。やや西寄りに平盤な自然石とともに、第45図-2・3・4・5の土師器の壺の口頭部の破片が発見された。さらに6の手づくね土器が一緒に出土している。壺は胴部が球状にふくらむものである。なお、2の外面と内面の口縁部には朱が塗られている。

骨片などは発見できなかったが、墓壙と考えて良いであろう。時期は古墳時代中期6世紀前半である。

#### 5) 5号土壙 (第43・45図)

当址は三角形をなす小形のものである。底は舟底に近く、15cmほどと浅い。大きさは東西1.1m南北1.1mである。覆土中より第45図-7・8・9の土師器の壺の破片が出土している。4号の壺同様、胴部が球状になるものと思われ、4号土壙と同時期と思われる。

#### 6) 6号土壙 (第43・45図 図版15・26)

第11号住居址の東に並んで発見された土壙のうち一番南に位置するものである。径80cmの円形を呈し、深さは30cmである。底に近く、第45図-10の土師器の壺と自然石がみられた。同様な形態は7号土壙にもみられ、4号土壙もプランは異なるが類似するものである。10の壺は偏平な丸底を持つものである。第7・10号住居址出土の壺に類似するもので、6世紀前半である。

#### 7) 7号土壙 (第43・45 図版15・26)

6号土壙の北東にあり、東で8号土壙と重複している。切り合い関係は不明である。1.5×1.4mの不整形を呈し、円部に16×40cmの楕円形の舟底状ピットがみられる。円形の浅い土壙を壊して掘り込んだ可能性が強く。浅いものは15cm、深い方は40cmの深さを測る。6号土壙同様底に近く丸い花崗岩とともに、鉢(第45図-11-13)、皿(12)、壺が出土している。ともに完形品ではない。

11・13は研磨はあまりみられないが内黒で内外とも朱彩されている。内面はともに痕跡をとどめる程度である。13の底には3条のヘラ切りがみられる。カマ印であろう。

時期は6号土壙と同じく6世紀前半である。6号とともに墓壙と思われる。

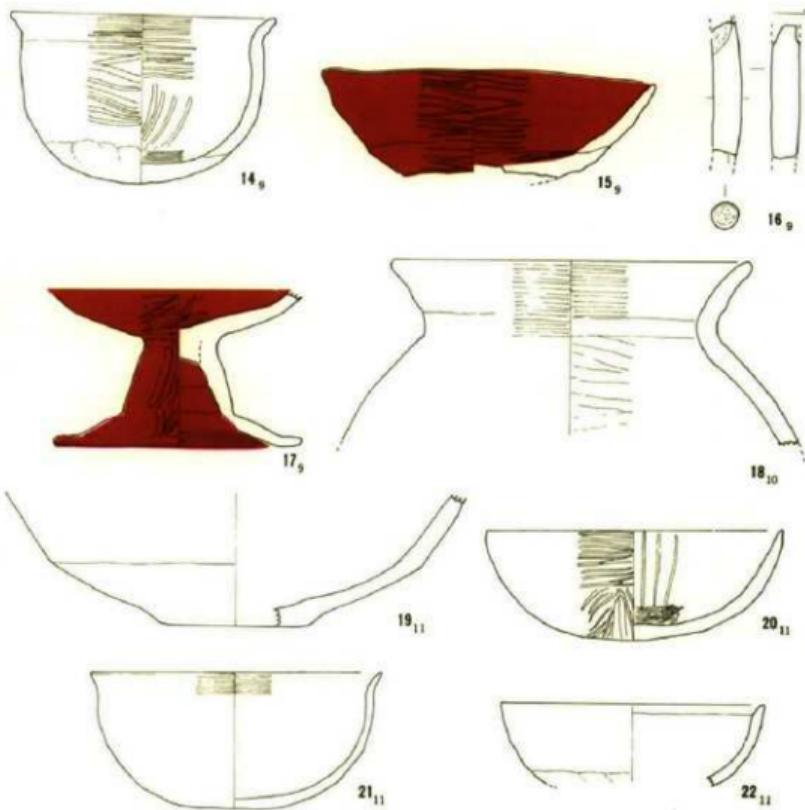
#### 8) 8号土壙 (第43図 図版15)

7号土壙の北にあり、南西コーナーにて7号土壙と重複する。プランは長方形を呈し、大きさは1.7×0.8mを測る。深さ20cmほど舟底形に近くなる。遺物はまったく出土していない。

#### 9) 9号土壙 (第44・46図 図版16)

本址は10号・11号土壙とともに第10号住居址内東側に発見されたもので、ともにロームブロックにより貼り床がされている。

9号は東の11号土壙と重複し、9号土壙の内部の石のあり方からして、11号土壙を切っている



第46図 土壤出土遺物 (S = 1/2)

ものと思われる。125×85cmの隅丸長方形で深さは80cmを測る。床面上からの深さであるため、第10号住居址の深さを足すと1.2mほどの深さと考えられ、竪穴状土壤となる。11号土壤との比高は35cmである。

覆土は黒色土の單一層で、中央部に厚さ25cmほどではぼ3段にわたって割り石の混じった河原石が前面にわたって発見された。まさに密封状態といって良い。石の下は上層に比較してやや炭化物とローム粒が含まれるが、明確な層序としてはとらえられなかった。石の間より高環の环部(第46図-15)と半完形の高环(17)、鉢(14)の破片や壺・壺の破片が出土している。さらに器種不明の土製品(16)も出土している。底に近い所より少量である骨片がみられた。墓壙と考えられ

る。

14～17はいずれも土師器で須恵器は出土していない。14は鉢の破片である。15・17は内外とも朱が塗られた高環で、17は脚の内側にも朱が塗られている。当時の埋葬形態を知るための良好な資料である。

16は径3cmほどの丸棒状の土製品で両端を欠き、わずかに内湾している。用途・器種とも不明である。

時期は貼り床されていることからして、第10号住居址より古くなることは当然であるが、時期差はほとんどないと思われる。

#### 10) 10号土壙 (第44・46図 図版16)

第10号住居址内東壁ぎわやや北寄りに発見されたもので、10cmほどのロームブロックによる貼り床が固くタタキしめられている。プランは9号と同じく隅丸長方形で、1.2×0.75mを測る。床面からの深さは60cmで、9号同様竪穴状となる。中位に9号同様集石がみられ、ほぼ2段となっている。9号に比べると、上段は意識的に石を組んだ様子がうかがわれる。堆積土は、9号同様黒色土の單一層である。

遺物は少なく第46図-18の甕のみである。胴部は球状を呈すもので、時期は9号土壙と同じ時期と考えられる。

#### 11) 11号土壙 (第44・46図)

9号土壙の東にあり、9号によって切られている。プラン、大きさは不明で南北は1.1mを測る。深さは床面から40cmである。堆積土は黒色土の單一層である。底はほぼ平らである。遺物は多いが、完形品はない。すべて土師器である。

19は甕の底部、20・22は丸底の环、21は丸底の鉢である。時期は9号土壙と同時期と思われる。

### 第5節 焼土址と遺物 (第47・48図 図版17・25)

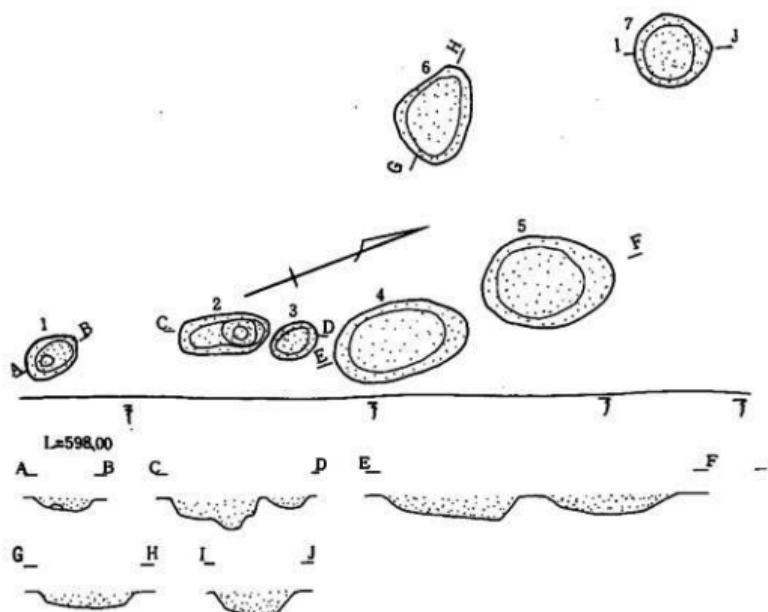
第II区南側第1号溝状造構の西側に、焼土と灰の混合土の充満した、不整円形ないし、橢円形の浅い土壙状造構が7基確認された。

1～5号が南から北に溝に沿ってほぼ直線状に並び、その西北に6・7号が並んでいる。

付近からは鉄宰が数点出土しており、鍛冶場的性格を持つものとも考えられる。内部からは土師器の环・甕、須恵器もわずかに出土しているが、完形品は4号焼土址内より出土した須恵器の甕の环(第48図)のみで他は図示できなかった。

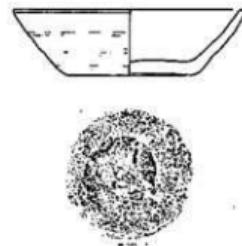
第48図の环は白灰色の生焼き状を呈し、回転ヘラ切りによって底を切り離していると思われる。時期は平安時代前期と思われる。

以下各焼土址を一覧表で示すこととする。



第47図 焼土址実測図 ( $S = 1 : 80$ )

番号	形 状	大きさ cm	深さ cm	
1	橢円形	80×55	15	舟底状
2	長橢円形	120×55	30	内部にピット持つ
3	橢円形	70×50	15	舟底状
4	長橢円形	188×98	20~30	北に深くなる
5	長橢円形	186×116	24	舟底状
6	不整橢円形	138×102	18	舟底状
7	不整橢円形	108×102	30	舟底状



第48図 第4号焼土址  
出土遺物 ( $S = \frac{1}{3}$ )

## 第6節 溝状遺構と遺物

### 1) 第1号溝状遺構 (第49・50・51図 図版18・19)

第II区の中央、住居址群の東に確認できた所で、長さ73mに及ぶ溝状遺構が発見された。台地中の軸線に沿っており、南側は、段丘崖へ落ち込んでいる。北側は開田時に削られており、不明であるが、未発掘部分につながっているものと思われる。

現況の中央部で直交する溝が東に伸びている。溝の状態や堆積土は東行するこの溝から北と南とでは様相を異にしている。しかしながら段差などはみとめられなかったため、一応同一の遺構とした。便宜上北側を北区、南区として述べて行くこととする。

北区は非常に浅い舟底状を呈すもので、2箇所に段を持っています。また上幅も一定しておらず基底部のレベル差もわずかなものである。北区の南端には礫が集積している。

堆積土は砂層で底には泥の堆積もみられた。溝の端には丸状及び三角状の長さ30cmほどの木杭が打ち込まれてた状態で検出されている。(第49図) また木杭が底に横たわって出土してもいる。溝内からは、近世陶磁器が数点出土している。

南区は南に行くほど深くなり、さらに幅も広くなつたため完掘できないため第49図-K-L断面まで完掘し、南側はM-N断面を設定し、その南側を1.5m幅のトレンチ溝として、溝の確認と方向を探るだけとした。一応 I-J断面までを1区、I-J~K-L断面までの間を2区、M-N断面を3区とした。

上幅は2区までは一部2.5mと狭くなる所もみられるが、大体3mを測る。3区では7.6mと極端に広くなっている。断面は薬研掘りに近いもので、わずかな段を作っている。上幅が広くなるとともに、南に行くほど深くなり、I-J断面では現況で25cm(L=597.15m), K-L断面92cm(L=596.66m), M-N断面で152cm(L=595.96m)となっている。底の勾配は全体で3.31%, 1区は0%, 2区は2.78%, 3区6.66%となっており南に行くほど勾配も急になっている。

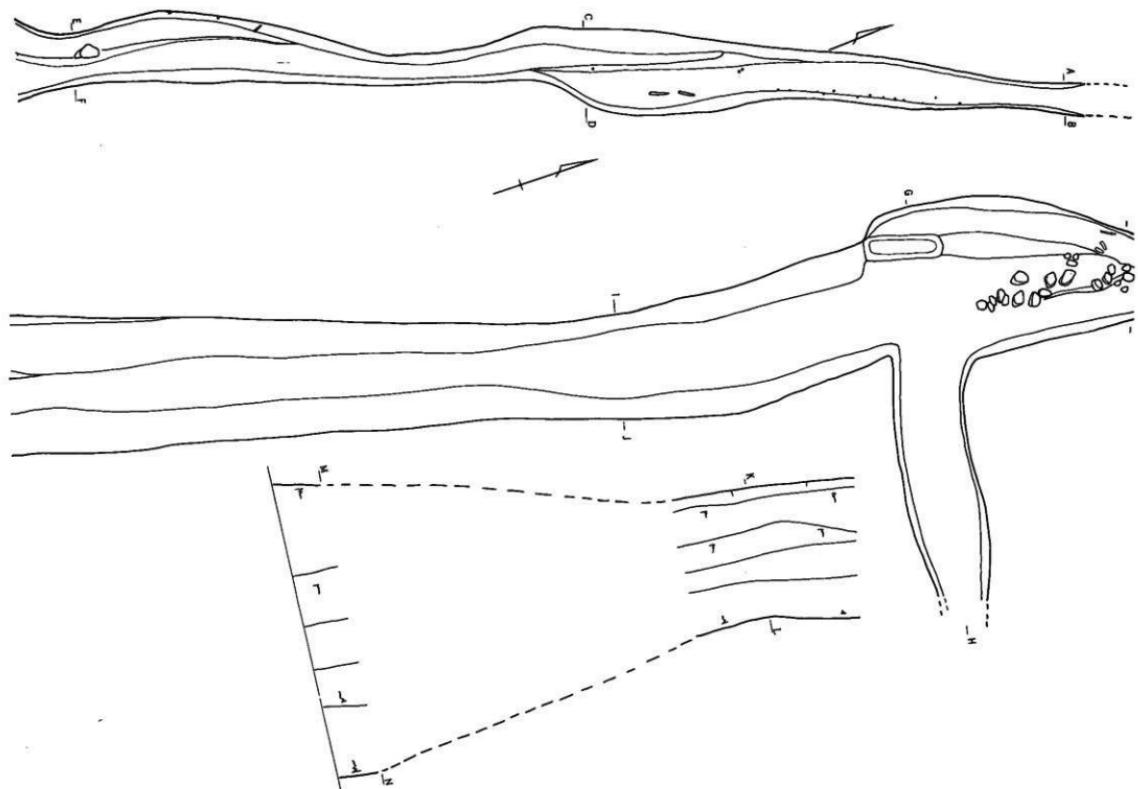
溝の堆積土は基本的には2層からなり、溝の上面は水田の地場(a)。その下部にレンズ状に厚く黒褐色(b)があり、底にロームふらん土(c)がみられる。M-N断面では地場下に2~1.3mに及ぶロームの埋土が認められ、開田時まで、溝の面影が残っていたものと思われる。この溝の東には河原へ下る道か掘削状となつておらず、明治初めに開拓されたものと言われており、この時に埋め込んで水田としたものと思われる。

北区と違い砂及び泥の堆積はまったく認められなかった。

6の黒褐色土より土師器や須恵器が出土している。第51図に示したものは、底に近い所から出土したものである。

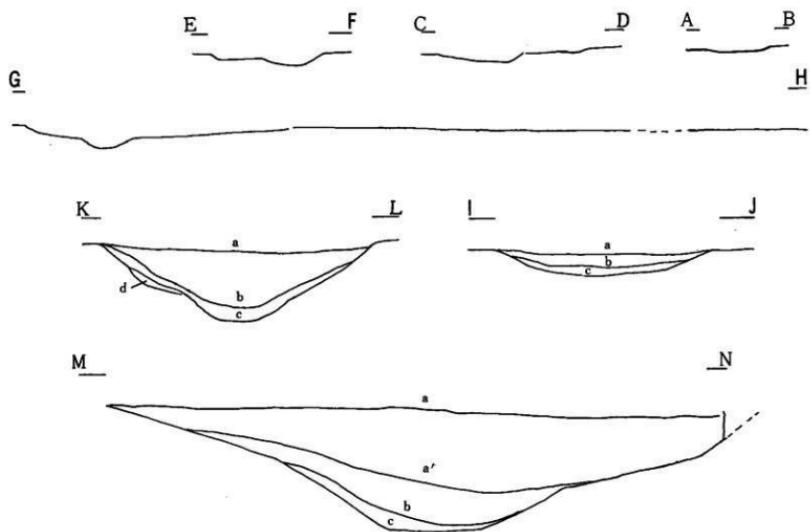
1は2区より出土した土師器の壺の底で、木ノ葉でヘラ削りを行っている。肩部はハケ目調整が施される。

2は灰釉陶器の壺の底部破片である。3区より出土している。



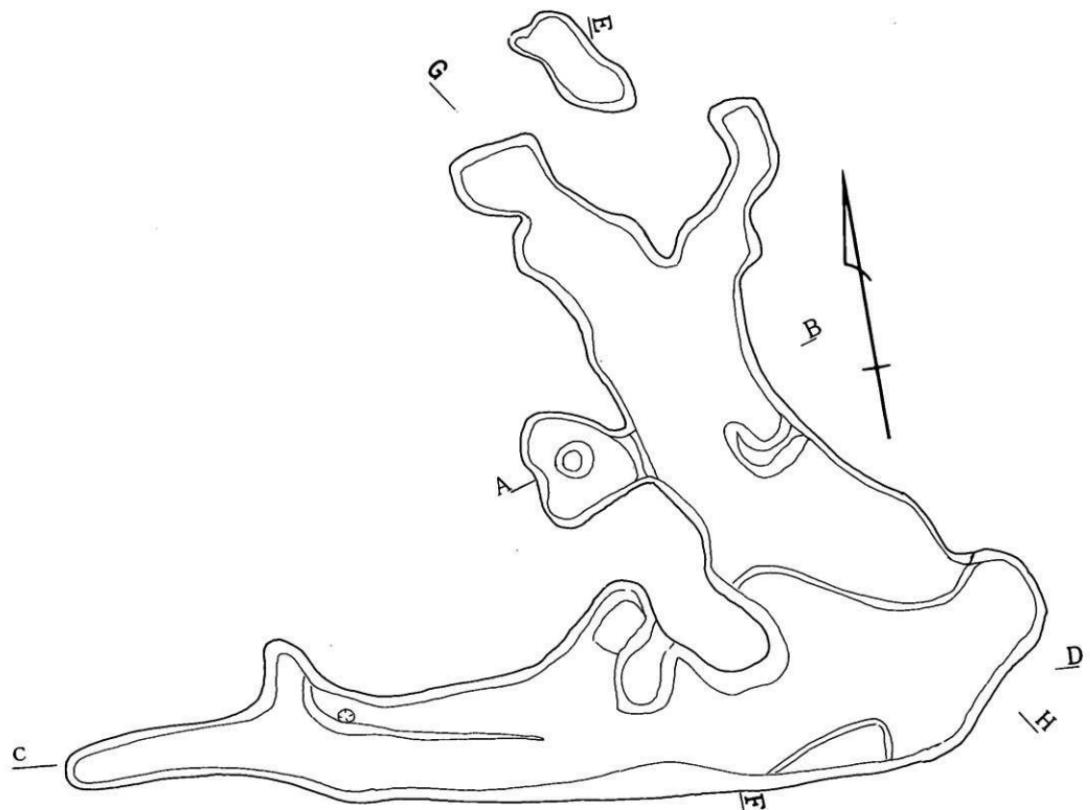
第49図 第1号溝状遺構実測図 ( $S = 1 : 100$ )





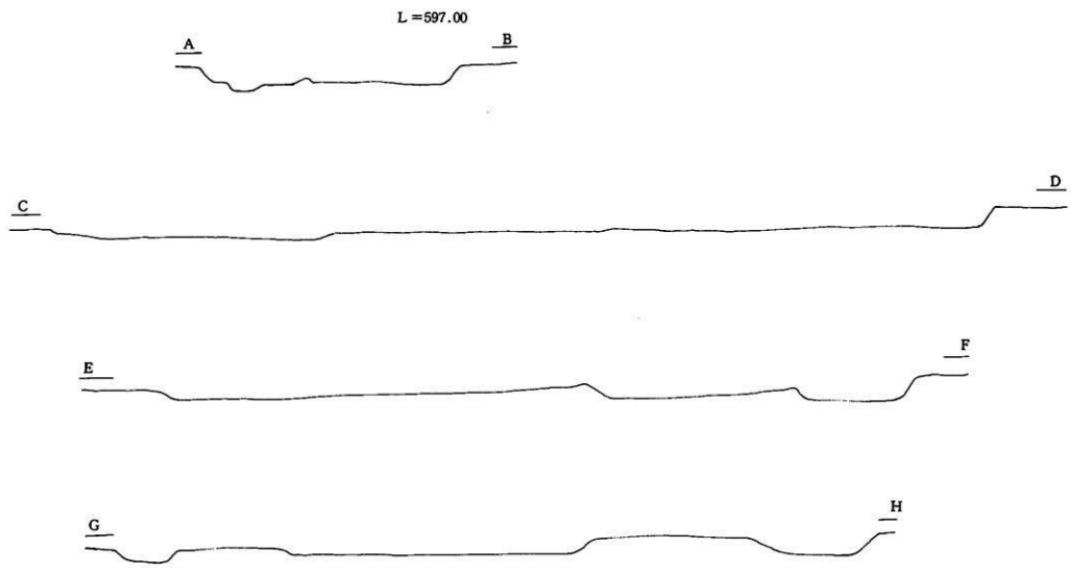
第50図 第1号溝状造構断面図 ( $S = 1 : 50$   $L = 598.00m$ )





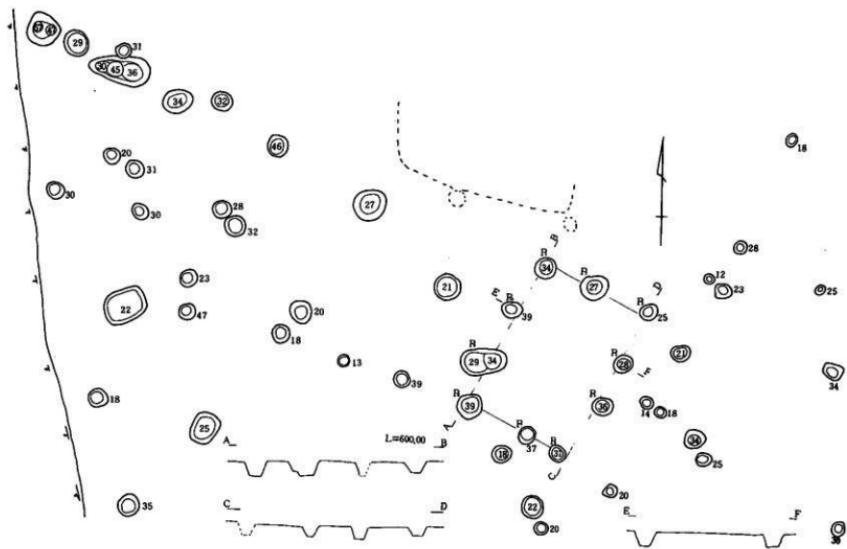
第52図 第2号構状遺構実測図 ( $S = 1 : 100$ )





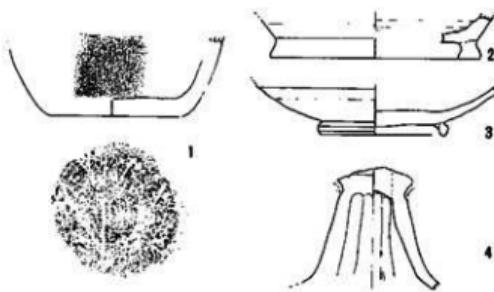
第53図 第2号構造横断面図 ( $S = 1 : 100$ )





第55図 柱穴址実測図 (S = 1 : 100)





第51図 第1号溝状遺構出土遺物 (S = 1/4)

3もやはり灰釉陶器で、皿と思われる。2区より出土している。

4は3区より出土した高壙の脚部の一部である。粗いヘラケズリが施される。

これらはいずれも平安時代以前のものであり、溝の構築時期がこの時期までさかのほる可能性もある。だとすればこの溝の性格は何なのか非常に興味ある所である。

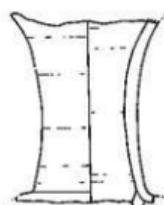
## 2) 第2号溝状遺構 (第52・53・54図)

第II区の道をはさんだ東側に第2号溝状遺構が検出された。この地点は西側と違いローム層ではなく、砂礫層が基盤となっている。先述したように天王川の小支流の開削とそれに伴う砂礫の堆積によるものと思われる。住居址などはこの地点には発見されておらない。

溝状遺構は、この砂礫層に黒色の泥を含む砂が入り込んでいる。幅広な深さ60~70cmの溝が西から東に向かってしの字状にみられる。

遺物は上層地場層内より土師器・須恵器、近世陶磁器が散在的に出土しているが、溝の内部からは、第54図の灰釉陶器の水瓶の口頸部だけである。

この遺構が人口的なものか、自然的なものはきめがたい。意識的に掘り込んだものとすれば、池泉的遺構であろうか。



第54図 第2号溝状  
遺構出土遺物 (S = 1/4)

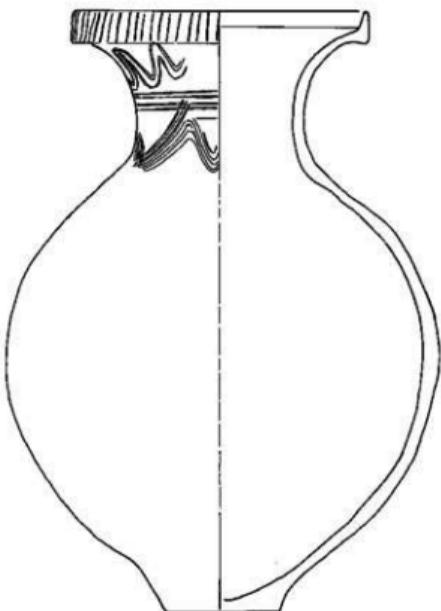
## 第7節 柱穴址（第55図）

第II区第9号住居址の南側を中心として数多くの柱穴痕が検出されている。椭円形のものもみられるが、ほとんどが円形のもので、深さは20~40cmである。

直線状に並ぶものは數單位みられるが、明確な建物址としてとらえられるものは、第55図中P1~P10の10個の柱穴で構成されるものだけである。

4.0×2.9mを測るが、各柱間の間隔は不規則である。床面には特別な施設は見受けられなかった。

柱穴の内部より土師器の細片がわずかにみられた。平安時代の掘立柱式建物である。



第56図 竹棺墓出土遺物 ( $S = \frac{1}{4}$ )

## 第8節 壺棺墓（第56図）

第II区南端、第12号住居内南東壁ぎわより検出された。第12号住居址床面清掃中、床面下に口縁を西にして横たわって発見された。住居址構築に伴い半分は壊されている。土壇らしき施設はみられず土器のみが出土した。土壇を伴うものは上部が壊された現在でははっきりしないが単独の壺棺墓と考えるのが妥当であろう。

当遺跡北東約1kmにある栗林神社東遺跡よりも大形の壺が単独で横たわった状態で出土しており、土壇は伴っていない。

口径20.5cm、高さ41.4cm、底径8.0cmを測るもので、内部は剥落している。第3号住居址出土の壺も剥落がみられ、下伊那においても多分にその傾向があるとのことであり、この時期の壺の共通する特徴である。胎土には砂を多く含んでおり黄褐色を呈している。

小さな底部からく字に内屈した後、胴部は球状にふくらみ、胴央部に最大径を持つ。口縁折立部は直立する。器面外面にはナデ調整がみられる。折立部に縦のヘラ描文が、頸部には横走する櫛描文をはさんで流水文が施される。

弥生時代後期である。

## 第9節 繩文時代早期遺物集中地点

### 1) 出土状態（第57図）

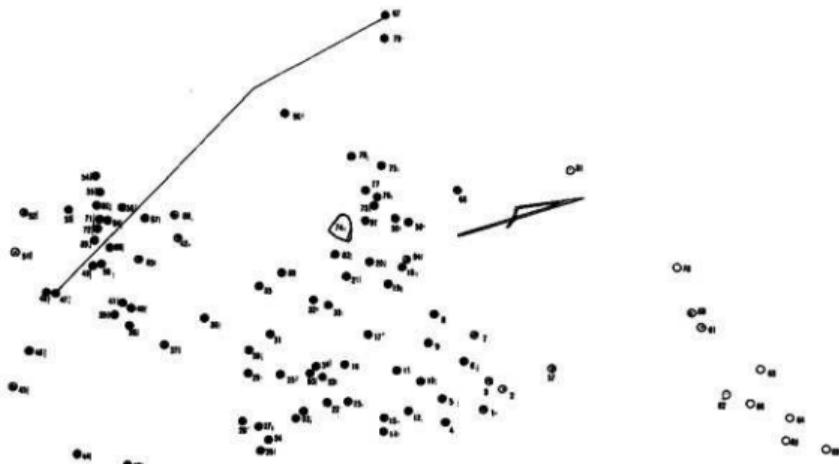
第II区第4号住居址地東壁の一部から東にかけて、落ち込み的に厚い黒色土層が、径6mの半円状にみられた。東側部分は開田時に削られた可能性が強い。西側と北側にてローム層をやや掘り込んだ状態で黒色土が堆積しており、やや炭化物を含み40~50cmの厚さを測る。層位は全くの單一層である。

この黒色土層より、後述する縄文時代早期の遺物が集中的に出土している。上部より後から混在したと考えられる弥生土器（87）、土師器（79）、須恵器（23）がみられたが、他の遺物は縄文時代早期に属するものと思われる。遺物の平面分布は57図に示したが、3つのまとまりを持つが、47、67といった接合例（第58図-9）もあり、区別されるものははっきりしない。遺物の面からすると区別はでき得ない。

層位的にはほとんどが、黒色土層の中位の10~15cmの幅に入るもので、下層のローム面よりは10~15cmほど上位にある。

先述したようにローム層を掘り込んだ状態を呈すが、はっきりとした堅穴として補えることはできず、又タタキ面や焼土などなく造構として考えるには問題が多い。

出土した遺物は土器が主体で、石器は少ない。



第57図 縄文時代早期遺物出土状況 ( $S = 1 : 80$ )

## 2) 土器 (第58~60図 図版27~29)

早期の土器破片は157点(細片は除く)で、その内容は押型文13点、縄文87点、無文57点である。ただし、無文の破片には押型文・縄文の無文部破片であるものも含まれる。胎土による厳密な区分は無理であるため、一応無文として一括しておく。なお、無文土器と思われる口縁部破片はわずかに1点だけであることを考えると無文土器は極めて少ないか、あるいはないと見ることも許されようか。

### 押型文土器 (第58図 図版27)

1・2は縦位施文の山形文である。含有物を多量に含むが、1には透明な光る粒はほとんど見られず、クモリガラス状の粒(石英)が多い。2は立野タイプに特徴的な胎土を持つものであり、白色・半透明・透明の光る粒を多量に含む。1の山形文は小さな普通に見られる形状(第1種山形文<sup>※1</sup>)であるが、2はやや大きい山形文(第2種山形文)である。縦位密接構成をとる。

3は縦位帶状施文の山形文と思われ、9と同じ土器であるかも知れないが、外面の磨滅がはなはだしく詳しいことはわからない。胎土は9と同じ含有物を含む。

4~6は梢円文である。ともに含有物が多く、石英・雲母の粒が目立つ。4はやや大粒で赤褐色を呈し、含有物も多い。5と6は同一個体片であり、縦位と横位施文であることと、粒がやや大きいことなど立野タイプにある梢円文に似ている。

7の市松文は2片あるがもう1片は細片である。含有物はない。



第58図 縄文時代早期土器拓影図1 (S = 1/2)

8はネガティブな精円文といわれる類である。薄手で緻密な胎土の土器である。

9の土器は小破片が多い中で、特別大きな破片のまま遺存した山形文である。2片(47・67)が接合している。推定口径は直径25cmを測り、口縁部で緩く外反してあまり胴のはらしない形状になるようである。文様構成は異方向帶状構成(C種3か<sup>※2</sup>)、口縁部は2帶横走するよう見えるが、これは長い原体の中間部が外反する曲面で浮いてしまって両端部のみ押捺施文された結果である。

9の山形文原体は、長さ26.6mm、2山単位の刻みと思われ、原体径は4.4mmと細い。条の間隔はやや広いといおうか、山の刻みが細いといったらよいか小さな山形は第1種山形文である。6条まで数えることができるが、口唇端部から下に山形を見ていくと、最上位の山は鋸歯状に高いのに対し、下にくるほど波状につぶれ低い山形になる。そして最下段の一条は1山単位に刻まれて、上の条の倍の山形になっているなど、極めて変則的な刻みが行われた原体であり、端部の割り付けと合っていない。原体端部は大波状(第1種)<sup>※3</sup>である。また胎土には黒鉛は含まれず、含有物は半透明の粒と雲母の微粉を多く含む。その点は縄文の土器と似ているが、石英粒がやや多く、黒味を帯びた色調はややもろい感触を受ける。整形は内面に粗い凹凸を残し、無文部もなめらかな仕上げはなされず、擦痕状の浅い沈線のような、あるいは微隆起線のような整形痕がみられる。原体条痕かどうかは判らない。

そして何より口唇部内面に同じ山形文を一帯施文してあるのは良いが、口唇端部だけは別に縄文を施文している点は特異である。

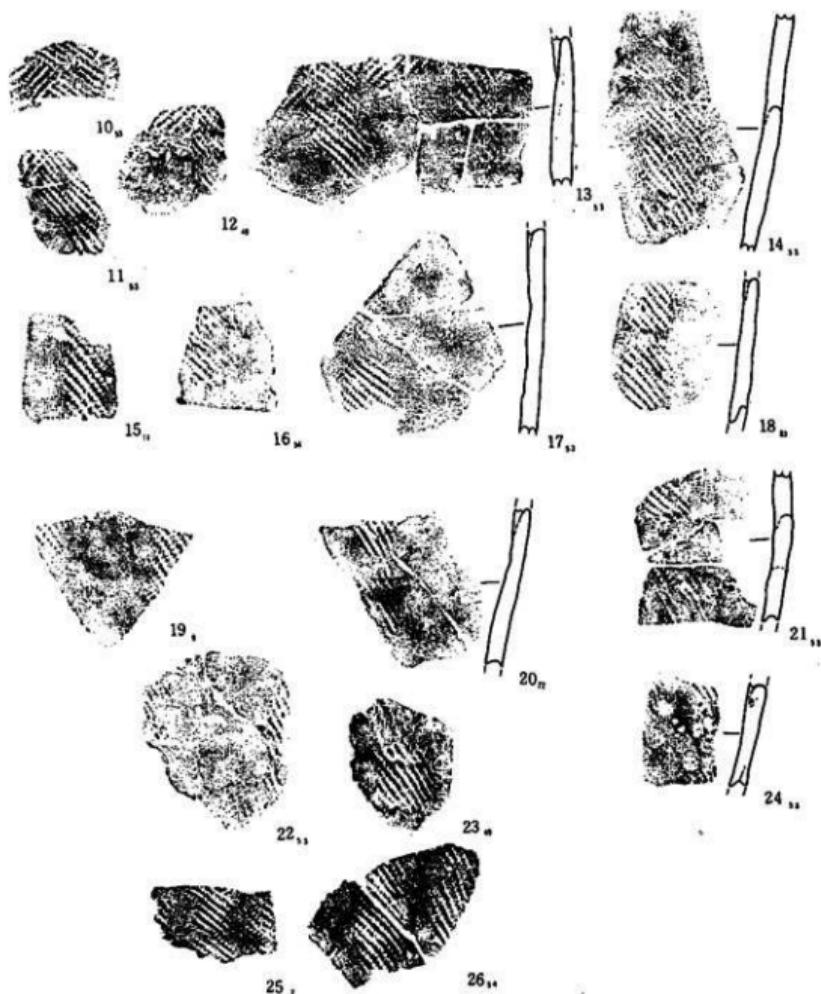
#### 縄文土器 (第59図 10~26 図版28)

同一個体と思われるものの35片(細片を除く)のうち23片を図示した。接合した破片も若干あるが、これまでのところ器形・文様を復元するところまでいたっていない。そのため推定の域を出ないが、山形文と同じ異方向の帶状構成をとると思われる。縦位帯がほとんどであり、胴下半部の破片ばかりであろうか。口縁部に相当する破片が見当らないので頭部から口縁部の文様構成を復元できない。縄文はLRの原体である。

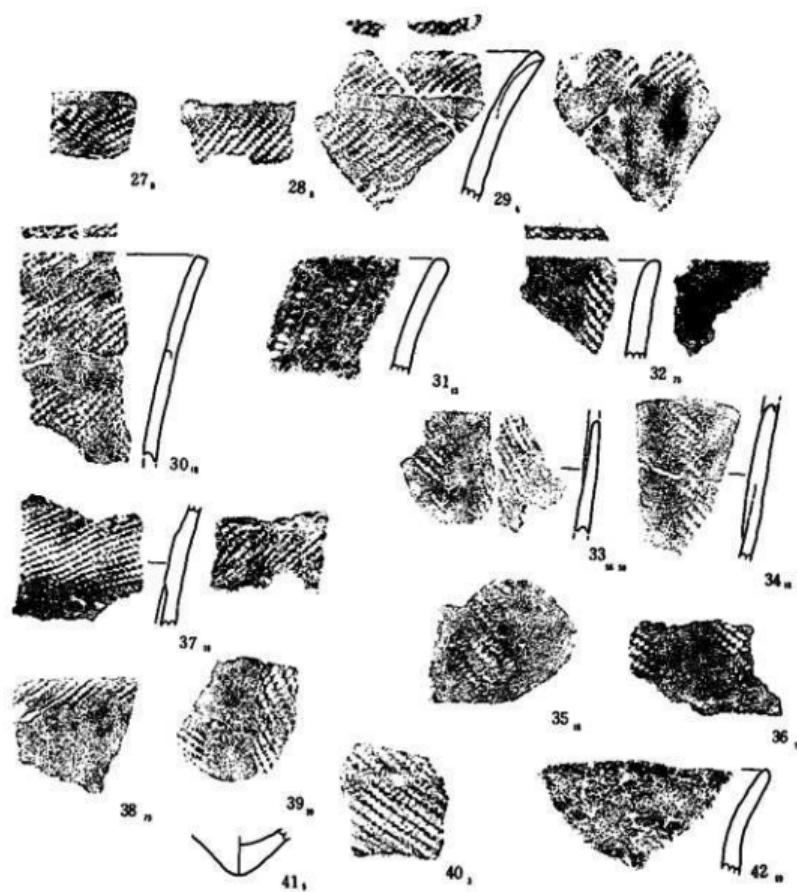
10~14の破片には、縦位の文様帯に横位帯が認められる例である。19にも上側にかすかに縄文を認めることができる。14の破片は唯一横位帯より上を残すが、縦位帯の上方はいかにも不鮮明で、ここで途切れるとも、横位帯を切って上から下に連なるとも断じられない。10・13では縦位帯が切っていることは間違いないようである。

胎土には含有物がそれほど多くは含まれないが、石英の大きな粒と多量の雲母の微粉が顯著である。しかし、立野式土器のように多量に含まれているのではなく、緻密な胎土で固い感じを受ける。整形は内外面とも凹凸は残るがていねいに仕上げである。

また、大部分の破片に成形痕が認められることが特徴的である。断面カマボコ状の擬口縁はないが、その逆形は14・20・21に残る。多くは13・14・17・18・20のように尖頭形に内側の厚さを減していくタイプである。粘土の積み上げを内側に内側にと重ねて、内側の接合面を多くとるようにしているため、18のような受け口状の下位に積み上げたことが明瞭に判る例もある。塩尻市向陽台遺跡の押型文土器に伴う無文土器の成形技術や、権沢遺跡の押型文土器例と極めて似てお



第59図 繩文時代早期土器 拓影図2 (S = 1/2)



第60図 縄文時代早期土器 拓影図 3 (S = 1/2)

り、成形技術の面からも、胴下半部の破片であることが判る。24は粘土の貼り合せが良くわかる例である。全体に胎土が薄いこともあり、接合部の内外面に粘土を貼り付けている例はわからなかった。

#### その他の縄文土器（第60図 図版29）

27～29は同一個体と思われ、口唇端部、口唇部内側にも施文する例である。横位の無文帯を幅狭く残すが、2帶目と3帶目は密接させており、横位帯状構成を示す例として良いかどうかもう一つはっきりしない。縄文はRL。胎土は第59図の縄文と似ているが、雲母の量が少ない。

30は横に3帯の文様帯が若干の無文部を残して施文されている。原体端部が明瞭でないため、帯状を強く印象付けないが、横位帯状構成に近い例である。縄文はRL、口唇端部にも施文されるが、内面にはない。胎土は含有物など29と同じであるが、雲母の量が少なく、内部も器表面も黒色を帯びて、一見押型文土器と似ている。内面の整形は比較的ていねいになされ、若干粒子の移動した擦痕が残る。

31は無文土器の口縁かと思われたが、探拓によって縄文施文が認められた。大粒の擦りが見えるが、胎土はもろくて不鮮明である。

32～36はあるいは同一個体破片かもしれない。第59図土器より若干大粒の縄文RLを口唇直下より縦位に施文する。帯状構成をとるらしいが、どのような文様構成かこれだけの破片では無理である。口唇端部に施文、胎土は29の土器に同じである。内外面ともていねいにナデられていてなめらかな仕上がりとなっている。34・35とも成形痕を良く残す。

37は内面にも縄文(LR)を施文する例であり、口縁部破片と思われるが口唇部を欠く。文様構成は無文部を幅広く残して横位施文されており、帯状構成の一部であることは明らかであるが、第59図土器の口縁部破片であることも考えられる。胎土は良く似ているが、37は若干雲母量が少ないので、むしろ押型文(5)と似た胎土である。

38・39は胎土が良く似ており、内面整形が粗いなど同一個体片の可能性がある。40は内面に粗い擦痕を残す唯一の例である。縄文RLは他に比べ大粒である。

41は唯一の底部破片である。胎土から縄文土器の底と思われる所以ここに示した。

42は無文土器口縁であるが、石英粒を多量に含むなど胎土は縄文と似ており、あるいは31と同様に縄文施文があったかも知れない。風化がはなはだしく明らかではない。縄文について多い無文土器にあって、口縁部破片はこの1点であるため、くわしい説明は省くが、向陽台遺跡のように、その類特有の特徴的な胎土、整形を示さない。

#### まとめ

少量の破片であることや遺構に伴っていないことなど、特別にとりあげて論ずることは、多少の危険を持つとはいえ、重複する土器・弥生土器の混在はわずかに見られるだけであり、縄文土器の混在がない点で比較的単純なまとまった在り方を示す資料として、縄文と山形文の在り方は一つの範を示す例とみて良いのではないだろうか。<sup>※4</sup>

帯状構成の縄文例は、古くは 橋沢遺跡、横山遺跡 の例が知られている。前者は異方向帯状構成(文様構成D種)に近いが、後者は縦位帯状構成(文様構成B種)である。反目南では第59図の

例にみるよう異方向帶状（C種3）がある。また第60図にみる縦位帶状構成（B種）がある。さらに、横位帶状構成に近い例（G種）もあり、山形文と同じほどにはいえないまでも、縄文にも山形文と同様の文様構成を持つ一群があることが次第と解ってきた。

このことは、押型文土器と縄文土器が同じ文様構成で作られるほどに強い関係にあったことを意味しているのである。同一グループによって押型文と縄文が作られたのか、縄文を表裏縄文以来の伝統上にとらえて良いのか、撚糸文系土器との関係においてとらえて良いのか、帶状構成の<sup>※5</sup>押型文土器に伴う無文土器（塙尻市向陽台遺跡）とともに大きな課題として見ていかなくてはならないであろう。それについて一点だけ気になったことは、当遺跡の縄文と押型文の土器が非常に良く似た胎土であることである。縄文の方が雲母を除く含有物が少なく、緻密な印象を受けるが、向陽台遺跡の無文と押型文土器のような極端な相違はみられない。

さて、山形文の大きな破片9の土器であるが、この土器は異方向帶状構成の例としては、原体の長さが異例に長く、したがって条数も多いこと、条の刻み方が不規則であり、1山単位と2山単位が混在することなど、樋沢式土器にあまり見られない特徴ばかりである。黒鉛を含まない土器の異方向帶状構成例は県内では向陽台遺跡第3号住居址の覆土から樋沢式土器（黒鉛を含む異方向帶状構成の土器）と伴出している。関東地方など県外の例ならざ知らず、黒鉛を含む土器が出土してもよい地城にあっては、やはり異方向帶状構成の土器に黒鉛が入らないことはめずらしいのであり、数も少ない。樋沢遺跡でも決して多くないし、向陽台遺跡でも極めてわずかである。

そして、再度繰り返しになるが、口唇端部に縄文を施すことも特異である。比較的文様要素の齊一化した樋沢式土器にあっては、異種の文様要素を同一器面に持ち込むことはまれである。

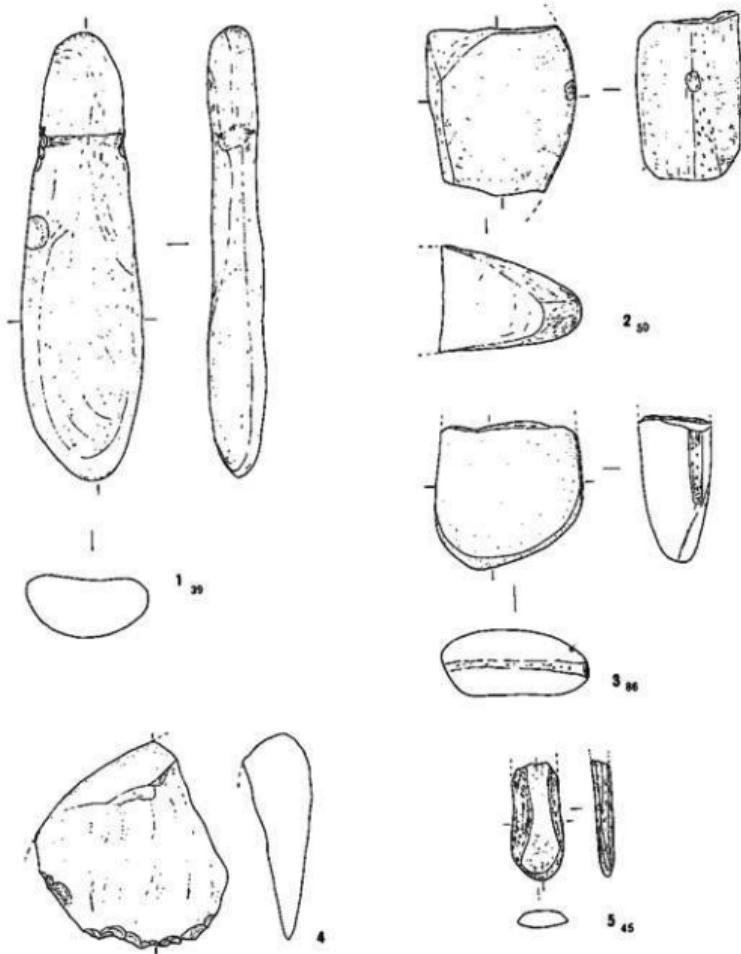
以上のことを考え併せると、この土器は樋沢式土器の規範から著しく逸脱した土器であることがわかる。文様構成から見れば、より新しい要素はない。つまり、横位帶状なら一段階新しくなって規範がくずれてきた土器とする説明も成り立つが、これは逆に異方向帶状構成としては、一段階先行するタイプであると考えるべきであろう。ちなみに、少量ながら伴出した他の押型文はすべて立野タイプである。口唇端部の縄文、長い原体、不規則な原体山形の刻み方などの非齊一性は、むしろ過渡期の不安定要素の現れではないだろうかと想像される。

わずかな資料で飛躍した展開になってしまい、いささか説明不足であったが、中部山岳地帯では、立野式土器が樋沢式土器に先行することが、層位的に次第に明らかになりつつある。しかし型式学的にその変化が説明されておらず、大きな溝になっていることから大方の賛同が得られないことも事実である。この反目南の山形文土器がその特異な文様要素から立野式土器に近い土器の一群に含まれるのでないかと考えたいがどうであろうか。当地方周辺には該期土器の出土例が多いので今後とも、このような資料の増加を期待しているところである。

## 註

※1 用語について説明を加えなかったが、すべて、小杉康『樋沢遺跡押型文土器群の研究』

（「樋沢押型文遺跡調査研究報告書」1987年 岡谷市教育委員会）に掲っているので参照さ



第61図 縄文時代早期石器実測図1 (S = 1/3)

れたい。

※2 ※3 ※1に同じ

※4 林茂樹『横山遺跡の斜縄文土器と押型文土器』(1962年 信濃14-3)

※4『向陽台遺跡』(『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

1988年 塩尻市教育委員会 所収)

### 3) 石器 (第61・62図)

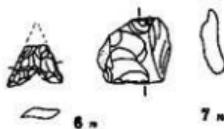
石器は全部で7点出土している。他に大形石器の剝片2点と黒耀石の剝片6点が出土している。

早期以外の縄文土器の出土がないことから石器も早期の土器に供伴するものと考えられる。

1は緑色岩の断面三角形の細長い自然石の面を部分的に磨いたもので、測面に高支持痕がわずかにみられる。頭部から下がったところに両側面をわずかに打ち欠き両面に5mmほどの浅い入れた溝溝がある。つるなどしづら携帯用としたものと思われ、非常に珍しい例である。一応敲打器としておく。2・3は硬砂岩の側面に敲打痕を残すもので、2は全面にわざかながら磨きがみられる。

4は縫を打ち欠き刃部を作出した横刀形石器である。5は砂岩の全面を丹念に磨き上げたものである。

小形石器は2点で、6は石英製の石礫で頭部を欠く。7は黒耀石製のピエスエス・キューである。



第62図 縄文時代早期石器実測図2 (S=1/2)

## 第VI章　まとめ

今回の調査によって明らかとなった遺構、遺物については、前述したとおりであるが、若干気付いた点等問題点を指摘してまとめてかえたい。

検出された遺構は、弥生時代後期の住居址2軒と同期の方形周溝墓3基、壺棺墓1基古墳時代中期の住居址2軒、奈良～平安時代の住居址8軒、土壙11基と掘立柱式建物址1棟、焼土址7基さらに溝状遺構2条である。また遺構は伴わなかつたが縄文時代早期の遺物が集中して出土している。

縄文時代早期の遺物特に土器については、前項において述べてあるので省略したい。ただ遺構を伴わずに集中的に出土した点は市内では未だ例をみない。また桶沢式土器に先行する土器群としてとらえられる点など非常に興味深いものがある。当遺跡の東段丘上反目遺跡からは、押型文の出土が知られており、当遺跡との関連を考える上で重要である。

弥生時代の2軒の住居址はともに後期に属するもので、当地域における該期の住居址と変りはない。

3基確認された方形周溝墓の内、時代を確定できるものは2号のみであるが、後期に属するものと思われる。3基が同一時期に構築されたものでなく多分時間差を持っていたものと考えられるが共伴遺物が少なく確たることは言えない。方形周溝墓は市内では初めての発見であり、上伊那においても数例しか確認されていない。下伊那地方に比べその数は極端に少ない。当期の遺跡の数の差もあるが、それだけでない社会構造の差とも考えられる。当東伊那には、栗林神社東遺跡、狐くぼ遺跡といった当期の集落遺跡があるが確認されていない点を考えると、方形周溝墓の構築場所に限定があったとも考えられる。3基とも東南コーナーに開口部を持ち規制化されている点は注目される。

古墳時代中期6世紀前後の住居址が2軒発見され、良好な該期の資料を伴出している。カマドは後出する住居址に比べかなりしっかりと構築されている。7号住居址はカマド壁上からなだれ込むような状態で、10号住居址においては、生活時そのままの状態で出土している。甕は脛部が球状を呈す該期の特徴を示すものが一般的で、壺・鉢に比べると整形は良い。共伴した壺・鉢・高壺は朱を施されるものが一般的であるが、調整は簡単である。壺は粗いヘラ削りを施し、ヘラ磨きをわずかに施すものが多く、当時期にしては珍しいことである。多くのものに朱が施されていることを考えると、製作時においてすでに朱彩するという意図のもとに簡略化したものではないかと思われる。

いずれにしろ、住居址内よりこのように朱彩された土器器が多く量に発見されることとは、まれなことと思われ、非常に祭祀的な感じを受ける。通常の生活を送るための住居址ではなく、特殊な性格を有した住居址と考えるのが妥当であろう。

奈良～平安時代の住居址が8軒発見されている。4号・8号・9号・12号住居址は奈良時代後半から平安時代にかけてのもの、1号・2号住居址は平安時代後期に属するであろう。

これからのお住居のうち、2号・4号・8号住居址は柱穴を全く持たずに礎石を有する特殊な住居址である。県内において礎石を持つ住居址は数例知られている。最近の発見例としては中央道長野線に伴うものが良く知られている。<sup>※1</sup> 松本市下神遺跡例は大形の住居址で、主柱4本とカマド脇柱2本と壁際に等間隔の礎石を持つものである。松本市三の宮遺跡例は7×8.3mの住居址で壁ぎわに1.8m間隔で礎石が並べられ、礎石間の一部「地覆木」を置いたと思われる浅い溝状造構を伴っている。松本市北方遺跡からは8m×10mの住居址壁ぎわに等間隔の礎石が置かれ中央部に4本の主柱穴が穿れたものが確認されている。他に長野市浅川西条遺跡<sup>※2</sup>において一部に礎石を持つものがみられるが詳細は不明である。

下神遺跡例の北方遺跡例とは、主柱穴を穿つ点、当遺跡と異なるが、基本的構造は同じものと考えられる。三の宮遺跡例の「地覆木」を持つと考えられるものは当遺跡の8号住居址と同様である。

当遺跡においては、4号・8号住居址は中央部に4個の主柱の礎石を持つが2号住居址例は方形とはならず一方に並列しているのみである。4号・8号住居址は内部の4個を主柱とし、壁ぎわの礎石を母屋柱と考えるのが妥当であろう。2号住居址は中央に2個の礎石しか確認できず、柱穴もない点どのような構造を考えたら良いのか。礎石が抜き取られたような痕跡は確認できなかつたが基本的には他の2例と同構造を持つものと考えたい。

母屋柱を巡る壁体があったものと考えるが、どのようなものであったのかははっきりしない。また柱と壁との空間部をどのように解したらよいであろうか。8号住居址例にみる壁ぎわの「地覆木」を置いたと思われる方形の溝状造構と埋戻した状況からするとかなり厚いしっかりとした壁体の存在を想定できる。

いずれにしろ從来の建築には見られないもので礎石を持つ建築は非常に高度な技術を要するものである。この点について、県埋文センターの伊藤友久氏は大陸系の技術であり、帰化人の存在を考えている。さらに大陸系の文化と從来の日本の古来文化との折衷がこのような堅穴式住居址<sup>※3</sup>の内部に礎石を持つ特殊な形の建物を生み出したものではないかと指摘されている。

当例の住居址から想定できる建物がどのような物であったかは、今後の類例の増加をまって、解明されるものと思うが、特殊な建物として考えることは許されるであろう。

土壤は11基確認され、時期不明な2号・3号それと平安時代の1号を除くと他は古墳時代中期のものである。形状的には長方形のものと円形のものとがみられ、断面形は浅い舟底状のものと9~11号にみられる深い堅穴状のものとがあり興味深い。さらに9号・10号は意図的に礎を密封状に詰め込んでおり今後の類例をまちたい。

今回の調査に関し気付いたことを簡単にふれてきたが、最後にこの遺跡の性格についてふれてみたい。

弥生時代の方形周溝墓、7号・10号住居址にみられる朱彩土器、2号・4号・8号にみられる礎石を持つ住居址は、その時期における特殊性を持つものとして考えられる。当東伊那地区には該期の遺跡が多くみられ、それらの遺跡全体の中で特殊な位置を持っていたものと考えられる。当遺跡は、集落遺跡の性格より、墓域的な性格ないし地域共同体における祭祀的な場として

の性格を持つものと考えたい。

発掘調査から整理まで、多くの皆さまのご協力、ご教示を賜ったことに対し感謝申し上げます。とりわけ会田進氏には、縄文時代早期の土器について整理・原稿執筆をしていただきました。心よりお礼申し上げます。

浅学のため、十分な報告になったか心配する所ですが、今後の研究の一助になれば幸いです。

#### 註

※1 「長野県埋蔵文化財センター年報3」（長野県埋蔵文化財センター 1986）

※2 「浅川西条」（長野市教育委員会 1975）

※3 直接話を伺ったもので誤りがあれば筆者の責任であります。

# 出土土器属性表

出土地所	搜査番号	器形	種別	法量	底土	色調	残存状態	器形の特徴	調整
1住-15	8-1	鉢	土師	(22.4) 7.9 (7.3)	砂多し	赤褐色 内墨	口縁剥離 音欠	内溝ぎみに外反し口唇は内傾する。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切の後縁部へラ削り。
1-7	8-2	鉢	土師	17.3 6.3 7.5	緻密	赤褐色 内墨	口縁一部 欠	内溝ぎみに外反する。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切の後縁下部へラ削り。
1-9	8-3	壺	土師	13.0 (12.3) 4.0 6.2	砂粒 雲母 多し	赤褐色 内墨	口唇一部 欠	内溝ぎみに外反し、口唇はやや直立 ぎみとなる。 ゆがみがひどい。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切。
1-7 -10 -11	8-4	壺	土師	16.7 5.9 6.7	砂多し	白灰色 口縁一部 黒色 内墨	完	底部から球状に強く外反し口唇はや や外傾する。 ゆがみがある。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切後手持へラ削り
1-2 -10	8-5	壺	土師	14.7 4.3 5.3	砂多し	地白質黃 色 内墨 外面朱墨 で朱形	口唇一部 欠	直線的に外反し、口唇下に幅広のロ クロ板持つ。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切の後、手持ちへラ削り。
1-6	8-6	壺 (高台?)	土師	17.1 5.4 6.2	砂多し	白質黃色 内墨	口唇士 欠	直線的に外反し、口唇は玉筋状とな る。 高台もとはあったものと思われる。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切の後、回転へラ削り。
1-8 -23	8-7	壺	土師	14.2 4.8 5.2	砂多し	地白質黃 色 内墨 外面朱墨 の痕跡あ り	口唇士欠	直線的に外反する。 ゆがみがある。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切の後、手持ちへラ削 り。
1-16	8-8	壺	土師	(14.0) 4.7 5.8	砂多し	黒褐色 内墨	口唇と体 部は一部 残すのみ	直線的に外反する。	ロクロヨコナヂ。 内面ヨコハラミガキ(一部)。 底部回転系切の後手持ちへラ削り。
1-13	8-9	壺	土師	(12.9) 4.2 4.9	砂粒 多し	赤褐色 内墨	口唇と体 部は一部 残すのみ	内溝ぎみに外反する。	ロクロヨコナヂ。 底部全面ナヂのため切り離し技法は 不明。
1-4	8-10	壺 (高台)	須恵	(12.6) 4.4 8.5	砂含む	灰黒色 底部に一 部自然剥 かれる。	底盤欠け 底盤より強く屈曲し直線的に外反す る。底盤なロクロ板持つ。 底部は付け高台。	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切の後、回転へラ削り。 高台はヨコナヂ。	
1-1	8-11	甕	土師	( ) ( ) 7.0	緻密	黄褐色	底部のみ 底は上げ底	内外ともヨコナヂ。 底部ナヂ仕上げ。	
1-12	8-12	壺 (高台)	土師	( ) ( ) 5.9	緻密	赤褐色	底部と体 下部のみ	底は付け高台 高台は縦身	ロクロヨコナヂ。 底部回転系切の後、金剛ナヂ。 高台外側ロクロヨコナヂ。
1	8-13	甕	灰胎	( ) ( ) 6.9		灰白色	底部と体 下部のみ	高台は直立し内側は内凹	底部回転系切
1-3 -5	8-14	甕	灰胎	13.9 3.4 5.9		白灰色	完形	強く外反し口唇は玉筋状となる。 高台は外傾する。	底部回転へラ削り調整。 高台ロクロヨコナヂ。
1-30	8-15	段皿	須恵	16.4 2.7 6.8		灰白色	口唇士欠	直線的に強く外反し、体部中央に段 を有す。	底部回転へラ削り調整。 高台ロクロヨコナヂ。

出 土 場 所	復 元 番 号	器 形	種 別	法 量	附 土	色 調	残存状態	器 形 の 特 徴	調 査
2往-10	12-1	环	土師	(12.7) 4.6 5.8	砂含む	白黄褐色	口唇全欠	直線的に外反し、口唇下に棱を持ち、口唇外縁はそぎ状となる。幅広なロクロ底持つ。 ゆがみある。	ロクロヨコナダの後、外面体下部ナダ。 底部回転糸切りの後、全面ナダ。
2-18	12-2	环	土師	12.2 3.6 5.0	雲母含む 砂粒	赤褐色 内墨	口唇一部欠	内湾ざみに外反する。 幅広なロクロ底残す。	ロクロヨコナダ。 底部回転糸切りの後、回転へラ削り。
2-20	12-3	环	土師	(12.9) 6.9 5.6	雲母 砂粒 含む	赤褐色	体脇わざ か残すのみ	内湾ざみに外反する。	ロクロヨコナダ。 底部回転糸切り。
2-18	12-4	环	土師	( ) ( ) 6.0	砂粒わざ か	赤褐色	体上部欠	内湾ざみに外反する。	ロクロヨコナダ。 底部回転糸切りの後、回転へラ削り。
2	12-5	环	灰陶	12.3 3.7 6.8	砂多し	灰青色	体脇全欠	内湾ざみに外反する。	ロクロヨコナダ。 底部回転糸切り。
2-22	12-6	环	灰陶	(11.6) 3.2 (6.0)	砂粒わざ か	灰青色	十残	器厚を餘々に減じ、内湾ざみに外反する。	ロクロヨコナダ。 底部回転糸切り。
2-20	12-7	环	灰陶	(11.6) 3.9 5.1	砂粒わざ か	青褐色	十残	器厚を餘々に減じ、口唇は外傾する。	ロクロヨコナダ。 底部回転糸切り。
2-5	12-8	环(西台)	灰陶	(9.2) 3.8 (5.9)	辰石わざ か含む。 全体に鐵 黒	灰青色	十残	直線的に外反する。 高台で強く外反する。	ロクロヨコナダ。 底部回転糸切りの後、回転へラ削り。 高台ロクロヨコナダ。
2-30	12-9	豆	灰陶	15.0 3.1 7.1	黒雲母混 入	白灰色 内面一部 綠色呈す	口唇士欠	内湾ざみに外反する。 外側幅広なロクロ底残す。	底部回転糸切り(?)の後、回転へラ削り。 高台ロクロヨコナダ。
2-19	12-10	豆	灰陶	(15.0) 2.6 (6.7)		白灰色	底部士 体部士残	内湾ざみに強く外反し、口唇は玉縁 状となる。	底部切り離し不明。回転へラ削り。 高台ロクロヨコナダ。
2-17	12-11	豆(?)	灰陶	( ) ( ) (6.6)		灰白色	十残	高台内湾ざみにわずか外反する。	底部切り離し不明。回転へラ削り。 高台ロクロヨコナダ。
2-24	12-12	豆(?)	灰陶	( ) ( ) (7.8)		灰白色	十残	高台は外傾する。	底部切り離し後、回転へラ削り。 高台ロクロヨコナダ。
2	12-13	豆(?)	灰陶	( ) ( ) (5.2)	辰石細粒 か含む	灰白色	十残	高台やや外傾する。	底部回転糸切りの後、回転へラ削り。 高台ロクロヨコナダ。
2-29	12-14	近腰型 (?)	灰陶	( ) ( ) 7.8		灰白色	底標、体 下部士残	高台はやや厚い。 内面に幅広なロクロ底残す。	底部回転糸切りの後、回転へラ削り。 高台ロクロヨコナダ。
2	12-15	近腰型	灰陶	(12.0) ( ) ( )	黒雲母含 む	灰白色	十残	口唇はそぎ状でやや内傾する。	
2-27	12-16	豆	灰陶	( ) 3.0 (17.9)	辰石わざ か含む	灰白色 天井部暗 緑色を呈す	十残	つまみは欠くが宝珠形と思われる。 天井部はわずかに丸味を持ち、口唇 部は直立し、かえりはない。	
4往-10	18-1	豆	土師	( ) ( ) 9.5	雲母含む 鐵定	赤褐色	底標のみ	やや上げ底。 底部内面ロクロ底残す。	本の底底で中央部を手持らへラ削り する。 底部ロクロ底残す。
4— カマド右 手前	18-2	豆	土師	( ) ( ) 5.4	砂含む	茶褐色	底部と朝 下部一部	底部から線状を呈し立ち上がる。 底部内面幅広なロクロ底残す。	外側ハケ目斜走。 内面ヨコナダ。 底は木／底底で手持らへラ削り。

出 土 地	機 団 番 号	器 形	種 别	法 漆	胎 土	色 調	残存状態	器 形 の 特 徴	調 整
4-2	18-3	环	土師	(12.9) 3.8 (5.6)	わざか砂 粒含む	白質褐色 内墨	十枚	胎厚を減じ、内角ぎみに外反する。 ロクロヨコナデ。	底部回転糸切(?)
4-3 -4	18-4	环	磁漆	12.9 3.4 6.7	細密	白灰色	体部少欠	内角ぎみに外反する。 ロクロノ横張。	ロクロヨコナデ。 底部回転糸切。
4-9	18-5	环	磁漆	(12.3) 3.2 (6.2)	長石含む	黑褐色	十枚	口は直線的に外反する	ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。
4-カマド右 手前	18-6	环	磁漆	( ) ( ) 6.4	細密	灰白色	体部一部		ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。
4-6	18-7	环 (高台)	磁漆	( ) ( ) 9.8	砂多し	青灰色	十枚	付け高台。	ロクロヨコナデ。 底部回転ヘラ削り。切り離し不明。 高台はナデ。
4-8	18-8 (長頭?)	磁漆	( ) ( ) 4.7	磁漆	黑褐色	口頭部 欠	付け高台。 頭上部に最大目もつ。		ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。高台ロクロヨコナ デ。
6住-カ マド手前	22	豆	磁漆	3.0 2.9 14.2	砂粒含む	白灰色	体部少欠	つまみ部は盤平であるが、中央が突出する。	外面ロクロヨコナデ。天井部回転ヘ ラ削り。 内面ロクロヨコナデ。
7住-5	24-1	豆	土師	(30.6) ( ) ( )	砂粒わざ か含む	白質褐色 内面口頭 部朱彩	十枚	頭部が外傾した後、口唇は外反する。 頭下部にわざかながら模様が作出され る。	外面ロクロヨコナデ。頭部ヘラ削り。 内面ロクロヨコナデ。頭部部ハケ目調 整。
7-9	24-2	豆	土師	(17.6) ( ) ( )	砂含む	青褐色	十枚	頭部がわざか外傾した後、口唇が外 反する。頭部は球状を呈すと思われ る。 内面頭部に模様を持つ。	外面ロクロヨコナデ。頭部斜位のナ デ。 内面ヨコナデの後、頭部にヘラ削り を行ひ模様を持つ。
7	24-3	豆	土師	( ) ( ) ( )	砂粒含む	茶褐色	頭上部 少欠	頭部はく字を呈し、胴は球状を呈す。	内外ともナデ。
7	24-4	豆	土師	( ) ( ) 5.5	砂粒含む	黄褐色 外面朱彩	底のみ	底中央部やや高くなる	外ナデ。 内面底ヘラ削り。
7	24-5	豆	土師	( ) ( ) 6.6	砂粒含む 雲母多し	茶褐色	底と頭 下部一部	頭部は強く外反する。 底外端中央に3cmの円形の凹部をも つ。	内ヘラナデ。 底部ナデ。
7	24-6	豆	土師	( ) ( ) 6.8	砂粒含む 雲母多し	茶褐色	底と頭下 部一部	頭部強く外反する。 底外端中央に5.5cm円形に凹む。	外面頭位のヘラ削りの後、ナデ。 内面ナデ。 底ナデ。
7	24-7	豆	土師	( ) ( ) 9.4	砂粒含む	黄褐色	底部	く半に外反する。 底外端5.5cm円形に凹む。	外ナデヨコナデ。 内面頭位のヘラ削り。 底ナデ。
7-1	25-8	体	土師	11.9 8.9 -	磁漆	地は 白質褐色 内墨褐色 内外とし 朱彩	完形	丸底 頭部はく字を呈し、体部は球状とな る。 頭部模様を持つ。 内面頭部に模様を持つ。	外面体部ヘラ削りのあとナデ。 口頭リコナデ。 内面体部ヘラ削りのあと丹念な模様 のヘラミガキ。 口頭部ヨコナデ。
7-2	25-9	体	土師	12.1 6.7 7.0	砂粒含む	茶褐色 内墨	口唇部 少欠	盤平な丸底から球状に外反した体部 は上部にてやや内傾し、口唇は直線 状に外反し、口沿部が高くなる。	外面ロクロヨコナデ、体部は一層に ヘラミガキあるもナデ主体。 底部下部ヘラ削りのため模様となる。 内面頭部ヘラミガキはヨコナデ放 射状略文あり。

出 土 場 所	挖 堀 番 号	器 形	種 別	法 量	始 土	色 調	残存状態	器 形 の 特 徴	調 整
7-3	25-10	环	土師	11.1 4.4 —	砂粒含む 地白質 褐色 外表面落 著しいが 内外面と も朱彩	完形	偏平な丸底から球状に外反する体部 は瓶口にて直立し、口縁は丸く外 反する。	体下部へラ削り底一部残す。 体下部ナデ。内面体上部から口縁は ヨコナデ。	
7-4	25-11	环	土師	13.0 5.3 —	砂粒含む 地白質 褐色 外表面落 あるし内 外面とも 朱彩	完形	丸底。体部は内湾どみに外反し、口 縁はわずかな梗を作りて直立する。 内面口唇はそぞ状となり、梗を持つ。	外側体下部へラ削りの後ナデ。体上 部はヨコナデ。 内面体下部へラ削りの後ナデ。一筋波 状へラ削りあり。暗文風となる。 口唇ヨコナデ。	
7-6	25-12	环	土師	13.4 4.6 —	砂粒含む 地白質 褐色 外表面落 あるし内 外面とも 朱彩	完形	偏平な丸底から体部は直立し口唇部 はわずかに外反する。	外表面下部へラ削りの後ナデ。上部 はヨコナデ。 内面下部へラ削りの後ナデ。一筋波 状へラ削りあり。暗文風となる。 口唇ヨコナデ。	
7-7	25-13	环	土師	11.6 5.4 —	砂粒含む 地白質 褐色 剥落著 いが内外 とも朱彩	完形	丸底から内湾どみに外反し、口縁部 は直立。口唇は外反する。内面口唇 は梗をもつそぞ状となる。	外表面下部へラ削りの後ナデ。 口縁ヨコナデ。 内面口唇ヨコナデ。体部へラミガ キ(?)	
7-7	25-14	环	土師	11.8 6.3 —	砂粒含む 地白質 褐色 剥落有 るし内外 とも朱彩	口唇一部 欠	偏平な丸底から 球状に体部は外反 し、口縁部は直立する。口唇内面は そぞ状となる。	外表面へラ削りにより偏平な丸底 となり模様を呈す。 体部ヨコナデ。 内面体部へラ削りの後ヘラミガキ口 唇ヨコナデ。	
7	25-15	环	土師	(13.0) (6.4) —	砂粒含む 白質褐色 色	口縫欠	丸底から球状に外反し、上部にて直 立する。	外表面へラ削りの後ナデ。内面剥落し ており不明	
7	25-16	环	粗陶	(12.3) 3.9 (5.1)	鐵色 青灰色	十枚	直線的に外反する。 ロクロノ輪足。	ロクロヨコナデ。 底脚転承切(?)	
8住-12	28-1	甕	土師	(20.8) ( ) ( )	砂粒含む 黒褐色	朝下半部 欠十枚	口縫はく字に外反する。	口唇内外ヨコナデ。 朝脚転承調整。 内面はナデ。	
8	28-2	甕	土師	(14.6) ( ) ( )	砂粒含む 黄褐色 氧化物付 着する。	朝下半部 欠十枚	口縫は厚めし、く字に外反する。口 唇に剥がれられる。	外表面ヨコナデ。 朝脚転承キヤ 内面口唇ヨコカキ目 朝脚ヨコナデ	
8	28-3	甕 2と同一 體体か	土師	( ) ( ) 5.5	砂粒 黄褐色 氧化物付 着	朝下部 のみ	底からの立ち上がりは丸味を持つ。	木ノ葉底 外表面斜位のカキ目 内面ナデ。	
8-2	28-4	环 (高台)	粗陶	12.7 3.8 9.8	砂粒含む 灰白色	口唇一部 欠	体部は底から強く環曲し、直線的に 外反する。 付け高台。	ロクロヨコナデ。 底脚転承系切りの後、回転へラ削り。 高台ロクロヨコナデ。	
8-6	28-5	环 (高台)	粗陶	12.0 4.1 8.7	砂多量に 含む。 生成き状	口唇十枚	#	ロクロヨコナデ。 底脚転承系切りの後、回転へラ削り。 高台ロクロヨコナデ。	
8-5	28-6	环	粗陶	(12.2) 4.2 (7.4)	砂多量に 含む	十枚	直線的に外反する。	ロクロヨコナデ。 底脚転承系切り?	
8-4	28-7	甕	粗陶	2.4 3.1 (17.8)	砂多量に 含む	十枚	つまみは宝珠形 天井部はやや丸味を持つ。 口縫は直立し口唇は内そぞとなる。	ロクロヨコナデ。 天井部転轍へラ削り。	

出土地	性 器 番 号	器 形	種別	法 量	地 土	色 調	残存状態	器 形 の 特 徴	調 整
8	28-8	环	環底 (高台)	重底 ( ) (12.2)	緻密	白灰色	十残	底から強く彎曲し、直線的に外反する。 付け高台。	ロクロヨコナダ。 底切離し不明。回転ヘラナダ。 高台ロクロヨコナダ。
8-5	28-9	环	環底 (高台)	重底 (14.0) 4.2 (9.7)	砂多量に 含む	灰青色	十残	底から強く彎曲し、直線的に外反する。 高台外反する。	ロクロヨコナダ。 底切り離し不明。 高台ロクロヨコナダ。
8-2	28-10	水瓶	環底	9.4 ( ) ( )	砂多量に 含む	灰黑色	口部部のみ	内面ぎみに外反し、折立部は直立する。	ロクロヨコナダ。
9	31-1	环	環底	(13.8) 4.2 (6.4)	砂粒含む	白灰色	十残	ロクロ底を彎曲し残し、体部は直線的に外反する。	ロクロヨコナダ。 底回転ホリによって切り離し。
9	31-2	环	環底 (高台)	(13.0) 3.8 (8.2)	砂わずか に含む	黑青色	十残	底部から強く彎曲した体部は直線的に外反する。 付け高台。	ロクロヨコナダ。 底回転ヘラ削り。切り離しは不明。 高台ロクロヨコナダ。
9	31-3	亚	環底	2.0 3.0 14.2	砂含む	青褐色	天井部 一部欠	天井部はやや丸味を持つ。 口唇部は短く丸い。 つまり部偏平。	ロクロヨコナダ。 天井部回転ヘラ削り。
10(8-7)	34-1	翼	土師	17.5 32.7 5.0	砂粒含む 母貝	黒褐色	胴部1部 欠	小さな底から直線的に強く外反した底部は、頭上部にて数大柱を持ち、 口縁はく字に外反する。口唇外縁をそぎ直立させている。	外腹体部粗いヘラ削りの後、裾のヘラナダ。ロ頭部はヨコナダの後、ヘラナダが行われる。 底部ヘラ削りの後、ナダ。内面側のヘラ削り。ロ頭部ヨコナダ。
10-2	34-2	翼	土師	17.8 21.8 5.3	砂粒含む	黄褐色	完形	小さな底から直線的に強く外反した後、頭部は球状にふくらむ。 口縫はく字に外反する。頭部は球状にふくらむと思われる。	外腹体部粗いヘラ削りの後、裾のヘラナダ。ロ頭部はヨコナダ。内面側の粗いヘラ削りの後ナダ。頭部はヘラミガキ。ロ唇部はヨコナダ。底はナダ。
10 カマド	35-3	翼	土師	17.3 ( ) ( )	砂粒含む	黄褐色	頭上部 十残	頭部は球状にふくらみ、口縫はく字を呈す。	外腹口ヨコナダ。 頭・頭部は丹念なヘラミガキ。内面丹念なヘラミガキ。
10-10	35-4	翼	土師	17.2 ( ) ( )	砂粒含む	黄褐色	底部のみ	口縫はく字に外反し、頭部は球状にふくらむと思われる。	ヨコナダ。
10-12	35-5	翼	土師	( ) ( ) 4.2	砂粒含む 青褐色 内外胴部 朱彩	底部のみ	丸底風	底へラ削りの後ナダ。 外腹丹念なヘラミガキ。 内面ナダ。	
10-4	35-6	环	土師	15.7 5.6 砂粗母多 底に含む	黄褐色	完形	丸底、内面ぎみに強く外反し、口唇は外縁をそぎ直立する。	外腹粗いヘラ削りの後、ヘラミガキ。 ロ唇ヨコナダ。 内面ナダ。放射状紋文が施される。	
10-4	35-7	环	土師	12.8 5.2 -	砂粒含む	黄褐色 内外朱彩 朱彩	完形	丸底器厚を徐々に減じ、強く外反し、 口縫直立し、口唇は内面下す。	外腹体部へラ削りの後ナダ。 ロ唇ヨコナダ。 内面体部に一部ヘラミガキられる。 ナダ。
10-5	35-8	钵	土師	(10.6) 5.8 -	砂粒含む 内外朱彩 朱彩あり	赤褐色	十残	偏平な丸底から内面ぎみに外反し口縫は直立する。	底へラ削りの後ナダ。 内外面ヨコナダ。
10-12	35-9	环	土师	13.3 4.9 -	砂粒 粗母多 底に含む	黄褐色 内外朱彩 朱彩あり	完形	丸底から強く外反し、口唇は外縁をそぎ直立となる。	外腹体部へラ削りの後、簡単なヘラナダ。ロ唇ヨコナダ。 内面ナダ。ロ唇ヨコナダ。
10-16	35-10	环	土师	14.9 5.3 -	砂粒 粗母多 底に含む	赤褐色	十残	丸底から強く外反し、口唇は直立する。	外腹体部粗いヘラ削りの後ナダ。 ロ唇内外ヨコナダ。 内面体部へラ削りの後ヘラミガキ一部ある。
10-11	35-11	环	土师	13.4 5.6 -	砂粒 粗母多 底に含む	赤褐色 内外とも 朱彩	口唇一部 欠	丸底から強く外反し、口唇はそぎ状にて外面内縮する。	外腹へラ削り(体下部粗い)の後、 ヘラミガキロ頭部は丹念。内面へラケズリの後ヘラミガキ。

当 土 場	検 選 号	器 形	種 别	法 例	胎 土	色 調	現存状態	器 形 の 特 徴	調 査
10-9	35-12	鉢	土師	13.2 7.8 —	砂粒 粗密含む	黄褐色	少し	丸底から環状にふくらむ。 口縁は直く字に外反し器壁はすぐなる。	外面下部粗いへラ削りの後へラミガキ。口唇ヨコナナ。内面底部丹念なヘラミガキ。口唇ヨコナナ。
10-5	35-13	鉢	土師	14.1 5.9 —	砂粒 粗密含む	地白質褐色 内外朱彩	口唇一部 残して欠	丸底から内湾ぎみに外反し、口縁は此端をもって外反する。	外面へラ削りの後、丹念なヘラミガキ。内面ヘラミガキ。
10-10	35-14	高杯	土師	16.4 ( ) ( ) ( )	粗密含む	地白質褐色 内外朱彩	脚部欠	はめ込み式。 杯中央部つぎ目側を残し、内湾ぎみに強く外反する。	外面はヘラミガキ。口唇ヨコナナ。内面は丹念なヘラミガキ。
10-5	35-15	高杯	土師	16.9 10.4 11.2	砂粒含む	地白質褐色 内外朱彩	脚部缺 一部欠	はめ込み式。 杯部は厚唇を減じて強く強反し、口唇は外傾する。 脚部はわずかに上くらみを持ち、脚部はほぼ平らとなる。	環部内外ナナ。脚部外面はラミガキ。内面へラ削り。脚部ヨコナナ。
10-3	35-16	壺	土師	( ) ( )	砂粒わずかに含む	地白質褐色 内外朱彩	口輪部欠	底は平底に近くなり、脚部はフットボール状を呈す。 底中央わずかにくぼむ。	外面へラケズリの後ヘラミガキ。内面上部ナナ。
10-1	35-17	高杯	土師	(17.0) ( ) ( )	砂粒 粗密含む	地白質褐色 内外朱彩	杯一部 欠 脚欠	杯部は内湾ぎみに強く外反、 口唇はそぞ状となる。	内外ともナナ。
12往	38-1	壺	土師	( ) ( ) 5.9	砂粒含む	茶褐色	脚下部のみ	脚部は直線的に外反する。	木の葉模、 外側ハケ目、 内面へラ削り。
12	38-2	壺	陶器	13.1 3.0 5.7	砂粒含む	灰白色	少残	直線的に強く外反する。 ロクロ病顯著。	ロクロヨコナナ。 底粗軽舟切。
12	38-3	壺	陶器	13.6 4.6 4.8	砂含む 生地状	白灰色	少残	直線的に強く外反し、口唇はそぞ状となる。 ロクロ病顯著。	ロクロヨコナナ。 底部ナテ切り難い不明。
1号土壙	45-1	坪 (高台)	陶器	(13.8) 4.2 8.8	砂粒含む	青黒色	环部一部のみ	付け高台 底部から屈曲して内湾ぎみに外反する。	ロクロヨコナナ。 底粗軽舟切の後回転へラ削、高台はロクロヨコナナ。 高台にはヘラ切りの浅縁がある。カツ付。
4号土壙	45-2	壺	土師	(18.0) ( ) ( )	灰石わずか食む	茶褐色	瓶上半部 以上十段	口縁はく字に外反し、瓶部は球状となる。	外面口唇ヨコナナ 瓶部から脚部へラミガキ 内面へラミガキ 脚部へラケズリ
*	45-3	壺	土師	(17.4) ( ) ( )	砂密含む	黄褐色	口周部のみ少残	*	内外ヨコナナ
*	45-4	壺	土師	(14.2) ( ) ( )	砂粒含む	白質褐色	瓶上半部 以上十段	*	外面口縁ヨコナナ 脚部不明 内面口縫不明(まれたため) 脚部へラケズリ
*	45-5	壺	土師	(11.1) ( ) ( )	砂粒 粗密含む	黄褐色	口周部 十段	*	口唇外ヨコナナ 外面脚部へラミガキ
*	45-6	手づくね	土師	3.2 4.2 —	砂粒含む	白質褐色	完形	丸底一方挿入する。	内外ヨコナナ
5号土壙	45-7	壺	土師	( ) ( ) 4.8	砂粒含む	黄褐色	底部少損	小さな底部からく字に外反する。	底へラケズリ 内面ナナ

地 場 所	接 地 番 号	器 形	種 別	法 算	松 土	色 調	残 存 状 態	器 形 の 特 徴	調 整
*	45-8	甕	土師	(16.7) ( — —)	砂粒含む	黄褐色	胴上半部 以上土殘	口縁部はく字に外反し、胴部は直線 的に外反する。	口唇内外ヨコナダ 胴部外周ヘラケズリ 胴部内面ナダ
*	45-9	甕	土師	( — — 7.2)	雲母含む	赤褐色	底部少	内屈した胴部は強く外反する	底ヘラケズリの後ナダ 胴部内外ナダ
6分1堆	45-10	平	土師	(13.8) 4.3 —	砂粒含む	赤褐色	底部少	偏平な丸底から器厚を減じ口縁は直 立し、内そぞとなる。	底ヘラケズリの後ナダ 外面体部ヘラミガキ、口唇ヨコナダ 内面口唇ヨコナダ、底部ヘラケズリ の後ナダ、一部タテカヘラミガキを ある。
7分1堆	45-11	鉢	土師	(11.5) 9.2 —	砂粒含む	白黄褐色 内外朱彩 (内面 有 無 の み)	牛脊	やや偏平な丸底から胴部は球状を呈 し、口縁はく字に外反する。	底ヘラケズリ 外面胴部ヘラケズリの後ヘラミガキ 口唇ナダ 内面ヘラミガキ
*	45-12	甕	土師	(15.2) 3.6 —	砂粒含む サザナ する	黄褐色	少	偏平な丸底から体部は内湾ざみに外 反し、やや内屈する口縁は直く内そ ぞで外反する。	底ヘラケズリ 口縁から底部内外ヘラミガキ
*	45-13	鉢	土師	(11.2) (5.8) —	砂粒含む 雲母	地白 褐色 内外朱彩 (内面 有 無 の み)	少	偏平な丸底から内湾ざみに直立し、 口唇はわずかに外反すると思われる。	底ヘラケズリの後ナダ 外面体部ヘラミガキ (?) 内面ヘラミガキ
9分1堆	45-14	鉢	土師	(13.9) 8.6 —	雲母含む	赤褐色	少	丸底から直立ざみに体部は立ち上り り、口縁は外反する。	底ヘラケズリの後ナダ 胴部内外ヘラミガキ 口唇ヨコナダ
*	45-15	高杯	土師	(17.4) ( —)	砂粒含む	地 白黄褐色 内外朱彩	少	やや内湾ざみに外反する。	内外とも相ヘラケズリの後ヘラミ ガキ
*	45-17	高杯	土師	( —) ( —) (13.0)	雲母含む	地 白黄褐色 内外朱彩	口唇欠 脚袖部 少	口縁は強く外反する。脚部は中太り で発達点をもって袖部となり。袖部 内面には接をもつ	外面ヘラミガキ 内面脚部ヘラミガキ 脚部ヘラケズリ 袖部上部はヨコナダ端部はヘラケズ リの後ナダ
10分1堆	45-18	甕	土師	(18.4) ( —)	雲母含む	黄褐色	胴上半部 口縁のみ	口縁く字に外反し、胴部は球状とな る	口唇内外ヨコナダ 外周胴部ナダ 内面ヨコのヘラケズリ
11分1堆	45-19	甕	土師	( —) 8.0	鐵	黒褐色	胴下半部 少	底から強く外反し、屈曲して外反を やや弱める	外面ヘラケズリの後ナダ 内面ナダ
*	45-20	平	土師	(15.5) 5.8 —	砂粒少 く含む	赤褐色	少	丸底から器厚を減じ口縁は直立口唇 はそぞとなる	外面ヘラケズリの後内念なヘラミガ キ 内面内念なヘラミガキの後放射状暗 文施す
*	45-21	鉢	土師	(15.3) 6.9 —	胡麻母含 む	赤褐色	少	丸底から体部は外反したの直立し、 内そぞの口唇はく字に外反する	口唇内外ヨコナダ 体部内外内念なヘラミガキ
*	45-22	平	土師	(13.8) ( —)	+	黄褐色	底部少 少	内湾ざみに外反する体部は口縁にて 直立ざみとなる。丸底と思われる。 口唇内そぞ	内面ナダ
4号 燒土上	48	坏	燒土	12.1 3.4 6.7	砂粒含む	白灰色	口唇一部 少	体部は直線状に外反する	ロクロヨコナダ 底周部ヘラ切リの後縫邊ナダ

図版 1



遺跡遠景

図版 2



第 1 号住居址

図版 3



手前 2号住居址



東より



西より

図版 4



礎石北側



礎石南側



西張出部とこもで石

図版 5



東より



西より

第 4 号住居址

図版 6



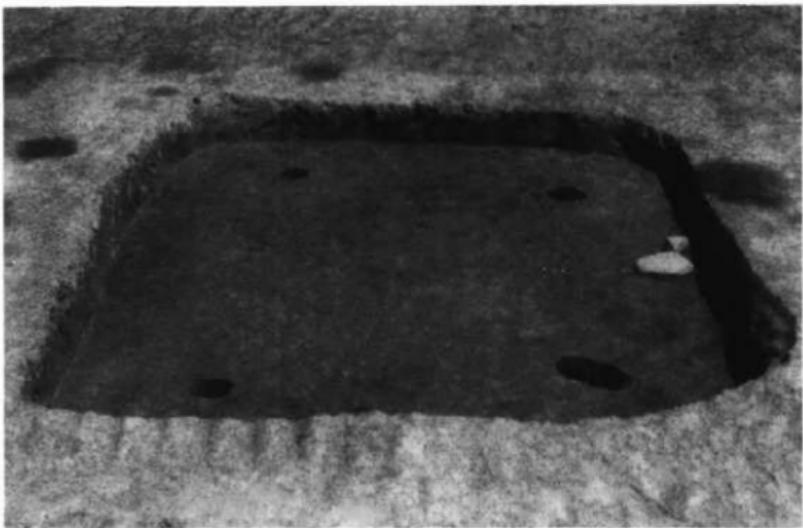
西側



南側

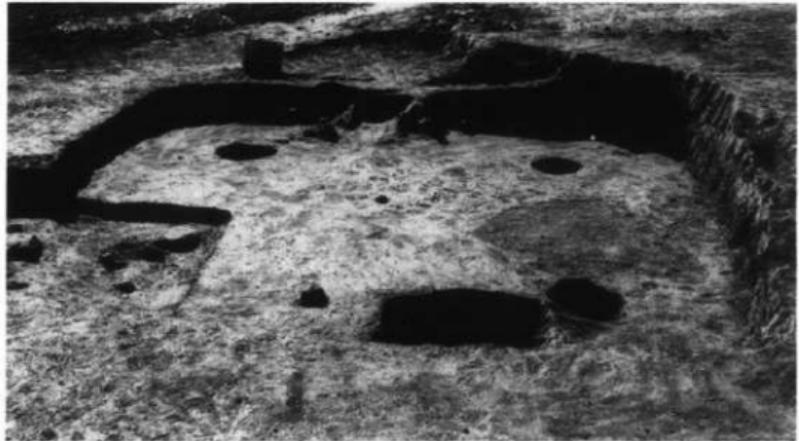
第 4 号住居址

図版 7



第 5 号住居址

図版 8



第 7 号住居址

図版 9



東より



西より



カマド

第 8 号住居址

図版10



北西より



南西より



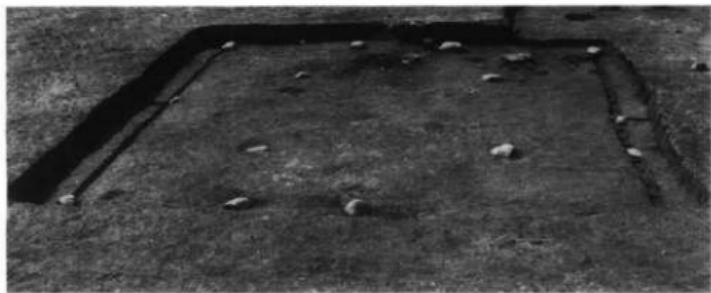
礎石北側



礎石東側

こもで石出土状態

図版11



東より



北側



南側



北東コーナー



北礎石の一部

第8号住居址（溝掘り上げ後）



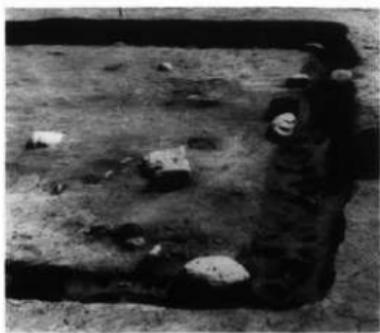
北側



南側



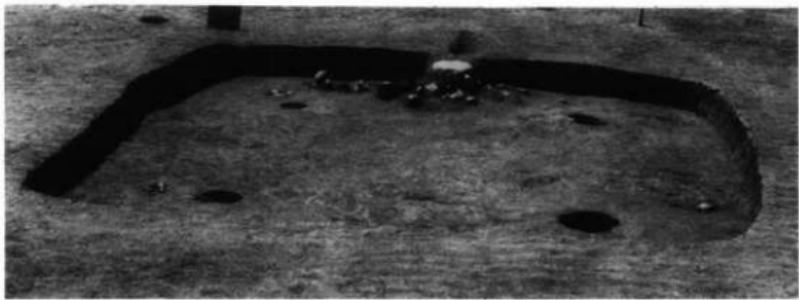
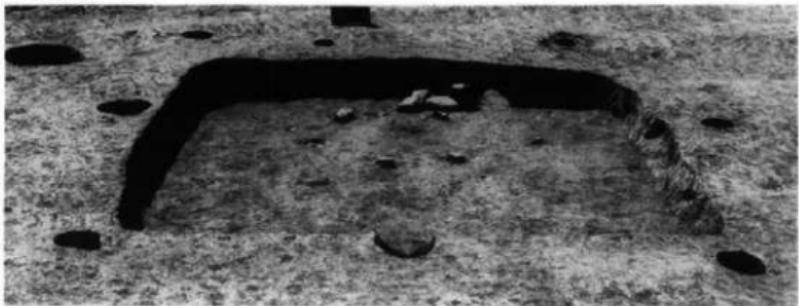
東側



西側

第8号住居址（貼り床部分掘り上げ後）

図版13

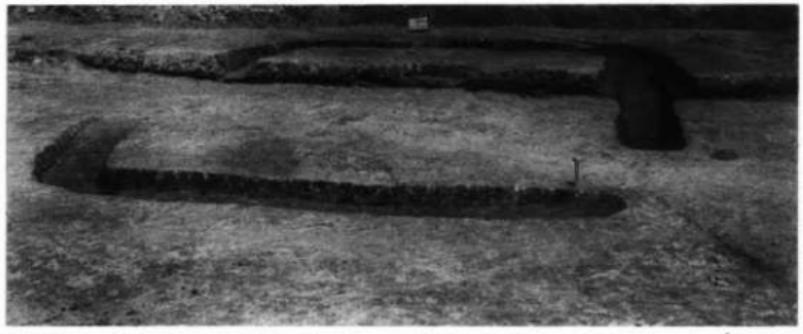


第9号・10号住居址（上段は9号住、中・下段は10号住）

図版14



東より



南より

第12号住居址と第2号方形周溝墓



4号、6～8号土壤

図版16



9号・10号土壤

図版17



焼土址



第2号溝状遺構

焼土址と第2号溝状遺構

図版18



北より

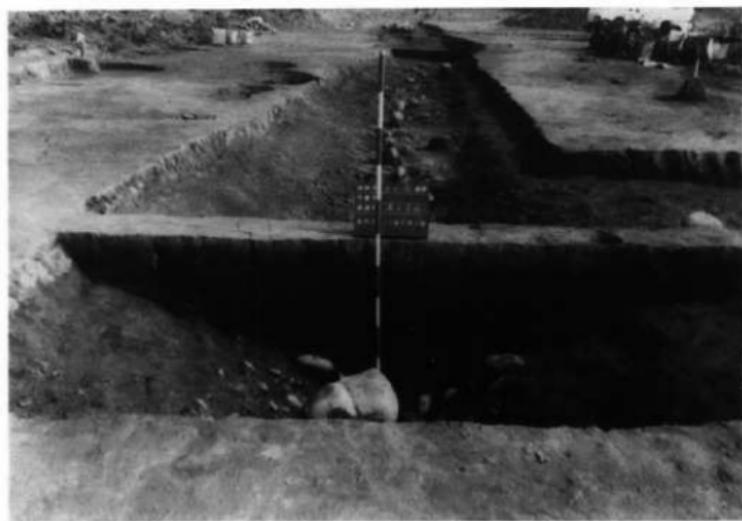


南より

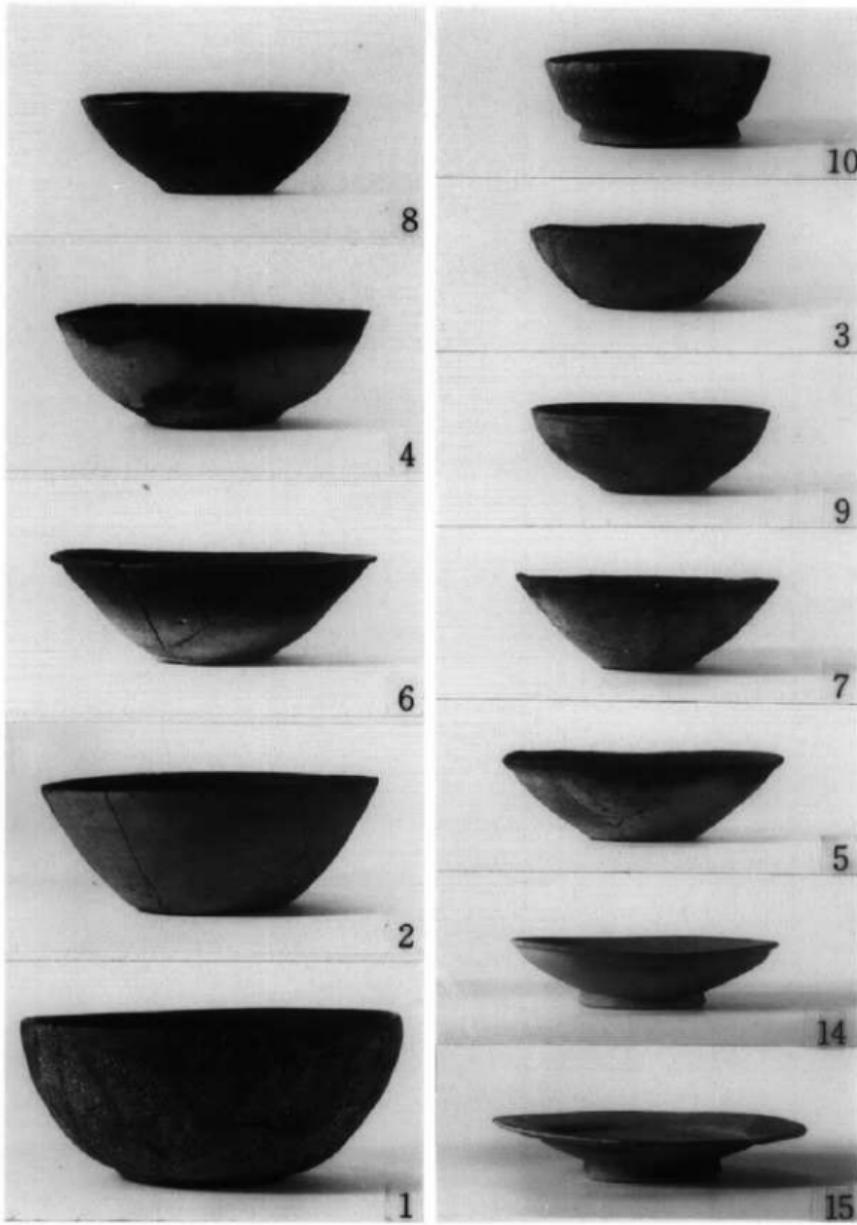


北より

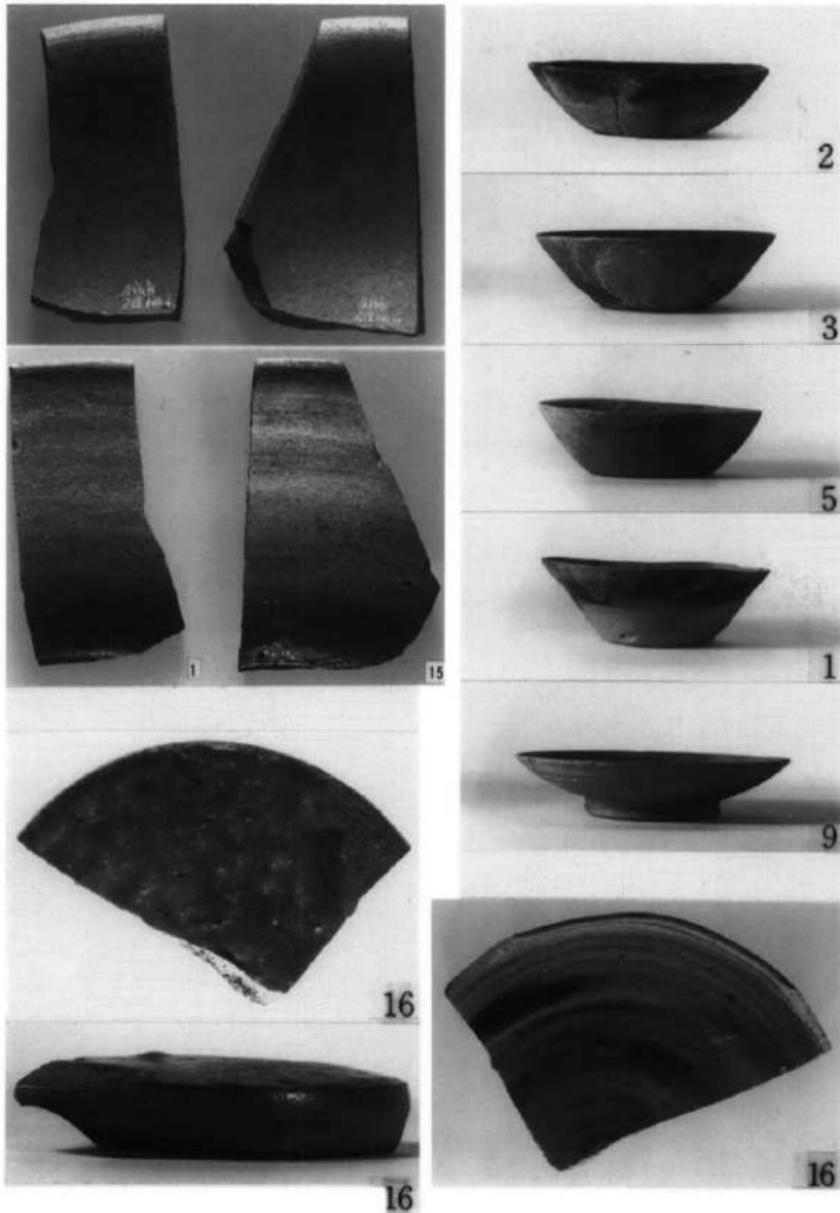
図版19



第1号溝状遺構（南より）

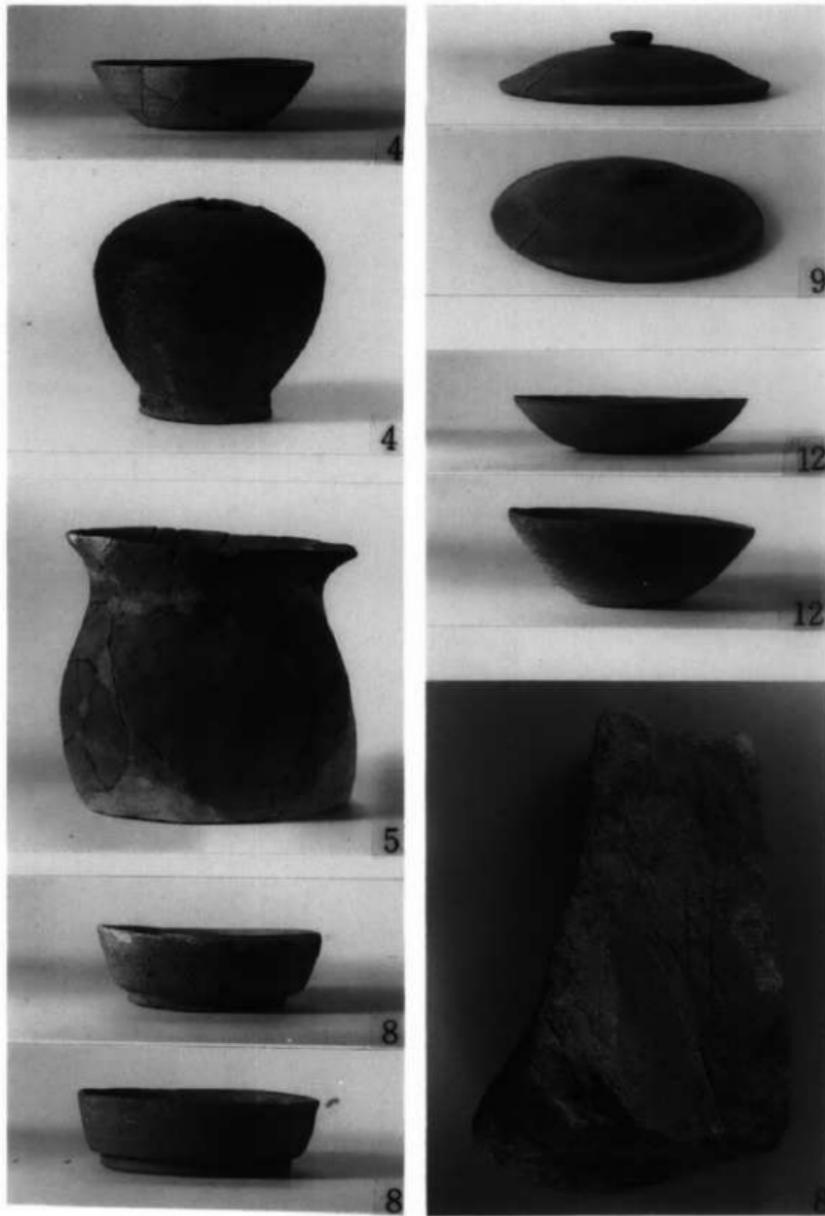


第1号住居址出土遺物（数字は実測図中番号を示す。）



第2号住居址出土遺物（小文字は出土位置番号を示す。15は縁釉）

図版22



第4号・5号・8号・9号・12号出土遺物（番号は出土住居址を示す）



14



13



10



15



12



11



9

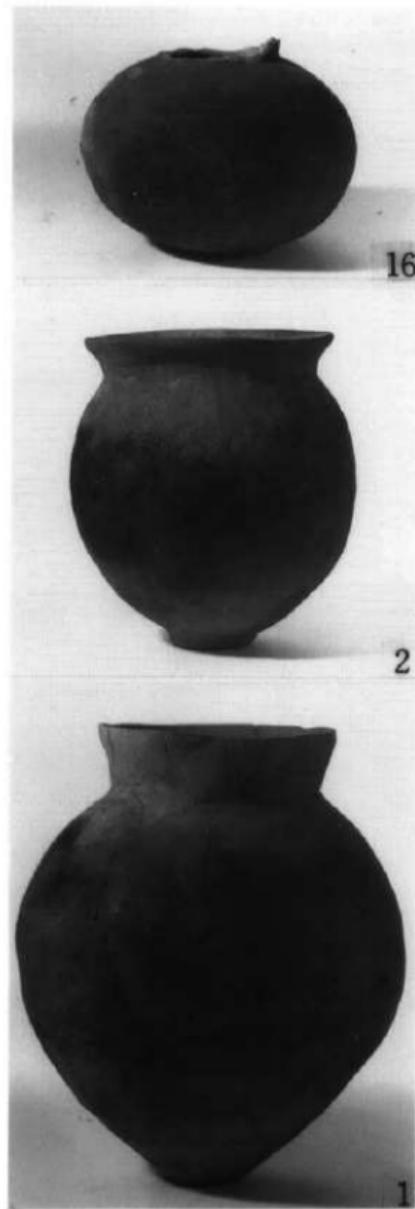


8



9

第7号住居址出土遺物（数字は実測図中番号を示す）

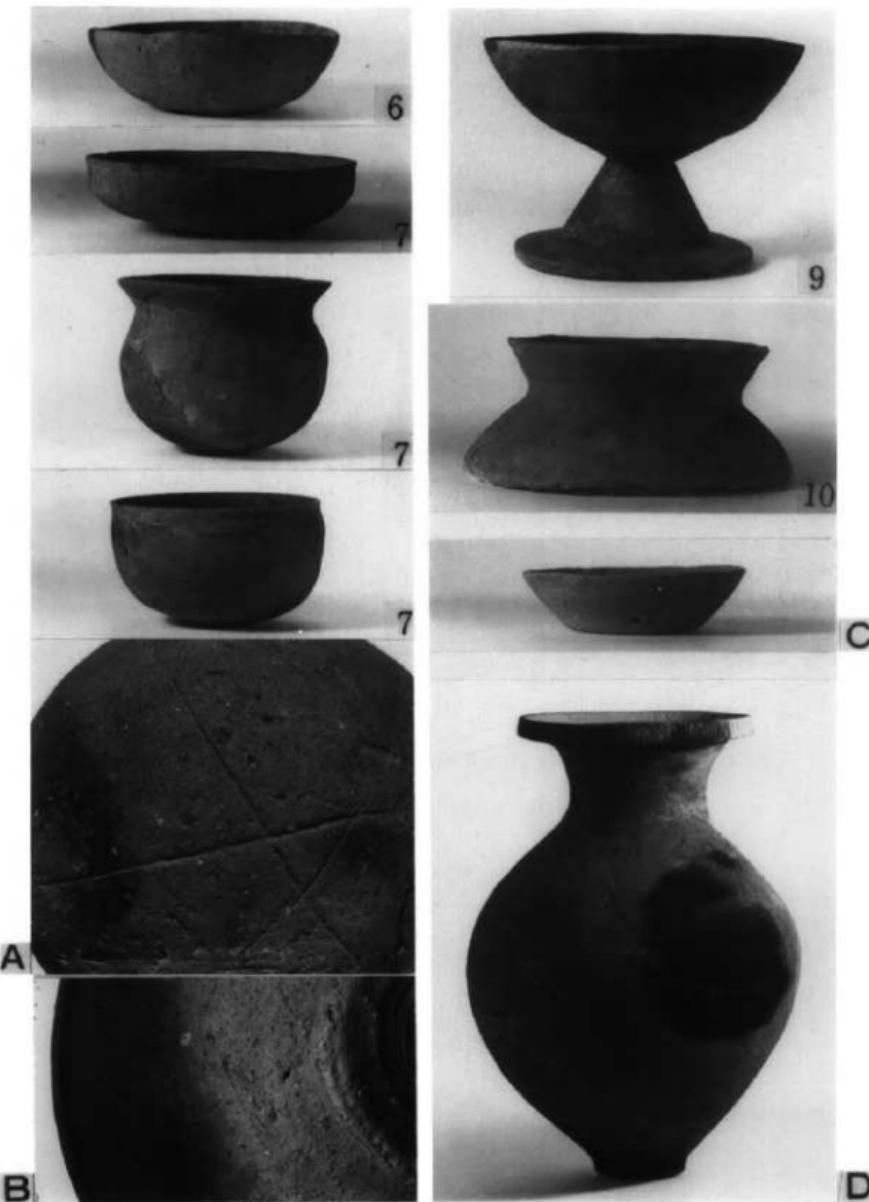


第10号住居址出土遺物（数字は実測図中番号を示す）



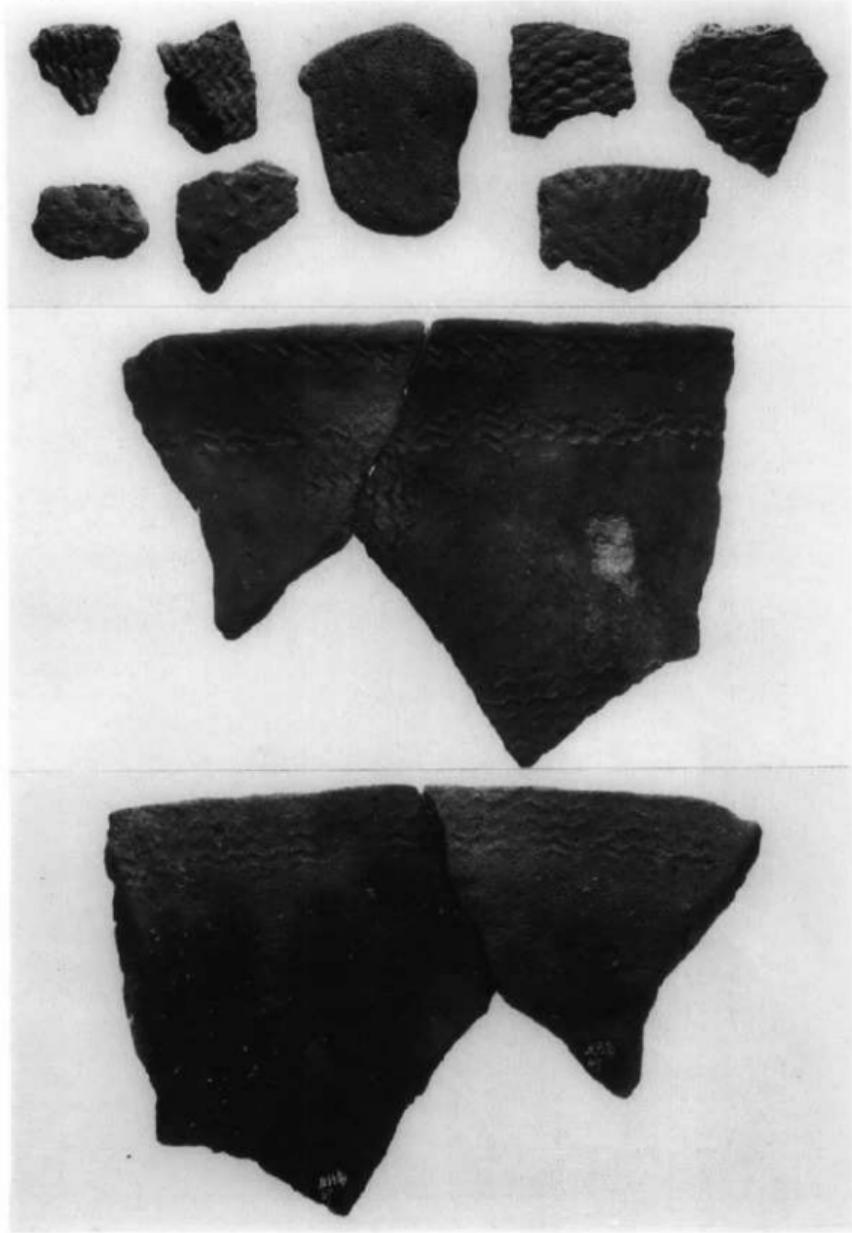
第10号住居址、4号土壤出土遺物（数字は10号住実測図中番号を示す）

11

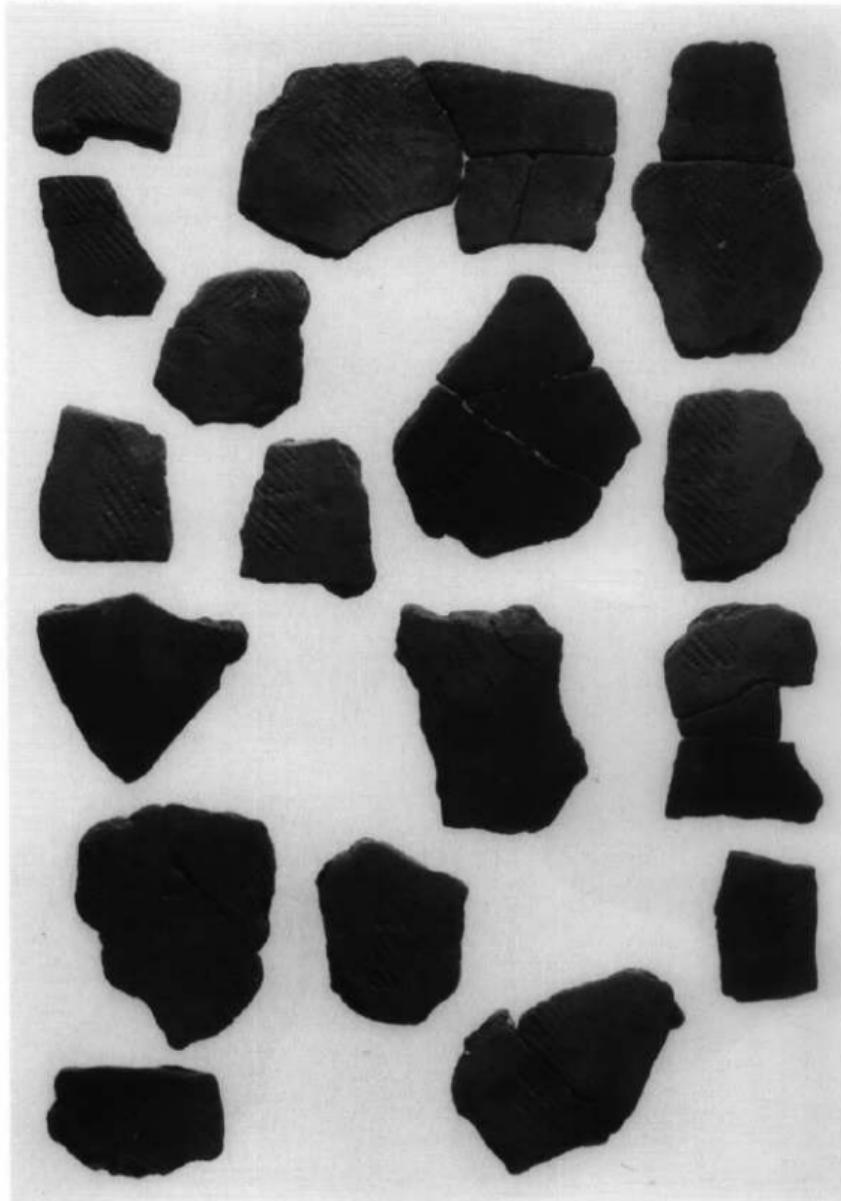


(数字は土壤番号を示す。Aは7号土壤最下段の底部。

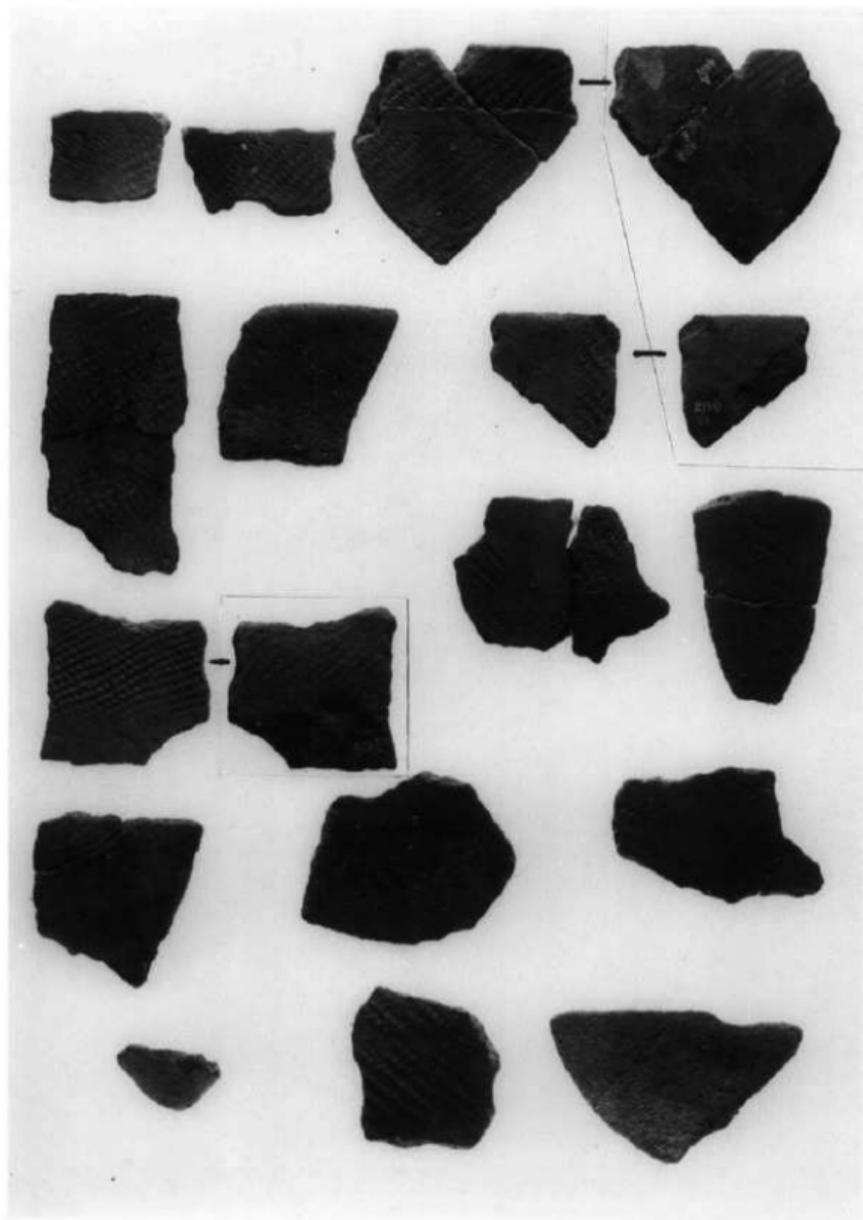
土壤・焼土址壺棺墓出土遺物 Bは1号住6の底。 Cは焼土址4。Dは壺棺墓)



绳文時代早期土器（押型文土器）



縄文時代早期土器（縄文土器）



縄文時代早期土器（その他の縄文土器）

# 反目南遺跡

——緊急発掘調査報告書——

昭和63年3月19日 発行

編集 反目南遺跡発掘調査団

発行 上伊那地方事務所  
駒ヶ根市教育委員会

印刷 駒ヶ根市梨の木5-2  
㈲駒ヶ根印刷

